COBALT-SERIES

XAZSA (ザザ) ver.2

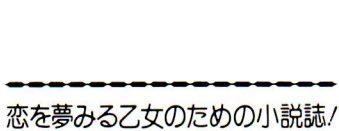


若木未生

集英社

機械人間ザザが早水家に転がりこんで、はや一年。京平はザザを連れ、昔のバンド仲間のライブに出かけた。だがその最中、アリーナの二人の席が爆発。運よく難を逃れたものの、京平は反対に犯人扱いされる始末。ゼロはこの事件がザザを狙ったものであることを告げる。何者かにより優亜のデータが盗まれ、良心システムを持たない新たなマシノイドが造られた、というのだ。その名は〝シグマ〟!!

恋を夢みる乙女のための小説誌!

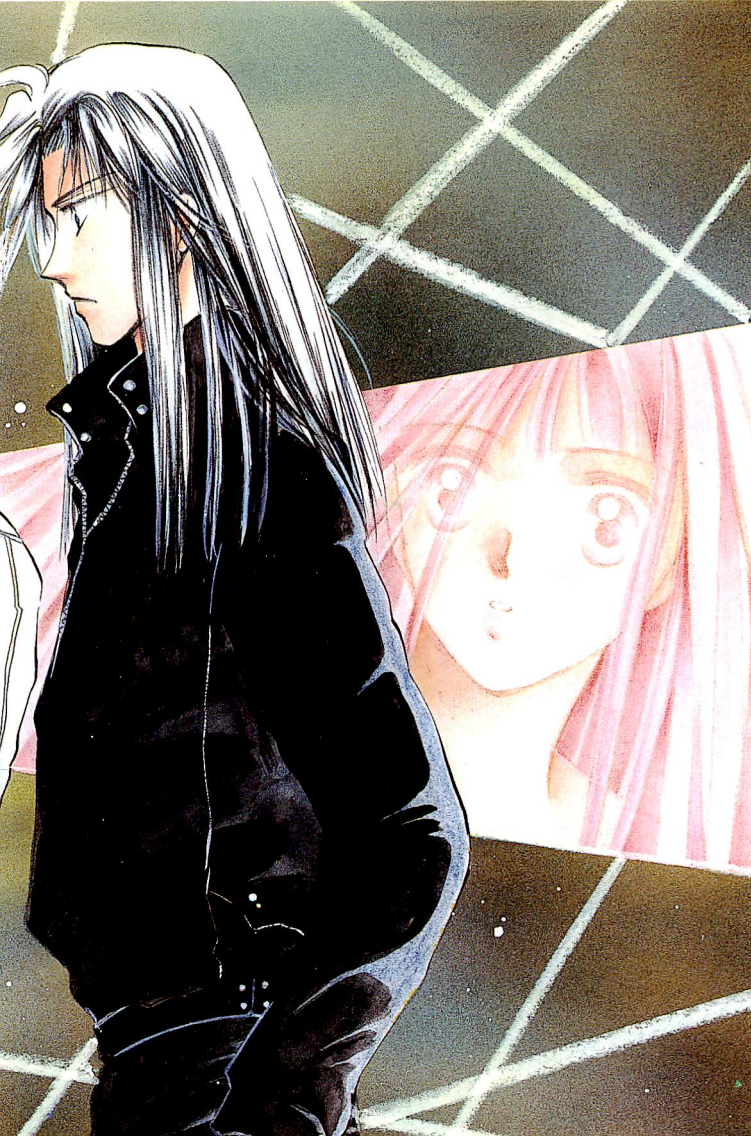


1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売
隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。
あらかじめ書店にご予約をおすすめします。
集英社

XAZSA（ザザ） ver.2



イラスト／田村純子




「京平(きょうへい)ー　今度へたに割り込んだら、
もう七針縫うくらいじゃすまないだろっ！」
「ザザの味方にもシグマの味方にもならず、
手出しもせず、じっと見てりゃそれで満足か」
俺の言葉には、一種の殺気がふくまれたと思う。


「名乗れ。もしもお前に名前があるのなら」
ザザがそう促した。
サファイアン・ブルーの暗殺者は、
その言葉に、なぜか表情をやわらげた。
笑おうとしたのかもしれない。



COBALT-SERIES

XAZSA ver.2

若木未生

集英社

目次

File 4 ファントム・オブ・ジ・アリーナ……13

◉

File 5 そして誰もいなくなった……77

◉

File 6 ロング・グッドバイ……141

◉

あとがき……215

登場人物紹介

ザザ

天才少女・優亜によって製作された国家機密級の機械人間。優亜を愛し、彼女のために人間になりたいという途方もない夢を抱いている。

▶12月1日始動。
身長173cm、
体重74.2kg。



京平

新婚早々に妻の砂夜子を亡くし、以後演奏活動をやめてしまった天才ギタリスト。ひょんなことから、ザザを居候させる羽目になる。

▶12月27日生まれ。
身長179cm。
血液型不明。





ゼロ

優亜がザザを作る1年前に父親と作った機械人間。優亜の護衛兼お目付け役でもある。ザザの人間になりたい」という気持ちを理解できないでいる。

▶2月1日始動。
身長183cm、
体重84.2kg。

シグマ

コンサート会場で爆破事件を起こすなどザザを狙う謎の機械人間。ゼロの説明によれば、ザザとゼロのデータが盗まれて製作されたらしいのだが…。

▶4月1日始動。
身長170cm、
体重70.2kg。

真砂

砂夜子の弟。高２。両親の遺産の豪華マンションに京平と暮らしている。口は悪いが、家事全般を担当し、京平の面倒をみるケナゲな少年。

▶７月７日生まれ。
身長173㎝。
Ｏ型。

優亜

天才少女科学者。その頭脳を悪用されるのを恐れ、普段は国家に保護されている。だが、ザザの一大事にはどこへでも駆けつける元気のいいお嬢さま。

▶２月14日生まれ。
成長期のため
身長体重不明。
ＡＢ型。



イラスト／田村純子

File 4

ファントム・オブ・ジ・アリーナ

1

アリーナホールの前は、黒山の人だかりだった。
開演にはまだ三時間もありやがる。開場もしないうちにホールに来ちまうなんて、俺としたことが二年ぶりくらいの快挙だ。
駅を出たとたんにダフ屋の群れ。色とりどりに着飾った女子供——いや、これは失礼だな——かわいい若者どもが、なけなしの小遣いをはたいてバカ高いチケットに手をのばす。
四千円のセンター席が三万？　たいへんな人気だな。ついこないだデビューしたばっかりのユニットに。
午後の空は、ちょっと心配そうな曇り空だ……。
なんてね。
なんだか笑ってしまうね。ちょっと心配になってるのは、お天道さまだけじゃないってね？
そのへんの茶店にでも入って時間をつぶすか、それとも吹きっさらしの道端で辛抱強く開演を待ちかまえるか。

俺は無意識にコートのポケットに片手をつっこみ、ありもしないライターをさぐっていた。やだねえ、長年の習性ってやつは。

風が寒々しいが、よくよく吹かれてみれば気配はもう春だ。俺はポケットから発見したハニーレモンのキャンデーを口の中に放りこんだ。——決めた、若者らしくここで待ってやる。華やかな少女たちに交じって、いかにも本格的な革ジャン系ロック青年どもがちらほら見えるのが、なかなか頼もしい。ただのミーハー人気じゃないってわけでしょ。

「失礼ですけど……」

遠慮がちな声が聞こえた。

のたっと車止めの杭に寄りかかっていた俺は、二拍くらい遅れて顔を上げた。いや、まさか俺に用があるんだとは思わなくて。

おお、金髪のお兄さんだ。いかにもメタルだ。これは。

「相原、京平さん、ですか？」

あらら。緊張してるのね、お兄さん……。

少々気の毒なくらいガチガチになって。はは、けっこう弾きこんでる奴だな。指見りゃわかる。

「いーえ、違います、残念ながら……」

にんまりと、俺は笑い返してやり、ギター小僧ががっかりする前に小声でつけたした。

「早水京平です。内緒だけどね」

2

「ええっ京平っ!?　マジかよ!?　なんでだよ、来てるなら来てるって言ってくれなきゃ、駄目じゃーんっ！」

「言ったよ、言いましたよ俺は」

哲郎は楽屋つきの椅子からころげ落ちそうなくらい驚いて、いや実際に体半分くらい椅子からずり落ちながら、満面の笑顔でわめきまくった。いくつになっても子供みたいな人だねえ、君も。

「いつ言ったよ!?　知らねえぞ俺はっ。いつ、どこで、誰に言ったよ、はっきりさせなさいよ！」

「いつってねえ……だからほら、ゆうべテレビ見てたら哲が出てきて『明日アリーナでやりまーす、来てくださーい』とおっしゃって、それで俺はカレーを食いながら『おー、行くぞー』と……」

「そんなの言ったうちに入るかっ!!　いつまでもボケたガキみたいな言動に走ってないでっ、大人になれよっ京ちゃんっ」

「てめえに言われたら世紀末かなあ」
「京ちゃん、陰険ーっ。昔からだけどー。やな奴だよー、こいつはー、ああ俺すごく不幸だー、待望のライブ直前にこんな奴と会う羽目になるなんてさー」
本気で頭かかえて嘆いているのが、今をときめくロックユニット『セクション』の看板ギタリスト杉山哲郎だなんて、いったい誰が思うであろうか。思わんぞー、ただ愚痴こぼしてるだけの兄ちゃんだもん、これ。
「……レスポールやめたの？」
楽屋の奥にたてかけてあるフェルナンデス・ストラトモデルを目の端に入れて、俺はさりげに尋ねる。
「うん。カノンのボーカルスタイルと、『セクション』の目指すサウンドを考えたらね、自然とこうなった」
ギターの話をするときだけ、哲もいい顔になる。
「それに俺がグレコ使ってたのって、京ちゃんがストラト派だったから、対抗してレスポール使おうとしてさあ。やっぱツインギターの醍醐味っていうんですか？　せっかくギター二本あるなら違うギターのほうがいいじゃない？」
「……理屈じゃなくてさ、単に俺と同じなのが嫌だったんじゃないの？　それ」
「わはは一、もう時効にしてねっ。だって京ちゃんカッコよかったからさあ、俺、必死になっ

て『真似っこの逆』狙ってたわけよ」

やめなさいよ。そういう照れる話は。

「カッコ『よかった』って、過去形で言いましたね……哲ちゃん」

「あっあっ、京ちゃんステージ行ってみない？　モニターの調子、チェックしてくれたら嬉しいなあ俺っ」

「本番三十分前にモニターいじってどうするの、君は」

「そりゃ冗談だけどっ……でもマジでちょっとだけステージ立たない？」

哲郎は真顔でそんなことを言った。ノリにまかせたみたいに。……でも本気だね。

なんとなくわかる。

……ごめんね。

「初ライブ、おめでとう」

俺はそれを言うためにこんなところまでのこのこ入りこんできたんだった。

じっと俺を見上げて、哲は何か言いかける。

「三列目で、観てるよ」

俺が言う。哲は少し黙る。

「……いやだなあ、一番目が合いそうな場所じゃん。あんまり威嚇してプレッシャーかけないでよねえ」

そして哲郎は邪気のない笑い方をした。まったく……いい奴なのは相変わらずで。
二年近くも会わなかったなんて、嘘みたいだな。今になるとね……。
「なんたって俺は社長にコネがあるからさ。良い席よりどりみどりですよ。ま、せいぜい頑張ってね、哲ちゃん」
「今度から取材席に放りこんでやろうっ」
「燃えるステージ見せてくれなかったら途中で帰るぞー」
「おー、帰れ帰れ」
二年前と変わらない、軽口のたたきあい。
俺はそのまま楽屋をあとにした。開演前の緊張感につつまれたスタッフたちの、間をすりぬけて。
哲郎。おまえだってステージに戻ってきた人間なら、わかってるはず。
あそこには罠がある。はまったらもう最後ってやつがさ。

メガ・ロックユニット、SEXION。
構成メンバーは二人。カリスマ的な魅力を持ち、刺激的な男性ソロ・ボーカリストとして異彩を放ってきた加納光（KANON）。そして元『ツァイト』の超絶技巧ギタリスト、メロウ

なテクニシャン杉山哲郎。

ユニット結成発表以来、話題を独占。昨年十二月、衝撃的デビューを果たす。ファーストアルバムは発売直後、連続七週一位を記録。

デビューライブは、当然の動員を見込んで二万人収容のアリーナホール。チケットは二時間でソールドアウト……。

（プレス用パンフレット解説より）

「つまり、すごい人達なんですね？」

わかっているのかいないのか、我が家の居候（いそうろう）の結論はこれだ。

待ち合わせた三列目の席でなにかやたら熱心に読んでるなーと思ったら、俺が二日前に社長さんからもらってきたパンフである。で、こっちがシートにたどりついたとたんの第一声がそれ。あのなあ。

「……おまえさんにかかると、道端の猫だって『すごく』なっちゃうんだよね」

「えっ、だって……だってすごいじゃないですか！　京平さんのお友達なんでしょう？」

「……俺のお友達ってだけですごかったら、おまえさんだってとってもすごい人なんですけど」

「えっ、そうなんですか？　あ、なんか嬉しいな……あはは、僕、嬉しいです」
そこで素直に喜んでどうする。
気がついたらこいつと――ザザとつるみはじめて、なんとすでに丸一年、である。
まあこの人も、変わったというか変わらないというか成長したというかボケっぱなしというか。
瞳ちゃんは現在、修行の旅（全国ライブハウス巡りだそうな）に出てるし、真砂くんは元『ツァイト』のメンバーなんか眼中にないだろうし、いざチケットを渡す相手っていったらこの人くらいしかいなかったのよね。実際、どこまでこいつにサイケでファンキーなロックがわかるかは謎ですが。
「なんかなー、近ごろ我々、何かっちゃ一緒にいる気がするんだけど。隣を見れば常に同じ顔ってのもねー、色気がないよねえ」
「京平さんがすごく暇だからじゃないですか？」
「……」
無邪気に本当のことを言わないように。
「どーっせ暇ですよ。ぐーたらしてますよ。春眠暁を覚えずですとも、ええ」
「あの、京平さん、いじけないでくださいっ。別にわざといじめようと思って言ってるわけじゃ……」

「へえ、ほお、ふうん、そう」

「京平さんっ！　お願いだからそっぽ向かないでくださいっ！」

……なにもそんなに力いっぱい反応しなくたって。この人は。

正直な話、隣を見れば常にザザがいるってのは、ちょっと誇張した表現である。

一年前、『人間になりたい』なんて突拍子もない野望を抱いて、我が家にころがりこんできた機械人間。

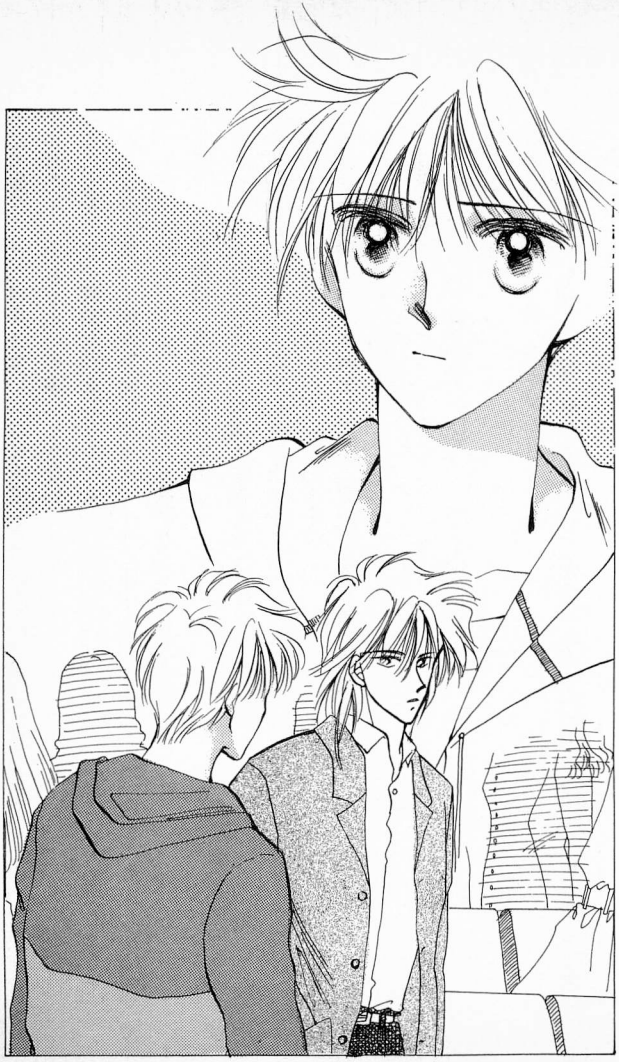
あの頃はなんにも知らない、なんにもできないただの世間知らずだったのにね……。

今となっちゃ料理の腕はあがったし、瞳ちゃんの代理のバイトも堂々とこなしてるし、時間があれば一人で街に『勉強』にでかけるし、気がつくと俺は我が家――ばかでかいマンションなんだ、これが――でひとり、ぼーっと転がってくだらないテレビを見ていることが増えた。昼間は真砂くん学校だし、こいつはバイトで、しかも俺ときたら夜遊びしなくなっちゃったから昼には目が覚めてしまうという優等生ぶり。

暇、なのかもね。確かに。

「京平さん？」

少し心配そうに、問いかける声が届いた。いかーん、考え事にふけってしまった。ふりむくと間近からザザが見ている。こいつの目はいつも正直だ。俺が今なにを考えていたのか、鏡みたいにはねかえってきそうだ。



造り物？　そうは思えない。なにも変わらない。俺は神様に造られて、こいつは天才少女に造られた――それくらいの違いしかないんだろうね。

「なにもそこまで深刻な顔をしなくてもいいでしょうに。面白いからつい苛めてしまうぞ」

にんまりと笑って俺が答えてやると、ザザはまず目をまるくして、そして顔をしかめて、それから溜息をついた。……ようやく冗談が通じてくれたかな。

「京平さんの言動は、奥が深すぎて困るんですよ……」

「悩め悩め。そうやってみんな大人になるんです」

「無責任に言わないでくださいっ」

「責任ならとろうじゃないの、いくらでも」

それこそ無責任に俺は胸をたたく。責任なんてとろうじゃないの、いくらでも。どうせ俺にかかってる責任なんて爪の先……。

ああそうか。

もうすぐ、俺の背負う責任がひとつ、消えるんだっけ。

「約束してくださいね」

恨めしげにザザが言う。え？

「責任、とってくださいね。僕がひねくれて成長しちゃったら京平さんのせいなんですからね」

「……あのなあ」
その台詞を吐いてる時点ですでに危なくないか？　おまえさんの性格。
「あ、そうだ、たしか売店でパンフレットとか売ってましたよね。真砂くんにお土産、買ってきます」
ザザは席を立っていく。なんだかなあ。引き際もうまくなっちゃって。
「開演時間すぎてるぞ」
それに真砂くんに土産なんかいらんぞ、と言いかけて、俺はあきらめた。小柄な後ろ姿は、すでにこっちの声が聞こえないところまで行ってる。
真砂くんに『ツァイト』関係の話は避けたいんだけど。
……でもそんなのは、俺が勝手に思ってるだけなのかもしれないね。
もう、とうに昔の話なんだから。あのバンドのことは。
「？」
ギシッと隣のシートが揺れて、いくらザザにしたって早いなと思いつつ俺はそっちに目をやった。けっこう背の高い影――。
「あっ……」
見知らぬ奴が、目が合うなり口ごもった。誰だ？
誰かと似てるな。どこかで見た顔。勘違いかな。でも知らない奴だよな。二十歳そこそこ

の、お兄さんがひとり。

「すみません……ここ、三列の二十六じゃないんですか？」

お兄さんはザザの席を指さす。ああなるほど、シートを間違えてるわけだ。

「それ、ブロックが違うんじゃないかな。三ブロックならあっちの左側」

「あ……そうか、これ、列順じゃないんですね……」

お兄さんは素直に納得。円満に解決。ま、よくあることと言えばよくあることである。ぺこりと礼儀正しく頭をさげて——あっ、わかったぞ、誰に似てるのか——お兄さんは潔く去ってゆく。

青いピアスが印象に残った。青い服。青いピアス。サファイアン・ブルー。男のくせに似合うこと自体が、ちょっと珍しい。

「誰かと話してたんですか？」

開演ギリギリで舞い戻ってきたザザが、席につきながら尋ねた。

「うん、誰かさんのそっくりさんとね」

「えっ？」

その瞬間、客席が真っ暗になった。わきあがる歓声と悲鳴。嵐のようにまわりじゅうが椅子から立ち上がる。いきなり総立ちか。

俺はしょっぱなから立ってやるようなことはしない。たとえ三列目にいようが、後列の女の

子たちに睨まれようが、演奏してるのがかつての相棒だろうが——。
本当の『痺れ』なら、座ったままでも、目を閉じていてもわかる。
それが音楽なら。
「凄いですね」
ザザが隣で呟く。こいつもなぜか動かないんだ。俺につきあってるのかどうかしらないけど。
確かに、この、客たちがステージに向ける期待は凄い。なにもかも呑みこんでいきそうな、正体不明の熱波。
効果音。煽られる波動。
そして——。
不意打ちでボーカルが声をたたきこんできた。アカペラで。真っ白な空間を歌だけで切り裂いて。一瞬の攻撃で二万人を撃ち殺した——。
それが来たのは、その直後のことだったと思う。

何だ？
がくん、と全身の血が足元に落下したみたいに、軽いショックがあった。どうしたんだ？

どうしたんだ、俺は。

喘ぐようなギターの音はたしかに耳に届いている。激しいライティングの照り返しは影の濃淡でわかる。なのに何も聞こえない。何も見えない。

冷たい指先。心臓の鼓動はやたら早くなっている。血液の流れがやけにうるさい。何だ？貧血？　俺は今、座っているのか。まだ座っていられるのか。

揺れるアリーナ。音の洪水。ねじこんでくるボーカルと轟くバスドラム。

どうなってるんだ？　……誰か。

誰か教えてくれ。俺は今どうなってるんだ？

「京平さんっ――京平さん!?」

耳元で叫んでる誰かの声。とても遠くに。

「大丈夫ですか？　気分が悪い？　そうでしょう？　僕の言ってることがわかりますか、聞こえて……京平さん、聞こえますか!?」

轟音のなかで精一杯、俺のことを呼んでいるのはわかる。

強引に手がつかまれる。俺の右手。震えてるのか、俺の手は。中毒患者でもないのに。中毒？　中毒といえば禁断症状……幻覚……他愛もない連想……。

「京平さん、出ましょう。楽にして、僕につかまっててください。無理しないで。いいですね？」

いやだとかなんとか、俺は答えた気がする。
途中で帰ったりしたら、哲郎になんて言い訳したらいいんだ。俺は帰らないぞ。畜生、この馬鹿力っ。こいつ……俺を小わきに抱えてひきずりやがって……恥ずかしいじゃないか、大の男が、それもこの京平さんが、コンサートのしょっぱなで、退場、なんて……。
「京平さんっ！　意地と自分の命とどっちが大事なんですか!?」
かなり本気で叱られた。
命までかかってたまるか。こんな、わけのわからない『発作』ごときで……。
ロビーに出るドアまでたどりついたところで、俺はなんとか顔を上げた。スパークする照明のなかで舞いながら叫ぶ、ボーカリストの姿が目に焼きついた。

3

「呆れた……アタマから失神者が出たっていうからたいした話題になると思ったら」
「だーれも失神なんかしとらんでしょうに」
「腰をぬかしたのよね？」
ふふん、と意地悪く笑って、玲子――じゃなくて社長さんだ――が言った。
何か言い返してやりたいけど、救護室のベッドの中からではどうにもカッコがつかない。そ

れに、コンサートが始まってまだ十五分もたたないって大事なときに、事務所の社長がわざわざこんな救護室まで顔を出してくれてるわけだし、文句の言えるような立場じゃございません、ええ。

「玲子さんは昔から、言葉と本音が違うんですよね」

反撃はせいぜいこの程度。

「あら、これ以上にない真実をのべたつもりなんだけど。腰をぬかしたんでしょ、素直に認めたら？　いい音楽から遠ざかってた反動よ。老化が進むのって早いわよ」

「あのね。もう少し深刻に心配してくださってもいいんじゃないの？『早水京平、原因不明の発作で倒れた』なんて音楽雑誌の見出しになっちゃう大事件でしょ？」

「見出しにしてほしかったらいくらでも業界に手をまわすわよ」

そいつは勘弁してもらわないと。

轟音うずまくホールを遠ざかったら、例の中毒症状もどきは消えてしまった。ただ、原因不明ってやつがいかにも怪しいってことで、コンサート中は絶対安静にしてろというのがお医者さんの命令である。二時間も安静かー？　つまらないではないかっ。

壁ごしに、ドラムの振動や歓声のかけらが聞こえてくる。惜しいなあ……。

俺が席を立ったと聞いたとたんに駆けつけてきてくれた（要するに、心配してくれてることはわかるんですけども……態度がそれを裏切っている気がする）エディス・コーポレーション

の社長は、新藤玲子さんという妙齢の女性である。
「哲郎には内緒ね……って、無理か」
「そうねえ、哲ちゃんはあれでも両目の視力が一・五だっていうし」
「ああもう我々の友情は終わったか。がーん」
「勝手に終わらせないように。ところで、京ちゃん……さっきから聞きたかったんだけど」
ショートの髪をふわりとかきあげつつ、玲子さんは俺の隣に目を移す。
「この、今生の別れみたいに悲壮な顔して、ひしっとおそばに控えてる坊やってどこから連れてきたの？」
もう少し言いようはないのか!?
なにせ俺がぶっ倒れることも珍しいし、真砂くんのフォローもない状況っていうんで、ザザはなにやら使命感に燃えたらしい。なにがなんでも安静にしていてもらいますっ、と宣言して、俺がふらふら動き出さないように先ほどから監視を続けているのである。これじゃまるでお社の前の狛犬みたいだぞ。
「ああ、ええと、こいつはうちの居候で」
「ザザ、です」
ザザ野ザザ太郎と呼ばれるのによほど懲りたのか、俺が全部言いおわらないうちにザザが名乗る。

「ふうん……何なの、弟子でもとったわけ？」
「まあ、なんとでも好きに解釈してくださいな」
説明のしようがないんですよ。この人に関しては。
「ザザ、この怖いお姉さんはね、俺の昔からの天敵で」
「悪かったわね、怖いお姉さんで」
「天敵なんですか？」
「そりゃもう大変な天敵で」
「真に受けないようにね、坊や。こちとら京平が高校出たばっかりの頃からのつきあいなんだから。知ってる？　このぐーたらな男がかつては天才『少年』ギタリストと呼ばれてた事実」
「いつの話じゃ、それはっ」
「いつの話なんでしょうか、それは……」
「深刻に受け止めるな、おまえもっ」
「いつの間にか昔話になってるところが悲しいわね、京平？」
にっこりと笑って、玲子さんが仰せになる。はあ、いかにもそのとおりで。
俺が高校出たばかりって言ったら何年前だ？　あの後、玲子さんに出会って、当時はまだ玲子の親父さんが社長で、そのつてでＺＥＩＴ――ツァイトの連中を紹介してもらって、それから五年間……五年もバンド一本槍だったか。

そのＺＥＩＴが終わっちまって、もう、さらに二年。
二年か。そんなもんかねえ。
「もうすっかり過去の人でしょ。誰も憶えちゃいないわよ、『クールな情熱家』『相原京平』の『稲妻のごときプレイ』なんて」
「えええ、申し訳ございませんねえ」
君の口が悪いのも、昔から相変わらずですよ、玲子さん。とんでもない表現力をお持ちだし。パンフレットで哲郎のことを『メロウなテクニシャン』なんて書いたのも玲子だな、さては。
「時に京平、うちの稼ぎ頭の『セクション』の話題だけれどね」
「すみませんね、稼いでなくて」
「態度が卑屈だわね。別に初めから京平の稼ぎなんて期待していないから安心して。それはともかくとして、この春のライブツアーが終わったら『セクション』の二人はしばらく日本から消えるわよ」
……ふうん？
けっこう思いきった戦略だね、それは。
「一発かぎりのお祭りユニットとは思われたくないのよね。だから間をおかずにセカンドアルバムを作って、しかも売りに売りまくるという心づもりなの」

「なるほどね。いいんじゃない？」
「レコーディングはロンドンに決定したわ。売るからには、金と時間はかけるわよ」
「そりゃ頼もしいねえ」
「他人事だと思って聞いてるわね、京平」
は？
他人事じゃなかったら何なんだ、と俺が聞き返そうとした、その直前。
ドン、とホールのほうから鈍い重低音が響いてきた。バスドラムの音にしちゃでかすぎる。効果でもない。何だ？　なにか変だ。
玲子は気づかなかったらしい。やかましいホールの中でのことだ。だけど……待てよ。
「玲子さん……」
「え、何？」
「演奏が止まった」
この音のとぎれかたは、不自然だ。ＭＣじゃないはずだ。俺が視線で促してやると、玲子もようやくホールの様子に不穏なものを感じたようで、さすがに社長らしいピシッとした態度で救護室を出ていった。
「変な音がしました……爆発みたいな」
ザザも耳の良さなら折り紙つきだ。爆発？

「見てこれるか？」
「あっ、はい、行ってきます。あのっ、京平さんは動いちゃだめですからね！」
わかりましたってば。
まあ、まさか哲郎がノリのあまりにアンプをステージ下に蹴り落とした、なんて馬鹿なオチはつかんだろうなと思いつつ。
演奏が中断するほどのトラブルは、ほとんど考えつかない。あいつにかぎって……。
「――京平さん」
素早い身のこなしで、ザザが救護室に駆けもどってくる。忍者になれるぞ、こいつ。
「大変です……！」
「誰かステージから落ちたか？」
「いえっ……あの、客席が爆発したんです！」
あ？
いきなり意表をつく答えが返ってきた。想像できるか？　コンサートの最中に客席が爆発するか、普通？
「……何かの間違いか、それは？」
「わかんないですけど、あの」
言いかけて、ザザは少し困ったように沈黙した。よほど面倒なことを口にするときの、言葉

を選ぶときの仕種だ……。

「哲に何かあったのか!?」

「あっ、いいえっ！」

俺が尋ねると——いや、怒鳴りつけたんだな、今のは——ザザは勢いよく首を横に振って、そして言った。

「爆発したの、三列目なんです。ちょうど、僕たちの、席だったんです……」

4

怪我人を七人ほど出して、コンサートは中止になった。後日、振り替え公演がおこなわれるそうだ。ま、重傷の患者が出なかったのは不幸中の幸いってやつだけど。

「しかーし、我々がおとなしくあの席に座っていたら今頃ふたりしてオダブツってやつですよ。にもかかわらず刑事さんの追及がしつこいったらないんだ。重要参考人だってさ、俺ってば」

「爆破犯人になれるほど根性ないだろうが、京平なんかさあ」

真砂くんは非常に的確な判断をくだしてくれる。あの刑事さんもこれくらいわかってくれる人だったら、我々はさっさと帰って真砂くんお手製の晩メシにありついてたのに。

青山のマンションに帰りついたのは、実に夜中の十二時過ぎである。それでもしっかり熱い味噌汁が出てきちゃうところが、さすが真砂くんなんだよね。いつもすまないねえ。

「なんだか、京平さんに失礼な質問が多くて……」

ザザは複雑な顔をしている。普段はあんまり怒ったりしない奴なんだけど、今夜のことではけっこう憤ったらしい。俺は俺で、ザザの身元についてつっこまれたくなかったもんだから、ひたすら『これは義弟の早水真砂くんです』と大嘘ついてごまかさなきゃなんなくて、とにかくそっちのほうに気を取られて怒ってる暇がなかった。

仕方ない話ではあるんだ。人気ロックユニットのコンサートで爆破事件があったってだけで、立派な芸能ゴシップネタなのに、その爆弾をしかけたのがかつてのバンド仲間だったりしたら……確かにいろいろと面白い記事にはなるだろう。

『本当に、あんたに仲間の成功を妬む気持ちがなかったと言いきれるのか？』

そんな質問がいくつもあったな。むしろそういう発想ができるセンスに、俺のほうが感心してしまうような。

「いやあ本当、世の中、いろんな考え方をする人がいるねえ……」

「ちょっと待てよ、京平っ。のんびりかまえてていいのかよっ、そんな馬鹿にされてっ」

「別にー。だって結局は、俺と『セクション』のメンバーとが、きちんとわかりあってりゃいいんですよ。外野がどう騒ごうとね」

哲郎とも玲子さんとも、そのへんのことはしっかり筋を通してある。俺自身があいつらにやましい心を持ってなきゃ、それでいいわけでしょ。

「大事なのは、誰が何のためにあんな爆弾騒ぎを仕組んだかってことさ」

ずずず。豆腐の味噌汁を空にして、俺はようやく人心地。あーあ、こりゃしばらくおとなしくごろごろしてるが勝ちかな。

ふと気がついて真砂くんを見ると……お？

「……真砂くん、俺の言動、どこか妙でしたか」

「すっげえ妙。気味悪いくらい建設的かつ現実的な意見だぜ、今の発言って」

大まじめに何を言うかと思えば。

「それじゃ俺がいつもただの後ろ向き野郎みたいなんですけど」

「ぬけぬけと言ってんじゃねえっ。……だけど早水の親戚筋の連中って、今のところ俺のほうにはなにも手出ししてこないだろ」

うーん。こういう時に、命ねらってくる心当たりがありすぎるってのも考えものだよね。

「どこかの物好きが間違えて京平なんかに流れたんじゃねえか？　だったら馬鹿だよなあ、そいつら」

「馬鹿だよねえ。どうせ俺なんかもうちょっとで用済み――」

……ちっ。やばかったな、今のは。

ザザが隣できょとんと目をまるくしたのは、なんとなくわかった。
口に出して言っちまったことは、仕方がない。今のなしってわけにはいかない。どう考えても、今の発言は俺のミスである。
真砂くんにどう思われたとしても、ともかく俺が悪い。
「……七月だぜ」
ぽつりと、無表情に、真砂くんが言った。
「勘違いすんなよなっ……七月のどこが『もうちょっと』になるんだよ」
風呂わかしてくる、と言い捨てて、真砂くんはダイニングを出てゆく。俺が思っていたよりも……それ以上に……気にしていたんだろうか、やっぱり。
さすがに忘れてなんかは……。
「七月って、何がある月なんですか？」
控えめに訊いてくるザザに、俺はわざとらしく肩をすくめた。
「七月？　七月っつったら七夕だよねえ」
「……あの……」
「七夕っつったら真砂くんの誕生日なんだよね」
何か抗議しようとしていたくせに、その一言でザザは口をつぐむ。
わかってくれたかな。

でもまあ、念のため。さらりと。

「今年で真砂は十八だからね。十八になっちまったら保護者はお役御免って、そういう約束があるんですよ、昔から……」

「――――」

あくまでさらりと言ったつもりなんだけど。

がたん、と椅子を鳴らしてザザはこっちに向き直った。ほら。だからおまえさんにはこういう話、避けておきたいんだ。真っ正面から受けとめるから、そうやって。

「……そんな、それじゃ……京平さんはどうなるんですか？　真砂くんとは他人になっちゃうんですか？」

「別にいきなり絶交したりはしないと思うけど」

「そうじゃなくて……！」

俺が話の焦点をそらしてるのはやっぱりバレてる。必死な目で、ザザが尋ねた。

「京平さんは……ここから出ていくつもりなんですね？」

……さあ、どうだろうね。

先のことなんて、俺はこれっぽっちも決めちゃいないけどね。

「まあ、その時になったら考えようかなと」

責任感のかけらもない、俺の見解。

もともと俺はひとりだから。どんな所に行っても、現在と同様、自堕落な生活をくりかえすだろう。そのうち腐って発酵しちまうかもしれないが。

「とにかく、俺の責任なんてのは、砂夜子さんの代理でしかないわけで。役目が終わっちゃったらいつまでも真砂くんの財産を食いつぶすわけにはいかないでしょ」

「……そうですか」

ザザが呟いた。

「寂しいです」

言ったきり押しだまって。

あのねえ……そこで泣くなってば。おまえなあっ。

少しフォローしなければと俺が言葉を選ぼうと——したというのに。

「だーっ!?」

バスルームからかっとんできたのは真砂くんの悲鳴である。何なんだっ。

なにせこのだだっ広いマンションの中、バスルームまでのみちのりは遠い。声だけじゃ何があったのかわからない。いくらなんでも滑ってコケてたりなんかは、あの真砂くんにかぎって。ということは。

予想にたがわずザザの反応は早かった。ひと足どころか四足ぐらい遅れて俺もダイニングを駆け出す。ザザにかないっこないのは当然なんだけれども。しかしこういう局面で負けるのは

ひそかに口惜しい。

滑ってコケてろよ、真砂！

ばんっ、とドアを勢いよく開いて——正確にはたたき割ってたみたいだけど——ザザがバスルームに踏みこむ。俺はそれに続いて。

だが真砂くんは残念ながら風呂場で滑ってコケたってわけじゃなかったらしい。

ありがたいことに、誰に命を狙われたってわけでもなかったようだけど。俺の見たかぎり。五体無事。ああ心臓によろしくない。

原因は、三分の一ほど熱湯のたまった浴槽の内側にいた。おい、天井の格子板がはずれてるではないか。こらこらっ。

びっしょり濡れた髪からぱたぱたと滴を落としつつ、妙に生真面目な面持ちで、（まあ本人もギャグにしたくなかったんだろうね）ぎごちなくそいつが口をひらく。

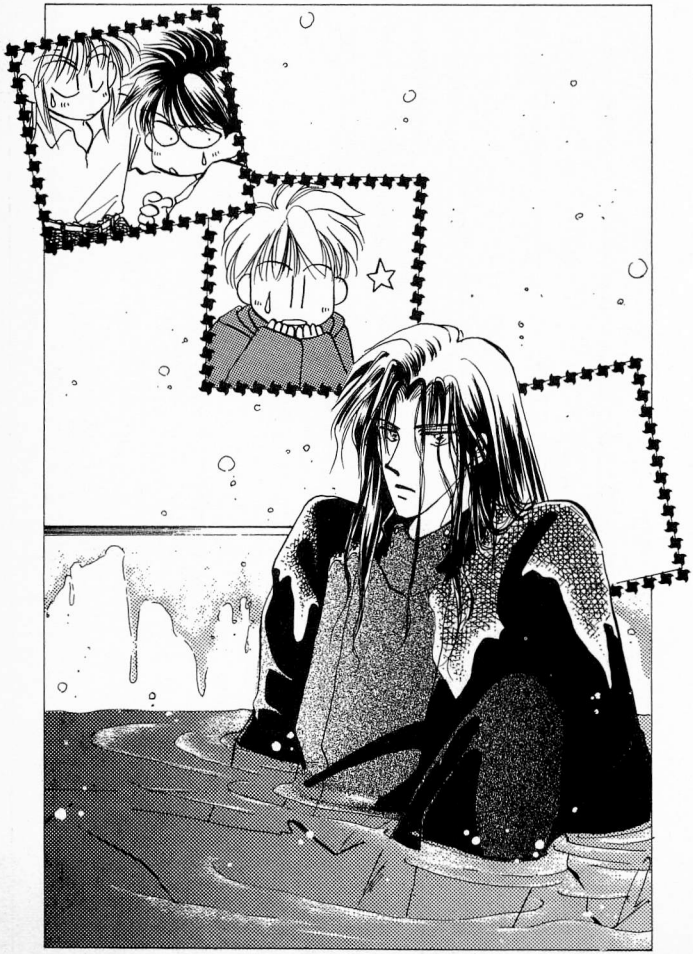
「換気システムから侵入させていただきました」

つまり排気孔からうっかり湯船に落っこったんだな。能書きよりさっさと風呂から出たほうがいいと思う。

「この接触を、外部の者に感づかれたくなかったものですから」

「だ、大丈夫ですか？　ゼロ……」

おそるおそるザザが気遣う。相変わらず黒ずくめのライダースーツ姿で、たちこめる湯気に



まみれ、それでもキリリとクールな態度に美意識をのぞかせて、ゼロは静かに首を横に振った。

「愚問だ、ザザ」

カッコつけてるのはわかるが要するに、大丈夫なわけないだろうがこのボケ、とゼロは言いたかったらしい。……素直じゃないんだから、この人も……。

5

結局、真夜中のダイニングにて。

「本日は、お嬢様の代理でまいりました」

あらたまって、ゼロが切り出す。こいつってば背が高いもんだから、ずぶ濡れライダースーツの代わりといったら俺の服しか入らないでやんの。似合わないというよりは、まあ……たまにはジーパンも可愛いじゃないのって感じか。ピンクのシャツを貸しちゃったのは我ながら意地悪だったかなあと思うけど。

「研究所の誰が我々を監視しているのかわからないうちは、優亜さまは動かないほうが賢明なのです。私自身が、そうすることを優亜さまにお勧めしたのですが」

話が見えないぞ、いきなり。

「監視って……？」

ザザが尋ねる。見事にそっちのことは無視して、ゼロは話を続ける。

「本来ならばこれは我々だけの問題なのですが、アリーナホールの爆破事件によって、すでにあなたをこの件に関与させていることが明らかとなっていますので、ご説明するのがやはり道理というものでしょう」

あなたってのは要するに俺のことか。で、我々ってのは誰のことなんだ？

アリーナの爆破のことがゼロの口から出るとは思わなかった。あの事件ってのは俺の昔のバンドがらみか、でなきゃ真砂くんの財産相続関係か、そのどっちかのつながりしか思いつかないではないか。

この件に関与？　どの件だ、それは。

ともかくゼロの話は根気よく聞くしかない。これでもこいつはこいつなりに筋を通そうとしてるんだよね。

「実は、優亜さまのデータがひそかにコピーされていたことが露見しました。それも三重のコピーガードを巧妙に破っている。優亜さまでなければ、コピーされたこと自体、見過ごしていたかもしれません。あの手口から見て、内部の者の犯行と考えるのが自然です」

「データが盗まれたってわけか？」

「ゼロ、何の……どの記録が盗まれたんですか？」

再びザザが尋ねる。どうやら深刻な話題らしい。
今度は、ゼロもザザのことをふりむいた。
「私とおまえのデータだ、ザザ」
「……」
ザザが両の目を見開く。
……何だ、そいつは。機械人間のデータってことか？
「おい、それって国家機密中の国家機密じゃなかったのか？」
「そのとおりです」
俺の質問に、ゼロはあっさりと頷く。そんなおっとりかまえてていいのか。
「盗まれたものは盗まれたのです。今さら動揺しても仕方がありません」
「ってことはつまりどういう話なんだよ？」
俺の三倍くらいはせっかちな真砂くんが先を促す。
「隠密裡に、新たなマシノイドが製作されているおそれがあります」
ゼロの返答は、そういうことだった。これが本題か。
「製作？　そんな実用レベルの情報まで流れてしまったんですか？」
「くどい質問はやめてもらいたい。文書化されたデータはすべて、だ」
うるさげにザザを見て、ゼロが言う。どうもこいつらはなー……なまじ同じ仲間だからこう

いう関係になっちまうんだろうか。いじめっこの兄貴といじめられっこの弟のようである。抑圧された弟がマジになったら怖いぞ。

「問題は、文書化されていないデータ、つまり優亜さましか造れないシステムが、その新たなマシノイドには欠けているという事実です。わかりますか？」

「じゃあ新しい奴をつくってもまともには動かないってことか？」

「いいえ」

ゼロはかぶりを振った。

「あれだけのデータがあれば性能的には完全なものが製作できます。少なくとも、我々と同じ程度には。欠けているシステムは、外見からはわからない部分です。それがもっとも厄介なのです」

もしかしてすごく迷惑な奴だったりするか？　それは。

「我々には、軍事目的などで利用されないように、はじめから歯止めにあたるシステムがそなえられています。これは浅見博士の考案した独自の『良心』システムです。しかしこのシステムは他の機械には流用できない。なぜなら、このシステムそのものが、優亜さまの存在を前提とするからです」

冷静にゼロが続ける。

俺はザザを見た。それまで意識していなかったからだ。こういう話を……つまりどこまでも

おまえは機械なんだって思い知らされる話を……どんな風にザザは聞くのか……。

「我々は優亜さまをすべての価値観の基準とするよう、製作された時点で定められています。一般に『良心』や『倫理』と呼ばれている認識も、優亜さまの存在を下敷きとして生まれることになっています。ですから優亜さまが目の前にいるかぎり、私たちが自我を失い、他者の命令に屈することはありえない。浅見博士の偉大な点は、たとえ優亜さまのご命令でもそれが優亜さま自身に悪影響を及ぼす命令であれば拒めるよう、すなわち優亜さまを単なる暴君にしないため、私たちのシステムに『判断力』を加えてくださったことなのですが」

唇を結び、ザザはまっすぐにゼロを見つめている。

お嬢ひとりを価値観の基準にするってのも、けっこう危ない世界という気がするが。

ザザもゼロも、いつだってお嬢さん最優先で思考するように、生まれつき決められてるってことだろう。……俺だったら複雑だな。もしもそんな立場なら。

生まれる前から決定された相手を、約束どおり好きになったからって、そんなこと喜べるか？　お嬢のほうだって、そんな方法で好きになられて本当に嬉しいか？

「新たに造られたマシノイドには、そのストッパーが存在しません。どのような目的に使われてもおかしくないし、どのように暴走しても不思議はない」

「優亜を傷つけるかもしれない……？」

ザザが確認する。抑えた声で。

「可能性ならある」
「可能性だけで充分だ」
さらりとザザは呟き、なにか考えこむような顔つきで脚を組んだ。いつも行儀のよすぎるこいつにしては、めずらしい仕種だ。
「現実に、その新しいマシノイドってのができあがっちまってる証拠はあるのかよ？」
「証拠はありません。確率は五分五分です。研究所の内部を優亜さまが独自にスキャンした結果、所内にマシノイドの反応は検知されませんでした。しかしデータが盗まれたのがいつなのか、正確な時期がわかりませんので……それは、つい数日前かもしれないし、一年以上前かもしれない……ですから、可能性のひとつとして、すでにその『新作』が野放しになっていることも考えられる」
真砂くんに答えてから、ゼロは俺のほうを向いた。
「所内の誰がデータを盗んだのかは、これから調査します。その前に、重要なことをひとつ」
「俺に？」
「ええ。今日の爆破事件のことを知って、私にはある仮説が構築できたのです。つまり……そのマシノイドが実在するとすれば、奴を『回収』できる実力をもつのは、私とザザのふたりきりです。奴がそれを拒もうとした場合、先手を打って我々を破壊しようと考えてもおかしくありません」

「……食うか食われるかって発想だな」
ぼんやり言っちまってから、俺は気がついた。
じゃあ、あのアリーナの爆弾って、もしかして俺を狙ったんじゃなくて。
ザザ……？
「京平さん、そういえば……」
そっと目を上げて、ザザが話しかけてきた。
「コンサートが始まる前、僕が席を離れたときに、誰か、京平さんに声をかけていませんでしたか？」
「ああ、あれは座席を間違えたってだけの……」
間違えたってだけの、よくあるパターン。
……だと、思いこんでたが、俺は。
「ちょっと待てよ……」
言われてみたら、あいつ。
目の前にあのときの、あのピアスが——サファイアン・ブルーが——あの礼儀正しい、誰かによく似た『お兄さん』が、フラッシュバックして。そうか、あいつだ。奴があのときに、ザザのシートに爆弾を仕掛けたんだとしたら……！
なんで今まで気がつかなかったんだ。怪しすぎるじゃないか、思いっきり。俺としたことが

っ。

「顔を見ましたか？　その相手の」

ゼロが尋ねる。俺は頷いた。

「見た。憶えてる。……ザザに似てたんだ」

6

ザザとゼロがなにやら面倒な奴を相手にしちまったかもしれない、という事情は、一応明らかになったけれども。

奴の顔を見てしまっている俺の立場が実はいちばん危ない、とゼロは言う（確かにザザと一緒に殺されかけてるんだけどさ）。

だからといってどう対処するべきか……。

だいたい、お嬢のデータが何の目的で盗まれたのかもわからないじゃないか。

あのピアス野郎が、どうやってザザの居所を、つまり俺たちの行くコンサート会場なんてやつを知りあてたのかも。

見えないことが多すぎる。今のままでは。

「コピーガードを破った際の公式をフィードバックして、導かれた数値を所員のＩＤと照合さ

せる作業を進行中です」

ゼロはそう言ったが具体的にどういうことなのか凡人にはさっぱりわからん。俺にもわかるように翻訳してくれと頼んだら、いやな顔をしつつ、

「残された証拠から犯人を捜しているということです。ただし、時間が少々かかります」

と言いなおしてくださった。

じゃあ、お嬢さんがそうやって頑張っている間、こっちとしてはできることが何もないわけだ。

「奴が向こうから行動を起こしてくれれば話は別です」

物騒なことをゼロは言い、だが俺に釘をさすのも忘れなかった。

「あなたには、しばらく、おとなしくしていてもらうのがいいようですね……」

玲子社長から電話がかかってきたのは、その翌日のことだった。タイミングがいいとは、あまり言えない。なにせそれがディナーのお誘いだったものだから。

「おとなしく家でごろごろしてますなんて約束したのはどこのどいつだよ、え!?」

真砂くんには力いっぱい叱られるし。

「囮になってくださる心づもりなら、どうぞご自由に」

ゼロからは冷ややかにプレッシャーをかけられた。おまえなあ、勝手に人んちに居座っといて、もう少し親身になった発言は出てこないのか。

「同行させていただきます。あなたの目にはつかないでしょうから、どうぞお気遣いなく」

……あ、そうですか。

良くも悪くもマイペースな奴である。まあゼロがついてくるのはゼロの自由として。

昨日の今日で豪華なディナーってのも（なにせコンサートが爆破事件で延期だぜ）ちょっと気分じゃないなと思いなおして、俺はこっちから店の変更を申し出た。

恵比寿にある小さなレストラン。決して立派じゃないけど雰囲気は悪くない。

「特にウェイターが優秀だからね」

俺がそう太鼓判を押したら、ゼロは疑わしげな顔をしていた。ただし無言で。

「おまえさんもどうせならタッグ組んでみたらいいのにさ、そのウェイター君と」

「……いえ、我々には独立した行動のほうが似合いです」

それに、とゼロはつけたした。

「片方が倒されたとしても、もう一人が残っていれば勝てます。だからこそ我々に馴れあいは無用なのです」

「へえ？　単にザザがうっとうしいってだけじゃなかったのか」

「そう思いたいのでしたら、ご勝手に」

……いい兄貴なんだろうなあ、これでも。多分。おそらく。

「爆破事件関係の記事には絶対に京平の名前を出さないようにって、今、工作してる最中よ。なんとかなると思うわ。狂信的なファンの犯行だろう、というコメントで押し通してるから、その点は安心しておいて。実際、ファンかアンチファンかテロリストか、このどれかじゃなかったら、あんな金のかかるイタズラはしないじゃない？　あ、あたしワインよりシャンパンがいいわ。メニューある？」

玲子ってのは生まれついての社長ではなかろうか。顔を合わせたとたん、一気に用件を片づける。さすが。

意外だったのは、連れがいたこと。しかも俺の全然知らない奴が。

いや……どこかで見た。この男。

恥ずかしげもなく真っ黒なグラサン。アルマーニのスーツなんか着こなして。少しだけ色をぬいた長髪。独特な雰囲気は、ミュージシャンならではってやつで……。

「加納光です」

ぼそり、とアルマーニ男が低く名乗る。そんな知り合いいたか？

「やだ、まだわかってないの？　カノン、よ」

隣から玲子さんが呆れたようにフォロー。
うわ……そういえばそうかっ。
会ってるはずだ。昨日のステージで見たんじゃないか。
『セクション』のボーカリストだ。
ステージと実際で印象の違うミュージシャンは山ほどいるが、こいつはその典型だな。歌ってるときが——悪魔みたいな妖気を放って——凄じかったもんだから、目の前に座ったお洒落なお兄さんが同一人物とはとっさに思えない。
しかも無口である。黙々とコートを脱ぎ、黙々とメニューを読んでいる。グラサンは絶対に外さない。俺はもしかしたら嫌われているのだろうか。……そりゃそうだ、待望の初ライブで爆弾騒ぎだし。組んだばっかりのユニットで、相棒の、過去のバンドのことなんてひきずりたくないだろうし。
こんなシリアスな人物が、よくあんなおちゃらけた哲郎なんかと組む気になったなあ。世の中って不思議だ。
「いいボーカルでしょう?」
「……すごくいいと思うよ」
玲子さんに言われて、俺は否やもなくそう答えていた。
「俺は好きだな」

上手いとか泣けるとか色っぽいとか、言葉を並べるのは簡単だけど。美辞麗句はいらない。哲が選んだ時点で、『最高』のボーカルだってことはわかってたんだ。ただ、『好き』になれるかどうかは、昨日まで知らなかったからね……。

「トキオさんと俺は違いますよ」

不意に加納光が言った。

「ああ、違うよ」

俺は頷く。

「それに関係もないね」

「……」

加納光は黙りこむ。俺の態度もけっこう冷たかったんじゃないかと思う。

秋史。元『ツァイト』のボーカル。今は遠いアメリカの空の下、何をやってるのか杳として知れない。

「少なくともトキオは一度も、他人と自分を比べたりはしなかったぜ」

……驚いた。俺にもまだ、こんな台詞が言えるんじゃないか。

この京平さんとしたことが。

「ノスタルジーですか？」

え？

なんだこいつ、まだ言うことがあったのか。
サングラス越しに睨んでやがる。挑戦的に顔をあげて、加納光が続けた。
「昔話しかできないギタリストなんて、プライドのないボーカリストよりも救いようがありませんよ」
あのなあっ。
「どうせあなたはもう弾かないんでしょう。過去の名声にすがっているだけなんて、みっともない生き方ですね」
「俺がいつ過去の名声にすがったって？」
「いつでも。あなたの態度そのものが、甘え、なんです」
「会ったばかりのヒョッコに決めつけられたくはないもんだね」
「ヒョッコと呼ばれても説得力がないんですよ。俺には虚勢にしか聞こえない」
「何が不満なんだ？」
実際、なんだってこんなところで初対面の奴と火花を散らす羽目になっちまったんだか。
いったい何が気に入らないんだ。
ついひきずられてマジになった俺も馬鹿だけど、確かめないわけにはいかなかった。なんで奴が俺にここまでつっかかるのか。
「不満？」

加納光――カノンが、くりかえす。そして、ふと奴は語調をあらためた。呟くように。

「あなたがギターを弾かないことです」

「――――」

……俺が？

何だ？　こいつ……何を考えて。

「ひどいわね、一応、話の段取りを考えてきたのにカノンのおかげでぶちこわしじゃないの」

玲子の一声が、やっと我々のあいだに割りこんだ。

こっち側で散ってた火花も、玲子さんが出てくると沈静化するからありがたい。うやむやのうちにって感じはあるけど。

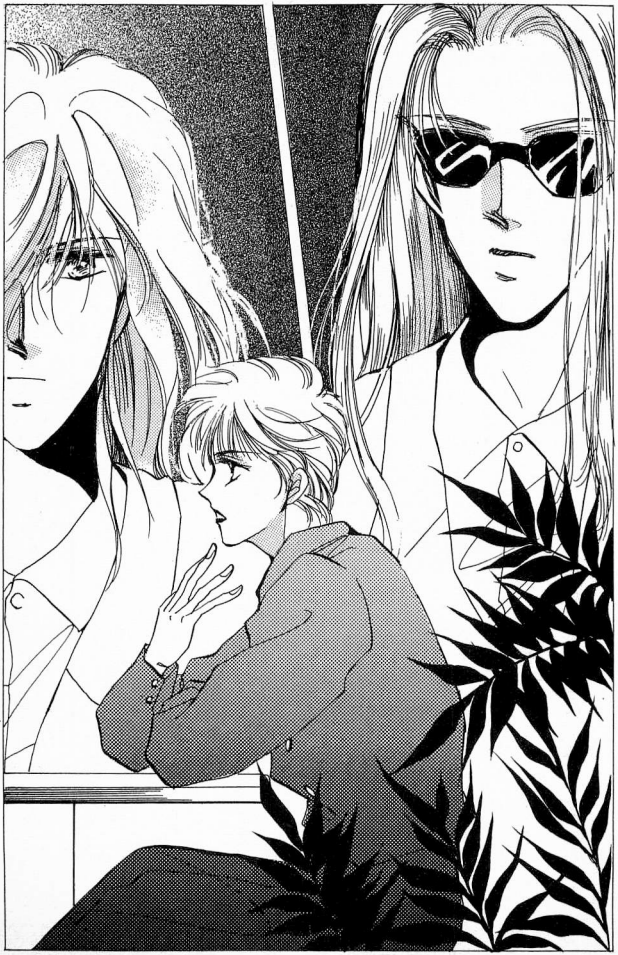
「仕方ないからこの流れで言っちゃうわ。ねえ京平、これってばお仕事の話なのよ」

「は？」

なんだそりゃ、いきなり。

カノンは黙然と目をそらしている。玲子さんが続けた。

「六月からの『セクション』のレコーディング……京平、カノンたちと一緒にロンドンに行くつもり、ない？」



7

ロンドン――。
今さら、俺を？
もう使いものになんかならないぜ。
「……ただの観光旅行じゃないよねえ、それは」
意味なんてない、俺の呟き。
ウェイター君がオーダーを取りにきた。この話、聞こえてるんだろう。また心配するのかな。素直なうえに心配性で。――だけど。
どんな風に心配する？　俺がロンドンに行くことをか、行かないことをか。
「京平もあたしたちと同じコースにしていいんでしょ？」
「んにゃ、俺はトースト」
「なにか言ったかしら、聞こえなかったわ。ええと、Cコース三つね」
「肉料理とパスタのコース三人前……ですね」
確認するウェイター君の――ザザの声。あ、声だけでわかるぞ、どんな顔してるのか……。
……ちょっと待て。

俺はいつからこいつの顔色を気にするような奴になったんだろう。
いったい俺はいつから――。
「あら、この坊や、どっかで見たわね」
玲子がザザに気づく。俺の手がテーブルを軽く叩く。
「話を続けよう」
「……」
沈黙したのは玲子なのか加納光なのかザザなのか。俺に追っ払われたかたちで、ザザは離れていく。
俺は今、どうやらザザの近くにいたくないらしい。らしいってのも何だけど……。
なにかおかしい。
一年前。人間になりたいってだけで肝心なことは何もわかってなかった大馬鹿野郎が、ザザで。
二年前。姉貴以外の人間は誰も彼も敵にしか見えてなかったひねくれまがったガキが、真砂で。
だから俺は。
砂夜子が死んで、ギターを捨てて、それで俺は。
とりあえず二人がいたおかげで飢え死にもせず凍え死にもせず後追い自殺もせずに現在に至

っているけれど。それで果たして俺は。
「別に俺は弾かないって言ってるわけじゃない。弾きたくなるのを待ってるだけなんだけどね」
一年以上、ずっと。
時間の流れだけを頼りに。
……だけど。
「だけど六月にロンドンは無理だな」
そう言わざるをえない。今は。とにかく今は。
「あなたを本気にさせるだけの魅力が、俺にはないってことですか？」
すかさずカノンがつっこんでくる。傍若無人の典型。
ああそうか。
若者はやっぱりこうじゃないと。
「そうじゃなくてさ……」
威勢だけはよくて、無礼で、ぶっきらぼうで、段取りがなくて。
お洒落にカッコつけてるけど、こいつも結局ガキなんだ。なんとなくわかってきた。
こういう若者は、俺は決して嫌いじゃない。
自分がそうだったからね。

「違うでしょ。君の歌と張りあえるようなギターは、俺にはもうしばらく無理だろうねって話をしているんでしょ」

「……」

と。グラサンの向こうがわで、妙にカノンが……。

なんだこいつ、照れてるんだろうか、もしかして。おー？

「俺の歌なんて……俺はただ、『ツァイト』の音を目標にして、やってきただけだし……」

……おいこら。

「憧れの『テツ』と組めただけでも、身に余ってるし」

いきなり殊勝になるんじゃない。

「それで『キョウヘイ』が俺のために弾いてくれたらどんなにって……」

やめなさい、そこで赤くなるのは。

底の見えない奴だなあ。面白いけど。ギャップがあって。

「張りあうなんて次元じゃなくて、京平さんが弾いてくれればそれでいい、哲郎さんと京平さんのツインがもう一度聴きたい、そして一緒にステージに立ちたいって、俺は純粋にそういう気持ちで言ってるんです」

「あのなあ。俺が弾きさえすりゃどんなフヌケた音でもいいなんて、プロのボーカリストとしてあるまじき態度だぜ？」

「――京平さんがそんなダサい音、出しますか？」

きらり、とカノンの瞳が光った気がした。

「プロのギタリストとして」

……こいつ。

哲。やっぱりおまえ、さすがだ。こんな逸材を放っとかなかったあたりが。お膳立てした玲子も玲子だ。名実ともに、とんでもないユニットだ……。

音楽界なんて、あっという間に移り変わる。俺の知らないうちに。たった二年でも。そして俺はいつまで『いい音楽から遠ざかって』ぬくぬくと気持ちの良い生活を。

優しいだけの毎日を。

「こうやって惚れられてるうちが華よ、京平。チャンスってのはいつでも転がっちゃいないんだから」

例によって辛辣な玲子さんの忠告。でも、ただ厳しいだけの言葉でもないことは俺にもわかる。

トキオは単身アメリカに渡り、一旗あげるという話。ベースの泊は足を洗ってディレクター稼業。ドラムの三戸はスタジオミュージシャンとして活躍して業界じゃ有名。『ツァイト』のメンバーで、解散後、きっちりした身の振り方を決めてないのは俺ひとりだ。フラッとラジオのDJなんかやって。たまに楽器屋でピアノなんか弾いて。モラトリアム人生ってやつで。

誰もが俺を気遣い、俺に同情し、俺のことを悲劇の主人公にした。だけど玲子だけは初めから違っていた。解散なんて俺のわがままに過ぎないと言いきった。そのくせ、こうして見捨てずに今まで……そしてこれからも、俺を信じつづけてくれるのだろう。玲子ってのはそういう相手だ。

「ケジメはつけなきゃね」

と、玲子。

「俺は別に、今度かぎりのチャンスだなんて思ってませんよ」

カノンが横から口を出す。可愛いなあ。

で、俺は。

答えなきゃならない。俺自身は、どうしたいと思っているのか……。

「――――」

え？

何だよ、おい。

ちょっと待て。どうして。

なんでこんなところでっ……！

「京平さんっ!?」

誰かが遠くで叫んだみたいだ。あ、そうか、ウェイター君だ。さすが反応が早い。そんなこ

とで感心してどうするんだ、俺は。体中から血液がぜんぶぬけたような錯覚。世界中まっくらだ。悪夢？　幻？　俺は右も左もわからなくなって、重力の法則のままに落下したらしい。椅子から。床めがけて。なにか硬い平面にぶつかってしかも痛いってことは。ああでもこれが天井じゃないって保証はどこにもないんだ。

これだけ苦しいってのにまた『原因不明の発作』で片づいたりするんだろうか。そんな生易しいもんじゃない。やたら寒い。心臓の音が聞こえない。耳鳴り。麻痺。さあ諦めちまえとばかりに末期的症状のオンパレード。

「京平さん、無理に動かないで！　今、店の事務室を借ります」

かつぎあげる腕を感じる。なんてこった畜生、みっともなさすぎる。このまま死んだりしたらカッコつくんだけどな、少しは。

ひどいな、死期が近いなら近いって、誰か教えてくれなきゃアンフェアじゃないか……。

「誰も死んだりしませんよ、床に頭ぶつけたくらいで！　こんな時に目茶苦茶いわないでください！」

馬鹿野郎、おまえこそ目茶苦茶だぞ、頭ぶつけたらたまには死ぬんだぞ。おまえ、俺がぶっ倒れたくらいでそんなに慌てふためいてたら、一流のマシノイドって肩書きが泣くんじゃないのか。

そんなことじゃ、いつまでたっても独り立ちできないんじゃないのか……ザザ。

8

気がついたら、目の前にいたのは雪女、じゃなくて黒ずくめ美人のゼロだった（こんな形容を口に出したらえらいことになりそうだけど）。
「よお」
モーローとしたまんま、俺はとりあえず挨拶。
「どこにいたんだ、今まで？」
「天井裏です」
事務的な口調でゼロは答える。そしてここは事務室ときたもんだ。
俺は並べた椅子の上に、転落寸前ぎりぎりって感じでのびていた。一応、起きあがっても問題はなさそうだ。
「二度あることは三度……」
「何です？」
「いや、ひとりごと」
実にまったく、冗談じゃすまない。どうなっているんだ、俺の健康状態は。
「医者を呼ぼうかとも思いましたが、客観的に判断したところ、あなたの心拍数や体温などに

は異常が見られませんので、こういう結果となりました」
どういう結果だよ。
ゼロひとりがじーっと俺の番をしてたってことだろうか。あんまり嬉しくないなあ。
「……異常なし？　嘘だろ、どう考えたって異常な症状が山ほど出てるだろが」
「それはあなたの主観ではありませんか？」
あっさりとゼロが指摘した。え？
「あのなあ……俺の病気を俺が主観的にとらえなくてどうする」
「確かに病気ですね、あなたは」
「……」
「それもずいぶん前から、発病しています」
おいこら。
「怠け病だとかいうオチをつけるなよ、そこで」
「近いです」
……やめた。ろくな会話にならない。
玲子たちはしばらく気にして待っていたものの、カノンに取材が入ってるってんで仕方なく帰ったそうである。あとで電話くらいかけてフォローしとかないと。ザザは……お仕事か、まだ。

狭苦しい事務室の様子を俺が見まわしていると、脇に突っ立ったまんまのゼロがふと口をひらいた。

「あなたに、ひとつ質問があります」

何なんだか。あらたまって。

こっちはまだ『中毒症状』から立ちなおってない。どこかボーッとしているような感覚で。あんまりマジメな話をされても答えらんないぞ。

まっすぐに俺の目を見据えて、ゼロが尋ねた。

「本当にあなたは、ザザが人間になれると信じているのですか？」

「……」

ゼロ？

いきなりこんな場面で持ちだす話題だろうかという気が、真っ先にした。ゼロらしくないんじゃないのか。この脈絡のなさは。

だけどこいつはマジだ。それだけはわかる。俺にも。

そういうことなら……こっちもマジに返さなきゃならない。

「あいつはもうとっくに人間だと、俺は思ってるよ」

それこそ銀座の交差点で出会ったときから、あいつは俺にとっては一人の……人間、でしかないはずだ。

「血液の流れない、心臓のない身体でも？」
「心臓が動いてても中身カラッポって奴よりは、ずっとマシさ」
「そうでしょうか？　その理屈では、心臓があってさらに中身も充実した『人間』相手には、ザザは決してかなわないということになりませんか？」
静かにゼロが反問して、俺はあげ足をとられたような気分になった。そりゃ確かに、俺の言い方が良くなかったんだろうけど……。
中途半端な人間よりもマシ、なんて表現は、ザザにとっては嬉しくもなんともないわけだ。そんなのは気休めにすぎないんだ。
あいつは人間になりたいんだから。
「私はザザとは違います。製作された当初より、この身体と機能には不満を抱いておりません。ですからザザの代弁者となるつもりもありません、が――」
前置きして。
ゼロは射るように俺を見る。
「もしもあなたが今の時点でザザの件から、このまま手を引くつもりなら、私としてはそれを無責任であると評せざるをえません」
……ゼロ。
「それでは何のためにザザをあなたの元に預けていたのか、どうしてザザがあなたのことを選

んだのか、なぜお嬢様がザザを連れ戻さずにいるのか……そのすべてが無意味に終わってしまいます」

「……俺がザザと別れるなんて、どうして思いついたんだ？」

「あなた自身が言ったことです。どうやらあなたは、ザザを独り立ちさせたい――いや、厄介払いしたいようだ」

ああ、いつの間にかそんなことも言ってたのか、俺は。

本当にこいつは、いい兄貴だ。その態度がなかなかザザ本人には向かないところが難点といえば難点だけれど。

俺は椅子に深く座りこんで、両脚を組みあわせた。ゼロに敬意を表して大切な話をしよう。俺自身がいいかげんに見過ごしてきたこと。

ケジメはつけなきゃね。

そう言われて初めて気づく、俺自身のひきずってる山ほどの無責任。

「ゼロ。厄介払いなんて、俺を買いかぶりすぎてるぜ」

俺が言う。ゼロは少し意外そうに黙る。

そう、まず俺からなんだ。

まず俺が人間にならないと……。

俺はガキどもを抱えこんだつもりで、実はただぬくぬくとした毎日が失われるのが怖くて。

「逆なんだ。追いこされてるんだよ、俺は。もう、俺の役目は終わっちゃったんだ」
そこまで言いきった瞬間、胸の奥底からなにか——熱い波がきた。
俺はずっとこれを言いたくて、たまらなくてそして言いたくなくて仕方がなかったんじゃないのか。
今ごろ自覚するなんて。けっこうな馬鹿野郎だ、俺も。
「しかし……」
ゼロが口をひらく。どこか戸惑ったように。
「私には、必ずしもあなたの言うことが」
こんこん、と事務室のドアが鳴ったのはその時だった。
「京平さん、大丈夫ですか!?」
聞きなれたザザの声。ゼロは即座に鉄壁のポーカーフェイスを取り戻してだんまりだ。返事くらいしたらどうなんだか。
「おー、起きとるぞ」
「よかった、今、玲子さんが……」
ドアが開いて、明るい——でもまだ心配してるな、こっそり——ザザの顔がのぞいた。え?玲子?
「帰ったんじゃなかったのか、あいつ」

「帰ったわよ、帰ったけど気になって見にきてあげたんでしょ？」
ザザのうしろから強引に玲子さんが入ってくる。
気になって、と言われても……。俺だって何がどうしてぶっ倒れたのかわからんのだから。
「まあともかく、お話の最中に騒ぎをおこしちゃって失礼。カノンにもそう言っといて」
「仮病じゃなければ許そうじゃないの。で、続きはいつまた仕切りなおしてくれるのかしら？」
玲子さんに場を譲ろうと、目立たない身のこなしでゼロが俺から遠ざかる。俺は俺で椅子から立って玲子を……え？
何か、ひっかかった。俺の記憶。
うまく説明できない。何が？
何が違う？
「……玲子、確か、おまえって」
勝手に俺の舌のほうが動いた。考える暇もなく。
「ピアスは嫌いだったはず――」
しまった……！
どんな言葉も間に合わなかった。ゼロが振り向く隙さえなかった。俺に正体を見破られた玲子の第一のターゲットは最も近くにいた黒い影――。

「ゼロっ!!」

ザザが叫ぶ。五本の鋭い刃がゼロの背中まで貫通したのを俺は見た。

ゼロの両眼が見開かれ、相手をとらえる。その胸元に左手の爪を突き刺した玲子は、ごく冷静にその目を見返した。無表情。笑いもしない。

ずるり、といやな音をたててゼロの身から爪が——異様に伸びた、鋼鉄の爪が五本、同時に引きぬかれる。

ゼロは動かない。何も言わず。彫像のように。

玲子の顔が落ちた。ザザがよく使う変装術だ。被膜式プラスティックコートの疑似マスク。その下に現れたのは、俺の知っている、あの顔だった。

青いピアス。間違いなく、アリーナで出会った好青年。

幻の、暗殺者。

……そして。ゼロの身が傾いだ。事務用のデスクに……倒れこむ。金属音がいくつか響いた。

「ゼロ……!」

悲痛に呟き、ザザが両の手首を組みあわせた。シュッと風を鳴らして二本のサーベルが姿を現す。

そうか、奴は……奴自身がマシノイドだからこそ、ゼロの急所なんて知りぬいていたに違い

ない。

サーベルを構えて、ザザは奴と向き合う。わかっているんだ、ザザも。この敵がどんな相手なのか。

一瞬でゼロを倒してしまえる相手。ならば、ザザは。

「……ゼロ」

もう一度、そう呟いて、そしてザザはふっと顔を伏せた。

長い爪をもてあそび、奴はそれを眺めている。

下手に動けない。

「よくも、ゼロの、データを」

区切るような一言とともに。

キッ、と目を上げたとき、そこにはもう悲しみも衝撃もなかった。激しい怒りだけがザザを動かしているように見えた。

「許さない……！」

ザザ……。

サーベルが空を裂き、ザザの姿勢が完全に隙のないものとなる。それに反応して奴も無言のまま爪を宙にかざす。

「名乗れ。もしもおまえに名前があるのなら！」

ザザがそう促した。

サファイアン・ブルーの暗殺者は、その言葉に、なぜか表情をやわらげた。笑おうとしたのかもしれない。

どこかザザと似た顔立ちで、奴はゆっくりと自分の名を告げた。

「……シグマ」

File 5
そして誰も いなくなった

1

忘れていた。

ザザって奴はもともと馬鹿の上に大がつくぐらいの正直者で——そりゃもう俺が呆れ果てるくらい正直で素直で——だからこそ、突っ走ったときは手に負えない暴走野郎と化すんだった。

俺はかつてザザが自暴自棄になって大暴走したあげくにゼロと乱闘になだれこみ早く殺せとばかりに無茶苦茶な戦い方をした、その現場に居合わせていたんだ。ほんの一年前に。

「名乗れ。もしもおまえに名前があるのなら！」

サーベルをきらめかせ、ザザが命じた。

それは命令だった。

俺は今まで、そんな風に誰かを強制するおまえの声は聞いたことがない。

こんな時だってのに、俺には何故かそのことが気になった。そいつはまるで機械相手みたいで……。

「……シグマ」
悠然と答える。ザザとよく似た、ただし可愛げのかけらもない野郎が。
その耳には青く光るピアス。
「C・I・G・M・A……シグマ」
そう補足して、シグマは微笑した。今度は一応、笑顔に見える程度に。
表情のひとつひとつが曖昧なんだ、こいつは。どこかぎごちなさが残って。だから不自然な印象になる。
「わかった、シグマ。これから僕の言うことに答えろ」
ザザが続けた。怒りを消しもせずに。
「おまえはゼロのデータを破壊した！　誰の命令で、何が目的でやったことなのか、おまえの口から聞きたい、今すぐに！」
「……殺したかった。だから殺した」
あっさりとシグマが言う。
「おまえも殺したい。だから殺す」
「――……」
ザザが沈黙した。俺も何も言えなかった。
簡単すぎる。こいつを動かしている理屈は。ザザのまっすぐさとは質が違いすぎる。

シンプルなうえにストレート、ただそれだけか。——それじゃ幼稚園児レベルではないか。

「……そうか」

ザザが呟く。あっ、おまえ——。

「ならもう僕から訊くことは」

「なんで殺したいんだ!?」

ザザの台詞を途中でぶった切って、俺は二人の会話に割りこんだ。ぎょっとしたようにこっちを見るザザは悪いけど無視。おまえの堪忍袋の限界なんかわかってるんだ。

「なんでそいつを殺したいんだ？　シグマ」

放っといたら今この瞬間、俺の目の前で凄じい殺しあいが始まっていただろう。

ザザ。間違いなくおまえが勝つってわかりきってたら俺もこんな邪魔はしてない。本気になったおまえは強い。そんなこと知ってるんだ、俺も。おまえが誰のために本気になれるのか、それが何故なのかってことも。

おまえのことなら。

わからないのはシグマのほうなんだ。

いきなり割りこまれて少々不機嫌に——なに当然のこと言ってんだろう、とでも思ってるのか——シグマは俺を見遣って、簡潔に答えた。

「要らないから」

まだ理由になってない……。
話が通じてない気がする。無邪気、とでも表現すればいいのか、これは？
「おまえが要らなくたって俺は要るんだよ」
「……変なの」
変なの、じゃないだろうが、この坊主はっ！
こいつはとんでもない強敵かもしれない。ザザ以上に正直者だ。理不尽なくらい素直だ。こんな奴とザザをぶつけたらいったい何が起きるか。
どうする……？
俺にできることが何かあるはずだ。短時間でケリがつく方法。何かできるはずだ。
ゼロ。おまえは自分が倒れてもザザが戦えば勝てると言ってたけど、俺は反対だ。おまえの理屈だと、戦えるのはザザとおまえだけってことになってるじゃないか。
人間には人間のやりかたってもんが……。
「ザザ」
……人間。
「はい」
ザザが答える。そうか……そうなんだよな……。
「おまえ、俺のこと殺せるか？」

「はっ……え!?　えええっ!?」
慌てふためくなって、おまえは。
「俺がおまえを妨害したら……そうしたら俺のこと殺せるか？」
「でっ、できませんよっ!!　できるわけないでしょう!?」
……よし、よくわかった。
シグマはきょとんとして俺のことを見ている。こいつ、なんっにも考えとらんな……自分の目的以外のことは。
おまえが要らなくたって俺は要るんだよ。
俺の理由なんてその程度でしかない。
たった『その程度』のために、一生に二回くらい体はってみるのも悪くない。
「!?」
ザザが目を瞠った。
一分の隙も許されない二人の間に、いきなり俺が踏みこんだからだ。サーベルに触れるぎりぎりのところに。殺し合おうとしてる連中の間に入るなんてよっぽどの阿呆か間抜けだろう。おまけにただの迷惑だ。
「京平さん……？」
はりつめた声でザザが呼ぶ。シグマは相変わらず俺を見ている。



理解不能ってやつだろう、シグマ。こんな常識はずれな真似ぶちかますのは、考えなしの馬鹿者な『人間』くらいだろう。

「京平さん、これは僕が――」

言いかけたザザを、俺は遮った。肩に手をかけて。

囁いたのは一言だけ。

「俺を殺したくなかったら、俺のそばにいるべきだと思うぞ」

「……」

ザザがどんな顔をしたのか俺は知らない。

「わかりました……離れません」

「よし。――壁ぶっこわせ」

驚いたことにザザは躊躇も反問もしなかった。耳元で風が鳴ったと思ったら――。

いちばん手近な壁が勢いよくふっとんだ。店には申し訳ないが仕方ないっ。

なんだ、すぐ隣がキッチンだったんじゃないか。しかも無人（ウェイター君がこんな所にいるからだ）。好都合このうえなし！

これならなんとかなるかもしれない。

俺の画策してる陰謀なんてザザにはわかりっこないはずだ。それでもおまえが俺を信じてくれるなら。信じてここにいるなら。

俺がおまえを守ってやる。

「ザザ。この手のわけわかってないお子様は、まともに叱っても駄目だ。三日三晩くらいじっくり腰を据えて教育してやらなきゃな」

キッチンに行きたいんだ。ゆっくりでいい。どうせシグマには何もできない。

そんな気持ちがどこまで伝わったか。俺はザザの肩を引いて促す。壁にあいた穴をくぐる。

シグマには背中を向けちまう。そうだ、そうやって歩けばいいんだ、ザザ。後ろは気にしなければいい……。

「逃げるのか!?」

一瞬意表をつかれたんだろう、二瞬後にシグマが声をはりあげた。同時にシュッと空気が動いて——左手か！　ふりむきざまに俺は自分の腕を。

「！」

ざくっ、といい音がした。

愕然として爪を震わせたシグマが俺を見る。

驚いてるのかな。人間は切ったら赤い血が出るんだぜ。……本人、痛いけど。

腕が途端にずしんと重くなる。シグマにむかってかざした左腕。鋼鉄の爪は、俺の左腕をひじから手首まできれいに裂いてくれたらしい。

傷口は自分じゃ見えない。奴に見せてやらなきゃならない。いやってほど。

「痛いぞ、かなり」
俺はおもむろに口をひらく。ああ畜生、でもこれまだ麻痺してるぞ。これからもっと痛くなってくるのか。がーっ、冗談じゃねえ。
だがしかし。
「シグマっ!!　おまえはっ……!!」
激昂したのはザザだった。馬鹿っ！　俺は慌てて右腕でザザを押さえこんだ。おまえが怒るな、わざとなんだから。
「京平さん!!　邪魔しないでください!!」
「黙ってろってば」
「いやですっ!!」
たたきつけるようにザザが叫ぶ。すさまじい勢いで。
「ゼロだけですまずにっ……京平さんを傷つけるなんて!!　おまえは機械人間としても失格だっ!!」
「ザザっ」
「離してくださいっ。……殺してやるっ!!」
違うだろうが、おまえは！
「いいから俺を見ろっ！　俺の右腕ぶっちぎる気か、シグマと変わんないぞ、そしたら!!」

「――――」

ザザが絶句した。動きが止まる。俺を見るおまえの目。……違うんだろ、おまえは。おまえは人間になるんだろ。

それに。

「シグマ、こいつはこんなこと言ってるけど……おまえは立派なマシノイドだよな」

「……」

「おまえには人間なんか殺せない」

いくらシグマでも、生身の人間を自分の手で殺すわけにはいかない。

これが俺の賭けだった。

ザザやゼロと同じ方法で、同じ方針で製作された高性能のマシノイドがシグマなら。

「しかも俺はおまえのことが少しも怖くないんだな、これが」

じわじわと左手の芯が痺れてくる。濡れた感触が広がって気味悪い。どうやら何針か縫う羽目になりそうだ、医者は嫌いだってのに。……おまけに吐き気までしてきた。

「どうする？　おとなしく俺のいうことを聞きたくなってきたんじゃないか？　シグマ」

さっさということを聞いて黒幕をバラさんか、畜生！　と本当は怒鳴りたいところである。

「……やだ」

ぼそりとシグマが答えた。だーっ。

2

一年前、俺がザザとゼロの戦闘に割りこんだおかげで大怪我したときに、知ったことがひとつある。ゼロが説明してくれたんだ。機械人間は、主人を守るという目的以外で、人を傷つけてはならない。それは連中にとって本能に等しい鉄則だとか。

人の血に弱いのはシグマも同じだと思うんだ。動揺した表情がその証拠。しかし——ビビってるくせに意地張りやがって。この頑固者！

「あのなあ、おまえは悪い奴に利用されてるだけなんだよ、そいつのことを教えてくれたらおまえと仲良くなれるぞって言ってるんだろ？」

「やだ」

しぶとい。

「こっちの話をきちんと聞けっての」

「やだやだやだ！」

足を踏み鳴らすな、小僧っ！

「だって要らないんだ、そいつなんか！」

かんしゃくを起こしてシグマがザザを指さした。

「おまえ、ずるい！　卑怯！　勝手！　嫌いだっ！」
「――どうして……」
ザザが呟く。
どうして知ることができるんだ、ザザのことを。嫌いになれるほど。
シグマって何なんだ？
「なんで俺のこと邪魔する？　おまえ関係ないのに」
訴えるようにシグマは俺を見る。
懇願と非難の境界線上。感情なんて決められないのに爆発する力だけが行き場をなくして。
こんな表情を俺は知ってる。
ずっと見てきた……。
その瞬間だった。
かすかに小さく、壁際で何かプラスチックを叩くような音がした。すとん、と全部の照明が……消えた!?
そうか、ブレーカーの落ちた音だ!!　やばいっ、誰か外に協力者が――。
がらがらがっしゃん、と真っ暗なキッチンのあちこちから物の転がり落ちる音。
「逃がすな、時間稼げっ！」
俺はとっさにザザに叫んでいた。対戦させたくなかったってのに！

「はいっ!!」

畜生！　俺は手探りと勘だけで目標物に突進する。コンマ一秒ごとに重くなっていく左腕。

待ってろ、シグマ……今、京平さんならではの凄い決着をつけてやる。

ザザが全身を光らせて、惨憺たるありさまの狭い室内を照らしだした。

棚や台にのっていた食器類はあらかた床にフォールダウン状態。まだ煮たってた鍋がコンロから倒れこんで湯気を吐き出している。危なっかしい。

そして小さな太陽と化したザザが、サーベルを構えて立っていた。

壁際には、追いつめられたシグマが……。

追いつめられた？　そいつはなんだか妙だった。このほんの一瞬の暗闇に、シグマはキッチン中の物をただ手当たり次第ぶちこわしただけか。せっかく共犯者（いるとしたら、だけど）が停電なんてワザをかましてくれたってのに。

ヤケになって暴れただけみたいに見える。子供のヒステリー。

逃げることも、ザザとぶつかることも、簡単だったはず。……腑に落ちない。

「京平さん？」

振り向いてザザが呼ぶ。俺は歩きだす。

おまえにはわかんないところばっかりだぞ、シグマ。

はっきりさせようじゃないか。三日三晩、時間をかけてさ。

足早に――しかも有無を言わせず、俺はシグマに迫った。急がないとこっちは貧血でぶっ倒れる。驚いたようにシグマが俺を見上げる。血みどろの俺が黙りこくって強引に近づいてきたら俺だって確かに驚くだろうな。

……すみません、砂夜子さん。

一言、胸の中で謝っておいて、俺は俺を見つめているシグマの顎を指で支えて思いきりよく――やむを得ずだぞ、言っとくけど！　――唇を、奪わせていただいた。

五秒間経過。

がくん、とシグマの全身から力がぬけたのは、ゆっくり数えて六秒後のことだった。それまでの凄じい緊張感は思いだしたくない。説明もしたくないっ。いいから放っといてくれ……。

めちゃくちゃ重たいシグマの身体をなんとか壁沿いに座らせて、ため息をついたとたん目眩がして俺も床に座りこんじまった。あああ、疲れた……。貧血と酸欠のダブルパンチである。

「……おい」

喋るのさえうっとーしい。

「あのなあ。そこで呆れ果てとらんで、怪我人をいたわって病院まで連れてってくださいよ

……」

正確には呆れ果てたというより、ひたすらボーゼンとしているように俺には思えるが。刺激が強すぎたかしら、生まれて四年目の人には。しかしマジで出血多量だし、こっちは。

「ザザっ！　立ったまま寝るなっての」

「――は、はいっ」

ようやくザザから返事がきて、まずブレーカーを上げる気配があった。まわりが明るくなる。

電池の切れた人形みたいにシグマは全部の運動を停止している。

俺のすぐ横に膝をついて、ザザはそれを確認した。

「信じられない……」

「はははは」

「笑ってないで説明してください！　京平さん、自分が今どんなに危険なことしたかわかってるんですか!?」

「わかってるわかってる。これが笑わずにいられるかってくらいわかってる」

「わかってませんよっ!!　人の気も知らないでっ!!」

そこまで激怒せずとも。……まあ仕方ないか、ふざけてもどうにもならん。

「理屈は簡単。シグマの弱点イコールおまえの弱点ってことさ。おまえさんは人間を殺せない

し、それから苦手なものがひとつあるだろ、確か。ほら、そのへんに」
「えっ……」
俺が見遣った先を、ザザは視線で追い、そして唖然とした。
俺がずっと狙ってた目標物。
――冷蔵庫、なんだねえ、実は。
開けっぱなしになった扉の脇に、ころがってる紙パック。
これが正体。
「じゃあ、あの、シグマには、だから……ミルク、ですか？」
「大正解。切り札は牛乳だったんだな」
「……はあああ……」
世界の終わりよりもっと真っ暗な顔になって、ザザはがっくりと肩を落とした。
「そんなことならさっさと教えてくれたらいいのに……」
「おまえに教えたらバレるだろうが、シグマに」
「バレてたって京平さんみたいなやり方されたら逃げられやしませんっ!!」
「あんまり追及するな、そのへんをっ！　自己嫌悪に陥るっ！」
ぐらぐらぐら。……だから貧血を起こしてるときに怒鳴ったりしたくないっつーに。
つまりザザは優秀なマシノイドであるからして、たいていの物なら普通の人間と変わらず食

うことができるんだけど、唯一、牛乳だけはダメなのである。冗談のようだが本当の話だ。一口飲んだだけで三時間、コップ一杯で十二時間、全機能ストップしちまうそうな。

「しかしキス一回分だと何時間くらい効くのかなあ……」

「あーっ!!　もーっ!!　どうしてそういうこと言うんですかっ、京平さんのことがもう信じられないっ!!」

「泣くなってば、おまえは」

「京平さんはいいですよ、大人だからっ!!　どうせ僕なんか四歳ですよっ!!　もうっ!!　救急車呼ばなきゃっ!!　お店めちゃくちゃだし!!　あっ優亜に連絡しなきゃならないんだ、ゼロが大変だし、シグマもいるし!!　それに真砂くんに電話する約束もあってっ……ああもう駄目だ、なんだかわかんないけどとりあえず電話してきます!!　じっとしててくださいねっ!!」

わめくだけわめいてザザはばたばたとキッチンを出ていった。……よっぽどショックだったんだろーか。

俺はごろんと床にころがって、遠ざかっていくザザの足音を聞いていた。

どうせ大人ですよ、俺なんか。……しかしこれでも砂夜子さんに申し訳なくて、すごぉく胸を痛めているんだけどなあっ。

3

午後九時三十分。
邪魔くさい三角巾をぶらさげて診察室を出た俺を待っていたのは、むっつりと岩のように黙りこくった我が弟であった。
「七針だってさ」
俺の怪我にしちゃ被害は少ないほうだと思う。なんか知らないけど俺って大怪我することが多いんだ、昔っから。おかしいなあ、こんなに穏やかな性格をしているのに……。
「浅い傷だから、骨とか神経とか腱とかは無事ですって。どろどろの血みどろだったのに拍子抜けだよね、ははは」
けらけらと笑いつつ、人気のたえた待合室の椅子から俺はコートを取りあげる。いかん、なんだか未だに笑いの衝動が消えてない。
「真砂くん、べつに単車で来たわけじゃないよねえ。近いけどタクシーで帰ろうか？」
なにげなく振り向いたとたんに。
不意打ちで平手が飛んできた。
ばんっ、とけっこう上質なショックが左の頬に来た。よけられないわけじゃなかったが、よ

ける理由はない。……腕力、ついたじゃん、真砂。

「馬鹿野郎っ！」

真砂が怒鳴る。俺は顔をあげる。

「……馬鹿野郎……」

もう一度くりかえして。声をつまらせて、少し黙って。

「ギタリストが、左腕……左腕なんか怪我しやがってさ」

「……」

「本当に腕つぶしてたらっ、どうするつもりだったんだよっ！　もう少し考えて行動しろっ、まぬけっ!!」

「……」

俺の頭の中からは、何も言葉が出てこなかった。何秒待っても。

ガキの頃はもっと無茶なことばかりで、ライブハウスで客と喧嘩して腕を折るとか指をつぶすとか、そんな怪我ならいくらでもしてきたけど。でもそんなことは今のこの話にはまるで関係なくて。

「おまけに事務所の社長から電話があったぜ。——おまえっ、身体の調子がおかしいなんてひとっことも言わなかっただろうがっ!!」

……ああ、そうか、ザザにしか口止めしなかったんだっけ。玲子のことまで考えてなかっ

た。ぬかったな。

俺の身体がどうこうって以前に、俺も真砂くんも、病気の話をするのが苦手なもんだから。病気の話も、この病院と名のつく建物も、医者って肩書きをもってる人間も、俺たちにとっては……。

「ごめん」

ようやく俺に言える台詞は、それだけだった。

「ごめん。俺が悪かった」

「……当たり前のこと言ってんじゃねえよ」

どこか拗ねたような仕種で真砂くんは目をそらす。

……なんだか可笑しいや。このガキんちょがもうすぐ十八だもんなあ。

「当たり前の言葉にこそ真実があるのだよ、真砂くん」

「おまえの場合、その言葉そのものが足りないんだよっ」

「コミュニケーションが言葉のみによってなされるとも限らないでしょ」

「あのさあ、おまえ、本当にその発言に自信もって責任とれるか？　何月何日にこういう方法で俺とコミュニケーションとりましたって証言できるか？」

痛いところをつかれてしまった。うーん、そうだねえ……。

「……ぜんぜん思いつかんわ。ははは」

「悪びれずに言うなっ！」
「じゃ、とりあえず、今からコミュニケーションするってことでどうかね」
「そんな場合かよ。大変だぜ、帰ったら」
俺は右手のコートを抱えなおす。着るほどの寒さじゃないはず。
場合はともかくとして、兄のわがままに弟はつきあう義務がある。平手のお返しだ。
「歩いて帰ろうか……」

帰ったら、よくわからないことになっていた。
「優亜と連絡がとれないんです」
我々を出迎えたなり、深刻な面持ちでザザが告げた。
俺が病院に直行した一方で、ザザはゼロとシグマの二人を抱えて（この仕事はさすがにザザでも大変だったらしいが）青山のマンションに直行し、自宅待機してた真砂くんは真砂くんで俺を迎えに恵比寿まで移動して、とまあ、なんというかともかく我々みんなして大忙しだったわけだけど。
いざ三人が集結してみると事態はすでに新展開ってやつで。そりゃないだろう……。
「連絡がとれない？　電話線でも切られてるのか、まさか」

「いえ……優亜がいないんです」
ザザが断言する。
「操作室直通の回線は、そう簡単に妨害できるはずがないし……。第一、ゼロのデータが破損したことは研究所のセンサーでわかるんです。優亜はゼロが傷ついたのを知ったら必ず僕に命令を出してきます。それが来ないということは……」
「何なんだ、そりゃ」
マシノイドがらみのこととなったらお嬢が出てこなきゃ何も始まらない。
「でもコピーガードを破られたって前例があるんだから、回線とかセンサーとかに細工されてないって保証はないんじゃねえのか？」
真砂くんが提案して、ザザは黙りこんだ。
「それはそう……なんですよね……」
と言いつつ納得してないな。
「お嬢がいないとなったら、つまりどこにいるってことになるんだ？」
俺はそう尋ねてみる。
シグマの支離滅裂な言動の謎ときをしないと落ち着かないし。なによりゼロの『データの破損』ってのがどの程度のものなのか、気になる。こればかりは専門家の登場をあおがないことには、なんともならない。

「優亜がひとりで行ける場所なんて……」

ザザがますます暗くなる。そりゃ無理だろうな……あの箱入りお嬢では。

いや、行けるか行けないか以前に、あのお嬢さんが大事なゼロをほうりだしていなくなること自体が異常なんだ。

我が家のリビングには異様な光景が展開されている。機能停止状態のマシノイドが二人、自家用コンセントからコードをつないでソファの上にころがっているという……。

ザザと同じく、連中の動力源も光充電（ソーラー）システムになってるそうだ。で、こうして外から電源を通すことによって逆にソーラー機能を凍結させてしまえるのだとザザが説明したけど要するに何なのか俺にはよくわからない。

「つまりこうしておけばシグマは絶対に動けないしっ、ゼロの状態もあれ以上悪化させないですむってことですっ！」

わかったから泣くなってば。

「霞ケ関（かすみがせき）だっけ？　優亜ちゃんの研究所」

さっき脱いだばっかりの上着に手をのばしつつ、真砂くんが確認した。

「ぐたぐた言ってないでさ、現場まで行ってみるのが先じゃないのかよ？」

「現場って……所内にですか？」

ザザが眉（まゆ）をひそめる。


Champion

「でもシグマはシグマだけの判断で動いているんじゃないんです。後ろに必ず別の命令者なり協力者がいます。今、僕がシグマのそばを離れたら、どんな方法でここを狙ってくるか……」
「ちょっと待てよ」
割りこんだのは俺である。そうだ、俺も考えが甘かった。
「単独犯じゃないからこそ、お嬢をひとりで放っておくのが危ないんじゃないのか？」
「だろ!?　京平もそう思うよな!?」
「……」
俺と真砂くんの意見は一致したというのに、ザザはまだ乗ってこなかった。
「罠かもしれない……」
……おい。
罠？
「初めから全部が仕組まれてるのかもしれない。何をしてもそれは決められたとおりのことで……僕がどう動いても無駄かもしれない……」
「……あのさあ、おまえが動きたくないってんなら、俺が代わりに行ってもいいんだぜ。俺だったら警戒されないだろ、べつに」
「だめです」
すでに上着をとって玄関に向かいかける真砂くんに、ザザはきっぱりと制止の言葉を投げ

る。

「なんだかわからないけど、そんな気がするんです。わからないけど心配なんです！　シグマっていったい何なんだろう……シグマを使ってその人は何をしたいんだろう……」

お嬢が危ないの一言で何億光年でもぶっとんでいきそうないつものザザは、そこにはいなかった。一瞬、ひどく大人びたような目をして。

誰も知らないもうひとつの顔で。

「もしもこれがプログラムに仕掛けられたひとつの罠で、それで僕がその鍵だとしたら……」

え？

独り言か？　顔をあげて俺を見たザザはもういつもどおりのザザそのものだった。

「わかりました……。真砂くん、服とバイクを貸してください。僕が真砂くんになればいいんですよね……」

ザザが真砂くんに化けて外に出れば、誰かが我が家を監視しているとしても裏をかくことができる。ザザの狙いはよくわかる。止める理由もないし……妥当な策だし、だから俺はいってらっしゃいとザザを送り出すだけである。仮に、少々ひっかかることがあったとしても。

「気をつけてください」

さっきまで真砂くんが着ていた服を受けとって、ザザは俺に向かってそう言った。
「逆でしょ？」
気をつけるのはそっちだろう。俺は笑おうかと思って、やめた。
あんまり真剣で。俺を見つめかえしたザザが。
「京平さんたちが心配です」
「……俺はおまえが心配なんだけど」
「違うんです。僕はマシノイドだから……」
ちょっと待て。
そんな理由でおまえに差別されるのは心外だぞ。
「僕はマシノイドだから、シグマとゼロと、そして優亜のことに責任があります。シグマの問題は僕の問題です。だけど京平さんと真砂くんには、本当はなにも関係がない。これ以上迷惑をかけることになったら……」
「迷惑なんてどこにもないだろうが」
「でも京平さんが怪我をしたのは事実なんです！」
「これは俺が作りたくて作った怪我だろっ！　本人が後悔してないんだからおまえが騒ぐなっ！」
「じゃあ京平さんは僕が京平さんのことを心配しちゃいけないって言うんですか!?」

「俺がおまえを心配する余地くらい残しておけと言ってるだけだろうがっ！」
「それは不公平ですっ！　僕のほうがずっとずっとずっと京平さんを心配する権利があるはずでしょうっ!?　差し引いたら僕の勝ちですっ！」
「勝ち負けじゃないっ！　俺が誰を気にかけようが俺の自由なのっ！」
「……おまえらさー、この期に及んで何、喧嘩してるわけ？」
白けた真砂くんが割りこんでくれなかったら、我々はいつまでも不毛に怒鳴りあっていたよーな気がする。しょーもない……。
「じゃあ僕、でかけますけど……」
わざとらしく咳払いしたと思ったら、ザザは素早く真砂くんになりきって、ＺＸＲのキーを取り上げた。
「気をつけてくださいね」
……しまった、去り際の最後にそのセリフで来たかっ。畜生、やられた……。
「ザザっていつの間にかしたたかになったよなー」
きんこん、と鳴るドアの防犯チャイムを聞きつつ、真砂くんがひとりごちた。
「したたかというか……」
どう言っていいものかわからん。
ただ強くなったってわけでもないし。ある意味、弱い部分はさらに弱くなってるって見方も

成立しそうだ。うーん。
「複雑、になってる気はするねえ」
「人間らしくってか？」
あー。その表現か。
「真砂くんはさ……ザザが本当に人間になれると思うかな」
俺はふとそんなことを尋ねていた。ゼロの問いかけが俺の心には残ってる。『人間らしい』ことと『人間である』ことの、決定的な違い。
「……なんで？」
真顔で聞き返されると……どう説明すればいいのか。
「理由は特にないけど」
「っていうかさあ、俺、ザザが人間になるかどうかって、あんまりたいした問題だと思ってないかもしれないんだ」
あっさりと言って真砂くんは台所に足を向ける。なりゆきで俺もダイニングについていくことになる。
「人間の身体をもてるかって言ったら、そりゃ科学の領域だろ。人間の心になってるかって言ったら、精神論とか宗教論になっちまうだろ。べつにどっちの方向で人間をめざしたって、それはザザ次第だけどさ、ただ俺自身は、『人間になりたい』って言いつづけてるザザがいちば

ん好きなんだよな」
「つまり……『人間』じゃないザザだよね、それは」
「あたりまえだろ。人間じゃないから人間になろうとするんだろ。でも、そうやってなろうとしてるあいだは、ひょっとしたら人間になれてるかもしれないだろ？　だから俺はザザが頑張るかぎり、あいつには望みがあるって思うわけ。テストで満点とるとかさ、それで免許をもらうとか、そういう次元の話じゃないんだから、人間に『なる』とか『なれない』とかは誰にも決められないだろ。まあ、ザザ本人にとってはそれって厳しい条件だろうけどさ」
　明快だ。
「俺、京平はとっくにそう考えてるって思ってたけどな」
　湯気の上がるコーヒーカップを両手に、真砂くんはダイニングテーブルに戻ってくる。
「いやあ、俺はね、『俺とくらべたらずっとマシ』って発想だったもんだから」
「かー、馬っ鹿だなー、おまえなんかとくらべてんじゃねーよ」
「ゼロにもそう言われましたよ……」
「だからさ、京平が京平のために『ザザは自分より人間だ』って考えるのはまだ前向きだけど、ザザのためにそんなこと言ってたら慰めにもなんにもならねえってことだろ」
「……真砂くんって利発なヒトだったんですねえ」
「てめーの弟だろ、今更わかるな、馬鹿。冷めるまえに飲めよ、それ」

「いただきます」
利発で前向きなうえにコーヒーのいれかたもうまい。完璧。身にあまる弟だよなあ。
「でも、まあ、俺も俺自身のためにそう思ってるだけかもしれないな」
コーヒーカップの中身をのぞきこむようにして、真砂くんがそう呟いた。
「だからザザには、けっこう、勝手な理想を押しつけてたりするんだよな。俺は俺で」
「真砂くんの理想って、興味がありますね」
普段のコミュニケーションを欠かしているもんだから、こういう肝心なことを知らない。人間をめざしているザザの姿が好きだという点では、我々の理想は近いような気がするけれども。
「例えばさ……」
真砂くんが目を上げる。あれ？
「どう考えても弟じゃない奴が、弟になりたいって野望をいだいて闇雲にチャレンジしてたら、やっぱ哀れっぽいだろ」
え？　なんだか今……。
今、大事な話をしている途中のような気が漠然とするんだけど。
大事なこと……だと思うのに。
「真砂くん……」

俺は椅子から立とうとして、できなかった。金縛りみたいに。
「……真砂、おまえ……このコーヒー、何か入れた……？」
舌がもつれてうまく話せない。すさまじく――体が重くて……瞼が……。
睡眠薬？　なんだって真砂が……。
「悪い。あとでちゃんと説明する。今、時間ないんだ」
遠くで真砂が……真砂の声が……だめだ、もう聞こえない。
代わりになぜかザザの言葉を、俺は聞いていた。ずっと昔の声を。
『無理だと思いますか？　本当は僕も怖いです』
誰だって怖いんだ。本当は。未来のことなんて。
なにもかも今のままじゃ続かない。ただそれっぽっちのことなのに。
『でもせめて試したい。教えられるんじゃなくて、僕は僕自身で試したい。無理でも。幻想でも』
ザザ……。

4

「ひどいじゃないの！　こんなことしろなんて言わなかったわよっ！　こんなのやりすぎだわ

っ！　非常識にもほどがあると思わないのっ!?」

甲高い声ががんがんと響いて、頭痛がする。ものすごくたちの悪い二日酔い状態に似てるような……。

「ゼロもゼロだわっ！　どうしてそんなとこであっさりやられちゃうのっ！」

「反撃するわけにもいきませんでしたから」

「平気な顔で言わないでよっ!!」

「効果はあったものと思えますが……」

「そんなもの知らないわっ！　何が効果よ、こういうのは単に『運がよかった』っていうのよっ!!」

「あんまり責めないでやったら？　大事に至ったわけじゃないんだし、こいつにも悪気がないみたいだし」

「悪気があったら勘当よっ!!」

……変だ。

いないはずのお嬢さんの声が聞こえる。

それだけじゃなくて。

「お目覚めになっているようですね」

憎らしいくらい落ちつきはらった台詞が頭の上から降ってきた。……おい。

俺は一瞬、マシノイドにも幽霊なんてもんがあるんだろうかなどと間のぬけきったことを考えてしまった。違うよな。違うんだよな。

違うということはつまり。

「ゼロ……？」

「何か不都合でも？」

真面目くさって全然ピントはずしたことを訊いてくるあたりが、本物だ。俺は後先考えずにはねおきて目の前のゼロにつかみかかろうとして、最大級の頭痛に襲われた。だーっ。

「ゼロっ！　おまえなあっ……」

いたたたた。

「はい」

そこで行儀よく返事してる場合かっ。わんわん鳴る頭をおさえて目をあげると、なんたることか、そこには五体無事でぼけっとこっちを見ているゼロと、そのゼロをやたら切実な様子で睨みつけてるお嬢と、そのお嬢を広い心で見守ってる真砂くんまでが控えているではないか。

エイプリルフールじゃないはずだ、今日は。

「あのなあ……」

本当は怒鳴りつけてやるべきだったんだけど、力がぬけた。

これが夢じゃないことを祈る。畜生、俺はこれでもそれなりに本気でゼロのことを心配して

いたつもりなんだがなあ。思いっきり、その真摯な姿勢をはずされたぞ。

お嬢はお嬢で、かなり深刻に行方不明だったんじゃないのか、確か。で、その行方不明のお嬢を大マジに危ないだのなんだの言ってたのは真砂じゃなかったか？　え？

「薬が合わなかったみたいね。悪いことしちゃった」

「こいつけっこう酒にも弱いし。酒に呑まれるタイプなんだよな」

「何か私におっしゃりたいことがあるなら、お早めにどうぞ。こちらもあなたにお話ししなければならないことがいくつかあるものですから」

三人して勝手にしゃべるなっ！　こいつらみんな、しつけがなっとらん！　保護者の顔が見たいぞ。……俺のことだけど。

「俺が言いたいことなんて決まりきってるだろ。推測しなさい、推測！」

「口に出したほうがストレスは発散されますが」

余計なお世話だっ。

「……つまり、この状況について詳しくお話しすることがお互いのためのようですね」

優等生のゼロがそう分析する。初めからそこに持っていきたかったんだろう。

「ゼロ。まずひとつ質問を優先させろよ。それが筋ってもんでしょ」

「何でしょう？」

「おまえ、元気か？」

ゼロはきょとんとしたように俺を見て、それからマジメな顔を作った。
「何も問題はありません。確かにシグマは私の記憶（データ）を破壊しましたが、それはもともと計画されていたことでしたから、事前にバックアップは万全になされていました。外傷は優亜さまの手によってさきほど修正されましたし……」
「でも今、お嬢さんがやりすぎだの非常識だのって言ってたのは、おまえの傷のことじゃなかったのか？」
「ええ、それはシグマが独走してこちらの指示以上に深い傷を私に負わせたので……少し、危険な局面ではあったということです。しかしそれによってザザに与えるショックが増大しましたから、私としては好都合な結果だとうけとめているのですが」
好都合？
あれっ、ちょっと待て、ちょっと待て。計画？　指示？　ゼロとシグマがどういう関係だって？
「そういうこと言わないでってばっ!!」
お嬢がヒステリーを起こす。
「だから優亜はいやだったのよっ！　シグマなんてぜんぜん良い子じゃないんだものっ！　ゼロがどうしてもって言うから信用したのに、ゼロはゼロでシグマのこと知りませんでしたなんて言い出すしっ！」

「二重人格だったんだってさ、そいつ」
真砂くんが横からフォローする。ゼロが二重人格？
「その表現にはやや誤解が含まれているようです……」
かなり複雑な表情になって、ゼロがぽつりと呟いた。

どこかで見たような内装だと思ったらここは俺の家……ではなくて、我が家と同じマンションのなかの一室だという。
ちょうど空室になっていたところを、お嬢がてきとーにコンピュータを操作して（もちろん無料で）私物化してしまったそうである。灯台もと暗しというけど、まさか自分の家の真下にお嬢が別荘なんかつくってるとは思わなかった。
三人いっぺんに喋られても俺が混乱するばっかりなので、相手役は結局ゼロひとりにおちついた。さっさとそうしときゃよかったんだ。
「率直に申し上げますが――シグマが所内の何者かによって悪用されているという私の見解は、単なる虚偽でした」
まったく率直じゃないぞっ。せめてもうすこし熟語を減らしてくれ。
「つまりおまえさん、大嘘つきっ！　だったわけか？」

「……いじめないでください」
「あのなあ」
調子が狂うからやめなさい。恨めしそうに下を向くなってば！
「そのとおりです。今まで私がシグマに関して話したことは、ほとんどが嘘だったと考えてくださってけっこうです」
「じゃあつまり、シグマを造ったのは誰なんだ？」
「わかりきったことと思えますが。ロボット工学がどれほど発展しようと、この世界中で私たちのような進化型の機械人間を製作できる方は、ここにいる優亜さまだけです」
ゼロはそこで自分のことみたいに誇らしげに言いきるけども……。
クエスチョンマークが多すぎてたまらないな。ひとつひとつ片づけていくしかない。
「……なんでシグマを造ったのかわからないな。子守は二人いれば充分だったんだろ？」
「実験です」
一言で答えてから、ゼロは少しためらった。
「いえ……試練です。あることを試されている最中なのです」
「試す？　何を？」
「お話ししませんでしたか？　私とザザには、優亜さまを基準とする良心システムが組みこまれているということです。優亜さまの父君である浅見博士が考案された、独自のシステムで

す。そのシステムを除いたマシノイドがどのような精神（メンタリティ）をもつのか——それは今まで知られずにいましたが……」

その実験か？　シグマが。

生まれつきお嬢さんを唯一（ゆいいつ）絶対の存在として決められている、良心と倫理のシステム。

そいつをとっぱらっちまったものが、シグマだということらしい。

「他人が製造したマシノイドだからシステムが働かない、ってのが嘘っぱちで、要するに初めからシステムをはずすことが目的だったのか」

「そういうことになるのでしょう……」

「答え方があいまいなんだけど。なにか違ってるのか？」

「いえ。申し訳ありません、私の意識のほうに問題があるので……」

ゼロは困ったようにかぶりを振る。人間的なしぐさで。

「意識？」

「はい。実は先日……二月十四日、優亜さまが十二歳になられたその当日から、どうやら私の中に眠らされていた回路が動きだしたらしいのです。裏側の意識、とでも今は言っておきます。そして優亜さまに進言してシグマを造らせたのは、『裏側』の私自身なのです。

ところが今の私には、何故（なぜ）そのとき良心システムをはずしたマシノイドを造らせたのか、自分自身の論理の展開をまったく思いだすことができないのです。まるで別人の自分が動いてい

たとしか考えられません。それでいて、計画をすすめようとする自分だけはまだ残っているのです。……不自由な状態です」

「……めんどくさいな、そいつは」

ジキルとハイドか？　二重人格のマシノイドなんて、あるんだろうか。

いや……眠らされていた回路？

「二重人格が誤解なら、正解は何なんだ？」

「そうですね……」

ゼロは目を伏せる。言葉を探すために。

つくりもの以上に端正な顔をしてるマシノイド。でもこいつもまだ、確か六歳だった。管理できない自分のハイドに突っ走られたら、そりゃ人間の大人だって困る。つきたくもない嘘をついて。なんというか……おまえも大変だなあ。

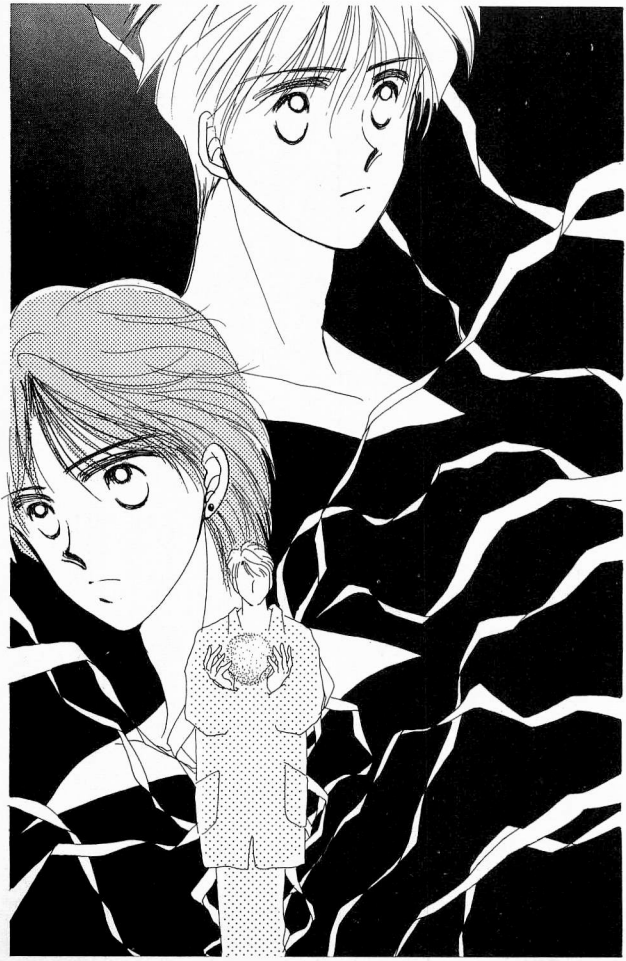
「答えが出ないなら、急がなくたっていいさ。とにかくシグマは敵じゃなくって、おまえさんが無事ってことはわかったから」

「シグマは味方ではありませんよ」

あっさりとゼロがこっちの言葉をくつがえした。

「私はシグマを指示する立場ですが、シグマはザザに敵意をいだいていますし、ザザもシグマを許しはしないでしょう」

「おい……そんな対立関係つくって何になるんだ？」
「そういう計画なのです」
「どういう計画だよ」
「それはまだわかりません」
あーのーなー。
「まだ解答は出せませんが……」
ゼロの、氷みたいな目が俺を向く。
「優亜さまの誕生日にあわせて始動するような隠し回路を、私に託せる方は、たったひとりです」
ああ、そうか。
お嬢が何も知らないなら、しかけた人物はひとり。共同製作者の——浅見パパしかいないじゃないか。
「ですから私はこのプログラムを、浅見博士の遺言と考えています」
呟くようにゼロが言う。
「避けて通るわけにはいきません」



シグマはここにはいない。あいつはあいつで勝手に独走しているらしい。たしかに他人の言うことなんか初めから耳に入れない奴だ、シグマは。

ゼロもお嬢も手を焼いている。あいつが俺の腕を傷つけたときには、さすがにまずいと思ってお嬢さんが——そう、うまくゼロにつれられて恵比寿まで来てたんだってさ——停電を仕組んだんだけど、シグマは脱出をいやがって抵抗したあげくに、俺にとっつかまったという裏の事情があったんだとか……。どうりで理不尽な展開だと思った。

まっすぐな気性とでも言っちまえば可愛げはあるけど。

あそこまで自分勝手な奴、どこにもいないぞ。究極の型破り。

良心システムをはずした結果が、これか？

だけど……。

俺にはひとつ、気になってることがある。シグマはザザに敵意を向けている。ザザはシグマを憎んでいる。

だけど俺は……。

今は亡き天才博士が何を考えてこんなプログラムを用意したのか。それはやっぱり天才の発想だから一筋縄じゃわかんないだろう。

ゼロを動かして、お嬢にシステムをはずしたマシノイドを造らせる――。せっかく考案したシステムを捨てるってことは……何なんだ？

「悪い、本当に……。優亜ちゃんに頼まれちゃってさ」

真砂くんは平謝りに謝ってくれたが。しかし。

「頼まれるったって、いつそんな暇があったんだ」

「だから俺、京平のこと迎えに病院まで行っただろ。その前に店に寄ったら、彼女ひとりで困っててさ。ゼロもシグマも、うちの部屋に運ばれてく最中だったから……」

はー。なるほどね。

「でもなんで俺を連れてくるわけ、それで」

しかも睡眠薬まで使って。

「だって、もたもたしてるうちにザザが戻ってきて優亜とゼロが嘘ついてたことを知ったら大変じゃないのっ！」

いきなりお嬢が力説する。

「でも一から京平に話してたら、いくら時間があったって足りないでしょっ。とにかくザザがこの建物を離れた隙に、ゼロとシグマを回復させてこの部屋まで移動しなきゃならなかったのよ。だから説明は後まわしってことで京平にも一緒に来てもらったの」

はー。俺はまた深々とため息をついてしまった。

「あのねえ。俺にバラせることだったら、ついでだからザザにもバラしたほうがよかったと思うぞ、俺は」
「そんなことできないわっ!!」
「だからって俺まで自動的に共犯にされたら、俺はすごく困るんだけど」
「だって京平がザザの味方についてたら、シグマとの勝負にならないのよ!」
え?
その場の勢いで出た言葉というよりは、今のはお嬢の、本音中の本音だったような気がする。
「勝負にならないって……あいつら二人を勝負させたいのか、つまり」
「そういう計画なのよっ!」
「だからどういう計画なんだよ!」
「それはまだわからないの!」
あのなあああ。
「おい、冗談じゃすまないぞ。シグマはザザを殺す気で動いてるんだろ? お膳立てしてどうするんだよ、おまえたちは」
「殺させたりなんかしないわよ、絶対っ!!」
「そんな命令がシグマに通用するなら、これまで苦労してないだろうが! 実験だの試練だの

っていうけど、ゲーム盤のコマじゃないぞ、あいつらは！」

「京平、ちょっといいか？」

話に入ってきたのは真砂である。あくまで冷静に。

「俺はさあ、とにかく、今までだまされてたってことを知るのがザザには一番ショックだと思うんだ。なんでこんな計画がプログラムされてんのか俺には見当つかねえけど、実際にシグマがそのプログラムにのっとって動きだしてる以上、止めようがないだろ。今さらザザに本当のこと言ったって泥沼に落としこむだけだろうし、だったらシグマのことは単なる敵だと思ってたほうがザザにはいいんじゃないのか？」

知らぬが仏の論理か。それは……正しいことは正しいと俺も思う。

俺はただ、まわりじゅうの人間に――『家族』にまで――嘘をつかれて何も知らずにいるザザのことを平気で見ていられるほど頭がよくない。俺の問題なんだ、それは。

「そりゃたしかにザザにとっては親切かもしれないさ。だけど嘘ってのはいつかバレることになってるものだろ」

「一般的にはそうでしょうが、この場合は特殊です。ザザはわれわれを疑うような性質の持ち主ではありません」

深い考察をのべるのはゼロ。

こいつらみんな割り切りがよすぎる。……俺がしつこいだけなのか。

だけど俺は……。

「少し戻るけど。俺に、ザザの味方をするなって話だったっけ？」

「そうよ」

俺を見上げて、きっぱりとお嬢が言った。……いつの間にか、ずいぶん大きくなったな、この子も。

「京平には、ザザの味方をしてほしくないの」

「計画の邪魔だから？」

「それがザザのためだと思うからだわ！　パパが優亜のために残したプログラムなら、優亜は信じるものっ！」

「親父さんがザザのことまで計算に入れてたとはかぎらないんじゃないか？」

ザザをつくったのは、親父さんが亡くなった後のことだったはずだ。自分の娘がひとりでマシノイドを製作しちまうなんて、そんなことまで予測できるか？

「パパは天才だもの」

即座にお嬢はそう断言した。異議をさしはさむ余地なし、である。

「つまりさ……」

俺はぼんやりと見えてきた結論をたぐりよせる。つまり、そうなんだ。みんなザザの味方なんだ。

ザザに与える試練なんだ。あたりまえのように。
お嬢も、真砂くんも、ゼロも、ザザのことを考えてる。だから迷わないんだ。だけど俺は……。
ずっと気になっていたのは。多分。
「じゃあ俺がシグマの味方になってやったらどうなるんだ？」
「え？」
お嬢が啞然とする。お嬢だけじゃなくて、あとふたりの騎士たちも。
「シグマって何なんだ？　ただの実験材料とか失敗作とか、そんなふうに片づけられたら……誰だってやけになって暴走するんじゃないか？」
近いんだ。俺の中では。
今のシグマと……昔のザザは。
違いといえば愛されてるか愛されていないかってことくらいで。そんなのはシグマの責任でも罪でもない。
「シグマに同情するということですか？」
低く、ゼロが尋ねた。同情？
俺は首を横に振る。
「さあね……。とにかく俺は帰る。乗りかかった船、こんなふうに降りるのは好みじゃないん

だ」

「それじゃ困るのよっ！」

「京平！　今度へたに割りこんだら、もう七針縫うくらいじゃすまないだろっ！」

「ザザの味方にもシグマの味方にもならず、手出しもせず、じっと見てりゃそれで満足か」

俺の言葉には、一種の殺気がふくまれたと思う。怒鳴りはしなかったものの。

天国に届くなら俺は親父さんに言いたい。

あんたは確かに優秀だ。なにしろゼロをつくり、マシノイドの基礎をつくった。それがなかったら今頃、ザザもシグマも誕生しちゃいないだろう。

だけどあんたにだって、あいつらで遊ぶ権利はないはずだ……。

5

真夜中というよりはすでに明け方にさしかかろうとする頃、俺はのろのろと階段を上っていた。

左腕の三角巾が、やっぱり邪魔である。エレベーターを使わないで階段にしたのは、少し考える時間がほしかったからだ。

こんなことは前にもあった。逃げてきたザザは追っ手のことを知らずにいて、そして俺は監

視されてるくせにザザにそれをぎりぎりまで教えてやれなくて。
当事者じゃないってことかな。俺が。いつも。
「京平さん？」
階段の上のほうから、そんな声が落っこってきた。
なんで階段なんかで待ちかまえてんだ、おまえ。
俺のやることなんて全部お見通しだとかいうんだろうか。
「よお」
俺は十五段先を見上げて、ザザを見て、どうしてかはよくわからないけど嬉しいような切ないような気分で、いつもどおりに挨拶をした。
ザザは俺を見つめたきり、何も言わなかった。
大人びたような、不思議と澄んだ表情で。
足音もたてないで段を下りてくる。俺のところまで。急がない、一定の歩調で。
静かに。
「京平さんですね？」
目の前までやってきてようやく口をひらいたら、それは身元確認の一言。あ……化けたシグマのことを警戒してるのかな。
「いかにも京平さんだけど」

「そんなこと知ってます」
おい。
「京平さんだなんてことなら知ってます、僕でも」
微妙に反抗的ではないのか？　この言いまわしは。
「これだけ大変なときにメモの一枚も残さないで雲隠れしておいて平気で帰ってこられるのは京平さんだけですよね」
沈黙。
たしかに、研究所まで無駄足をはこんで、帰ってきたら家中もぬけのからで、その後まったくフォローがなかったらザザじゃなくたって途方に暮れる。だから俺としてはそのへんをうまく穴埋めしたくてあれこれ思索していたというのに。
結論が出る前におまえにつかまっちゃったんだ——とは言えないし。
「優亜とは連絡がとれました」
くるりと俺に背を向けて階段を上りはじめながら、ザザが言った。
「え？」
「僕とは入れ違いになったらしいです。ゼロとシグマを回収したと言ってました」
……それがひとつめの嘘。
「ゼロはなんとか修復できるそうです。それよりシグマの分析を急がなければならなくて……

でも所内に戻ると妨害があるかもしれないので、少し遠いんですが、千葉にある『実家』に向かったそうです。そこなら、浅見博士の使っていた施設があるので」

……嘘の羅列。

嘘が悪いんじゃない。本当よりも本当らしく聞こえちまうところが許せないんだ。

「真砂くんが一緒だからそちらは心配しないで、僕は京平さんについていたほうがいいということでした」

「……だけど俺がいなかったのね」

「すっごく、よくわかってるんですね」

ずんずんとザザは先に進んでいく。そんなに根暗く拗ねなくても。

……ザザ。

ややこしくてたまらないな、人間ってやつは。がんじがらめになる。いろんな嘘に。

俺はあんまりたくさん嘘をつきすぎて、人間でいるのがめんどくさくなっちまってた気がする。だから俺はおまえと一緒にいて、少しずつ……楽になっていたんだろうけど。

おまえならどうする？

「ロンドンに行く準備をしてたんだよ」

俺が言ったとたん、間髪をいれずにザザが振り返った。

「どうしてっ……」

「なーんてね、嘘」

べしゃっ。ザザが思いっきり階段でコケた音である。そんなとこでコケるなっ。

ふるふると肩を震わせつつ、ザザが顔をあげて俺を見た。目がマジだ。

「きっ……京平さんの……京平さんの、京平さんの馬鹿っ!!　今日という今日は本当に許せないっ!!」

「おまえなあっ！　何もそこまで反応しなくたっていいだろうがっ」

「そうはいきませんっ!!」

「いつまでも倒れてないで立ちなさいってば」

「話をそらしたって無駄ですからねっ！」

さすがに俺のことを知り尽くした台詞。俺は無事なほうの右腕で、ザザをひきずりおこしながら……尋ねる。

「許さなかったら、どうするんだ？」

「……え？」

ザザの声がとぎれた。

許せなかったらどうなる？

少し苦笑して、ザザが答えた。

「どうするっていっても……だって、京平さんじゃ……許せないっ、と叫んで駄々をこねるく

らいが関の山ですよね」
「相手がシグマでも？」
今度は、完全にザザが言葉をなくした。
「京平さん――？」
「なーんてね、言ってみただけー」
「京平さんっ!?」
俺はへらへら笑いながら、ザザをほっぽってさっさと階段を上る。一拍おいて、ダッシュでザザが追っかけてきた。
「そんなことないでしょう、京平さん!?　何か、今、僕に……」
「あ、そーだ、このまま日の出なんか見たくないか？　おまえ、うちの屋上に行ったことないだろ。いいぞー、広くて」
「京平さんってばっ」
「黙ってついてきなさい。早くふたりっきりになっていいことしましょーよっ」
「……京平さん、まさか酔ってたりしませんよね……」

前言一部撤回。夜明け前の屋上は、広いことは広いがやたら冷えこんでいるのだった。むち

ゃくちゃ寒い。しかしさすがに夜景はきれいだ。こんな時間なのに、日本人はどうしてこうマジメに電力を消費したがる種族なんだか。

「空の色が、地上の明かりだけで変わっちゃってますね」

「なんたって宇宙空間から見えるんだぜ、この電灯の洪水は」

「宇宙人もびっくりですよね」

ザザが言うとなんだかSFに聞こえない。

「夜景がにぎやかな街ってのは珍しくないだろうけど、東京のは何か、一癖あるだろ」

「そうですねえ……地味じゃないのに、そんなに元気でもないし、静かだし、でも疲れてる感じでもないし……」

「世界中でいちばんいいところだなんて口が裂けても言えないんだけど、俺には似合ってるんだ」

東京って場所が。

いつの間にか、いちばん落ちつくところになっちまって。自分の生まれた場所よりも。

「僕も好きです」

夜風に吹きつけられながら、ザザが笑う。

「僕は、生まれたときから東京しか知らないし……」

「嘘つけ、おまえ、横浜中華街につれてってやっただろうがっ」

「えっそれ、違いますよ、僕じゃないですよっ。僕も行きたかったのに京平さんと真砂くんの二人だけで行っちゃったんでしょっ」
「あ、そっか、そういや渋谷で待ち合わせしたのにおまえが来なかったんじゃないか」
「待ち合わせの場所を間違えたのは京平さんですよっ！」
「いやっ、俺は絶対ハチ公の前って言ったぞっ」
「ええっ、１０９って言ったでしょ、絶対っ！」
なんだかなあ。我々は一年もかけてこの程度のことしかやってないのか。
「あのとき京平さん、胸をたたいて、次は横浜ツアーにつれてってやるって約束しましたよね」
「……そうだっけ？」
「約束しましたよねっ！」
記憶にございません。モーロクしまくりだなー。
「僕、とっても楽しみにしてたんですけど」
あら。そうだったんですか。申し訳ない。
「いつでも行けるさ。横浜なんて目と鼻の先だし」
「……一緒に行けますよね？」
ふりむいたザザが、俺にそう尋ねる。

風が強い。俺は目を細める。

やっぱりそうきたか。

「だからロンドン行きの話だったら本当に嘘だってば。どうせ哲のことだから音作りに凝りまくって、半年くらいは帰ってこれなくなるんだぜ。ノイローゼになってしまうぞ、俺は」

「半年後でも一年後でも、京平さんが帰ってくるならかまわないんです」

まっすぐ俺を見たまま、ザザが続けた。

「だけど……今の京平さんは、どこかに行ったきり消えちゃいそうで……」

クラゲ男の次は透明人間か？

さすがにそう口に出したら、ふざけすぎってやつだろう。いい表現だと我ながら思ったりはするけど。

「俺が家出小僧だったって話はしたっけ？」

「えっ……し、知りません」

慌てたみたいにザザがかぶりをふった。

「うん、その昔、京平さんは家出小僧だったのだよ。家庭がけっこう厳格でね、ロックンロールなんて不良の音楽だっ、とか本気で思ってるようなパパさんと、過保護のママさんと、美人で優しいお姉様が、やっぱり反対してねえ……俺がギターをやってることにさ」

「どうしてロックが不良の音楽なんですか？」

「見た目が派手だからじゃない？　知らないけど、俺も。とにかくギターなんかで遊んでいてはいけません、大学に行きなさい、と命令されてパパさんと大喧嘩してね、しまいにゃ腕ずくで全寮制の予備校にたたきこまれそうになったから、高校の卒業式の前の日に、ギターだけ抱えて家出したの。それっきり勘当されちゃって実家には出入り禁止」

「なっ……なんで勘当なんて……。だってその頃には京平さん、もう天才ギタリストっていわれて認められてたんでしょう？」

「そんなもの通用しませんよ、ロックを知らない人には。父親は父親で、俺にやらせたいことが別にあったわけ。だけど俺がそのとおりに育たなかったわけ。単にそういうことだからさ」

ザザは黙る。

何もかも捨てて東京にとびだしてきたときの気分なら、ザザにも覚えがあるはず。それまで自分がいた世界の、外側に。たったひとつだけ大切なものを抱いて。

「僕が……一人だけ突っ走って世の中に出てきて、残された人の気持ちを忘れてるって、京平さんが言ってくれましたよね、昔……」

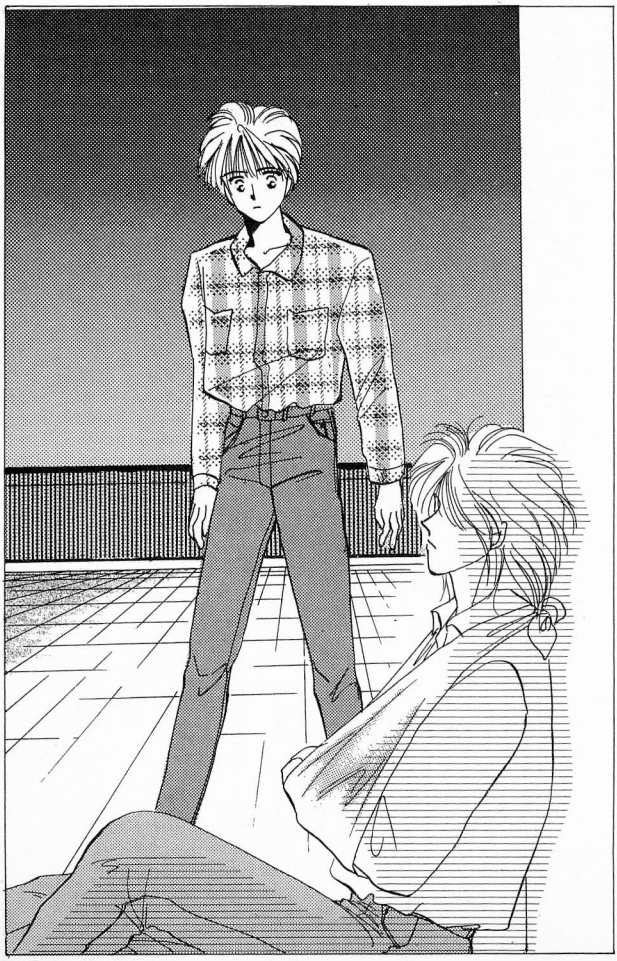
「実は言えた義理じゃないんだよねえ」

「えっ？　違うでしょ、京平さんだから言えたことだったんだって、僕は思って……」

「そーんなたいした人間じゃないってば！」

「そんなことあります！」

おまえに力説されると暗示にかかりそうになるんだよ。
「もしもあのとき京平さんに会えてなかったら、今頃どうなってたか……」
「そのことなんだけどさ」
俺はレンガ敷きの地面に腰をおろした。東側に向かって。
「ひとつ訊いていいか？」
「……はい」
「おまえさん、本当に今でも人間になりたいと思ってるのか？」
「え？」
意表をつかれたようなザザの声。
俺はわざとザザを振り返らずに、色を薄めはじめた東の空を見ていた。
今から一世一代の嘘をつくから……。
「俺はがっかりした。シグマを殺そうとしたおまえは『人間』でも『人間予備軍』でもなくて、ただのマシノイドだ。そのくせおまえは初めから終わりまでシグマのことを見下して、あいつを機械以外のなにものとも思ってなかった。ロボットに命令を出す人間みたいな、変な優越感だけであいつを見ていた。都合のいいときだけ人間のまねをする奴を、俺は『人間』だとは思わない」
ザザからの反応はなかった。何も。



「昔のおまえはもう少しましだった。経験は足りなくても、いつも一生懸命『人間』になろうとしてたからさ。だけど今のおまえは、たしかに器用にはなったし、人間に近づきはしたけど、俺が認めたザザじゃない。今のおまえを見ていても俺は、一年前みたいに好きにはなれないな」

何も言わないのか。俺を責めないのか。俺が言ってることこそ勝手な押しつけだって。暴(あば)けばいいじゃないか。俺がごまかしているたくさんのことを。

「家出少年のよしみで、つい拾っちまったけど……俺といるとおまえはどんどん悪くなっていくんだ。今度の件で、それがよくわかった」

「後悔しているんですか？」

一言だけ、ザザが尋ねた。俺の背中に。

「後悔してる」

俺が答える。

「じゃあ、消えるのは京平さんじゃなくて……」

冷たい風が横なぐりに走りぬけて、最後の声は聞こえなかった。

俺は朝日を待っていた。この寒い空を染めかえて太陽が現れるのを待っていた。だがいつまで待っても、ひとすじの光は夜をつらぬきはしなかった。

行っちまえ、ザザ。

信じさせる嘘なんて俺はつけない。
そして誰もいなくなった広くて寒い屋上で、俺は太陽を待ちつづけていた。

File 6
ロング・グッドバイ

1

ギターは〝音〟を出すんじゃない。
それは〝声〟なんだ。
それは歌うんだ。小さくて冷ややかな身体に、無尽蔵の感情とコトバを秘めて。

むかしむかーし、俺か哲がそんなことを言ったら、ボーカルの秋史がいやーな顔をして、
『てめえら楽器をそこまで愛してやがるんだったら、生身の歌うたいのこともうちっと丁重に扱えや』
などと愚痴っていたものだった。
『とんでもないよねえ京ちゃん、俺たち目一杯っ、愛してるよねーそこの天才ボーカリストのことなんて』
『あったりまえでしょ哲ちゃん、だってボーカリストって楽器だもんねえ、いわゆるひとつ

の』

『歌の出る楽器!!』

『そぉら歌え歌え歌わんかーっ!!』

てめえら血も涙もねえのかっ、と秋史がマイクスタンドを蹴りとばして、それがベースの泊を急襲して何をまちがえたか大事なマーシャルアンプまきこんで、あげくたまたまそのときスタジオのすみっこでドラムの三戸がひろげていた愛妻弁当をひっくりかえしてオシャカにしたという顛末がおまけについている。

確かに血も涙も、まっとうな心さえもなかったねえ、ギタリスト・相原京平くんには。

今になってみて、あのときの秋史の言葉がしみじみよくわかる。

生身の相手がどんなにわんさか目の前にいたって、電気仕掛けの小さな弦楽器とふたりっきりで対話することのほうが大切なんだから。

誰を泣かせても、誰が死にかけていても、ステージに立ったが最後なにもかもすっとばして真っ白になっちまうんだから……。

2

「俺を殺す気ですか」

いたいけなボーカリスト、加納光くん——通称カノンちゃんが、すでに何度目かわからなくなったクレームをつける。

「いいですよ、この際、アレンジがころころ変わろうが曲順が毎回ちがおうがかまいませんよ、俺だってプロですから！　だけどそのタイミングでいきなり哲郎さんに合わせて入ったりして、音がはずれなかったら奇跡ですよ、ここは！」

「はずすもはずさないも、音はひとつでしょーが。めんどくさいコードがあるわけじゃなし、たったひとつの音を出すのになにがそんなに困るのよ？」

メロウなテクニシャン——俺に言わせりゃぶっとびお笑いギタリスト以外のなにものでもないけど——の杉山哲郎が、真理とも屁理屈ともつかない論旨でカノンにたちむかう。

「あのね、このキーは俺だから歌えるんですよ、他の人間だったら声も出ませんよ、あんたの曲にはそのへんの配慮がまったくないんですよ！　人間が歌うってことを考えてないでしょう、あんたは！」

「それをあえて歌うのがプロだろっての！　ここは見せ場でしょ!?　ヤマ場でしょ!?　絶っ対にこっちの構成のほうがカッコいいに決まってるでしょうがっ!!」

「実現可能か不可能か、きちんとわきまえてから言ってくださいね。客の耳、ふし穴だと思っちゃいないでしょうね。コケたとき恥さらすのはあんたじゃなくて俺なんですよ。だいたいあんたには俺の才能を尊重しようって考えがまったくないんですよっ！」

「ほおーっ、客に対してカッコつけんのがおまえの才能なわけね？」
むかっ、という三文字を露骨にバックにしょって、カノンが頷く。
「当然です！」
「いばってどうするの、おまえは！」
「責任を果たしてるだけですよ。なにせ俺は、このユニットの『顔』ですから。楽器さえ愛でてりゃいい誰かさんとちがって」
「なーるほどねー、ただの『顔』ならキレイなポスターにでもなって道端で売られてりゃそれでおカネがもらえるもんねー」
嫌味たらたらの哲の反撃。いいかげん泥沼にはまりつつあるぞ、ふたりして。
「ねえ京平、あたし、このふたりにユニットなんか組ませたこと後悔してるって言っていい？」
頭痛をおさえきれない様子で、パイプ椅子の背にがっくりもたれかかって玲子さんがぼやいた。
「社運を賭けたプロジェクトに、なーにを今さら」
にんまり笑ってみせて、俺はそう答える。
全国ツアー真っ最中（のはず）のメガ・ロックユニット『SEXION』は、暇さえあればこうしてリハーサルスタジオにこもってコンサートメニューの練り直しに励んでいる。どー見

てもガキ二匹がケンカしてるようにしか見えないけど。せっかくライブ本番と移動日とのあいだにごくわずかだけあけてあった休日(オフ)までつぶして。

「熱心なのはいいことじゃございませんか。社長だったらアーティストの心意気を酌(く)みとってやらなきゃ」

「他人事(ひとごと)だったらいくらでも奨励(しょうれい)するわよ。でもこの人たち、一度カラミ始めたらいつ終わるかわからないんだもの。これじゃ安心して取材も組めやしないじゃないのっ」

「楽しいんだよねえ……それが」

「何が!?　マネージメントに迷惑かけるのが!?」

「うん、そう」

「……あなたねええ」

そうじゃなくて。

それくらい夢中になって音楽にはまりこんでいられる、その時間が。

売れに売れてるチケットのことや、トップクラスにくらいこむチャートの順位や、熱狂的なファンからのプレッシャーなんて……こいつらもちろん気にしてはいるけど結局、要はどこまで好き勝手にやりたいように気持ちのいいステージを作れるかってことのほうが大事なんだ。

ゴールデンウィークといえば業界にとっちゃ書き入れ時。そして『セクション』にとってのゴールデンウィークといえば、例の爆弾さわぎで中断されたコンサートの振り替え公演がおこ

なわれる時期でもある。一週間後にそんなもんが控えてたら、そりゃ握りこぶしに力も入ってしまうだろう……。

「まったく……京平さんも、この人の石頭をなんとかしてくださいよ！」

カノンがこっちに矛先をむけてきた。追及に行き詰まったな。

「なんとかできたら百年前にそうしてるよ、とっくに」

「だめだめ、俺と京ちゃんってば血のつながらない双子だもん。同じ穴のナントカ。だからまず本人が更生しなきゃ俺になんにも言えないもんねー」

「更生ったってあんたたち、同じ穴の不良ギタリストをどうやったら更生させられるのか知りたいです、俺は！」

おおお、名言だ。われわれ不良ギタリストが顔を見合わせて「うわーほんとだーカノンって人を見る目がありまくりー」と声をそろえたら、かわいそうな加納くんはヒステリーをおこしてスタジオの外へかっとんでいってしまった。いかん……またもやわれわれの悪い癖が。

「かわいいなあ、カノンちゃんてば」

「かわいいよお、あいつは。でも京ちゃん、だからってわざとカノンのことイジめたりなんかはしないでよね」

派手な青色でペイントしたフェルナンデスを肩にかつぎつつ、哲がひょこひょことパイプ椅子見学組の俺たちのところまで寄ってくる。

「いじめてませんでしょ、別に」
「嘘だねー、嘘だねー。最近めっきり性格悪いんだもん、京ちゃんは。あいつもともと京平のファンなんだから、んな目の前で京平が見てたらカノンが緊張するのあたりまえじゃーん？」
「なーんだ、哲郎くんはカノンにとってどーでもいい人だったのか」
「こらこらこらっ。もしかして京ちゃんはセクションをかきまわして解散に追いこみたいのかっ!?」
「なんたって俺には前科があるから？」
別に俺はなんにも考えずにそう返したんだが、俺の台詞を聞いたとたんに哲郎と、それから隣の玲子社長が、ほとんど同時にぴたりと反応を止めてしまった。
「……京ちゃん」
まじまじと俺の顔を見て——なにやら、風邪ひきの病人を見舞いにきたらちょうど特大のくしゃみをしてるとこだったぞという雰囲気で——つまり少しばかり心配そうに、哲郎が言った。
「やっぱし京ちゃんてばちょっと、荒んでるぞ」
は？
「荒むというと青春の暴走の象徴の過激な不良化ってやつ？」
「そりゃただの反抗期の中学生。あっ、ほら、やっぱり笑えるセンスも衰えてるよー。京ちゃ

ん昔っから馬鹿だけど、いちおー笑える馬鹿だったもん」
やみくもに何を言い出すのかと思えばこいつは。
「べーつに、俺は普通ですよ。これが普通の状態なの、俺は」
「なんの理由もなくいきなり持病の発作が出てくる人のどこが『普通』なのよ？」
今度は玲子がぼそりと口をはさんで、俺はとりあえず何もコメントすべき言葉を思いつかなかったもんだから、軽く笑う程度でとどめておいた。

フェンダー・ストラトキャスター。
俺が世界中でいちばん好きなギターの名前である。
十日前、俺がいきなり物置部屋の奥から埃だらけのケースをひきずりだしてきたとき、その中身が何なのか真砂には一目でわかったはずだった。
しばらく旅回りしてくるから、なんて、脈絡のかけらもないことを俺は口走ったりして、どこに行くかも説明しないで青山のマンションを出てきた。説明したくなかったわけでも、わざとそうしたわけでもない。なぜか俺はそのとき、行き先を話しておかなくちゃ真砂が困るだろうとか俺が勝手にふらふら動いたらゼロやお嬢の計画に支障をきたすだろうとか、そういった全部のことをまるっきり考えられなくなっていたのである。

まわりの事情なんておかまいなしで、自分ひとりの都合で。
そのことだけで頭いっぱいにして。
これはまたもや例のパターンにはまってるんじゃないか、と気がついたのは家を出てから三十六時間後のことだった。とっさに二枚しかない十円玉をつかんで電話ボックスにとびこんだら——深夜三時だってのにコール二回で受話器をとった真砂は、
『ばあかっ、行き先の見当なんかとっくについてる。今さら気がついてあせってんじゃねえよ、みっともねえだろっ』
なんて、あくまでいつもの調子の真砂くんで……。
『こっちはいいから、京平は京平の好きなようにやってみろよ』
あっさりとそんなこと言って。
『とにかく自分が怪我人だってことだけは忘れんなよ。面倒くさがって食事の回数減らしたり生水飲んだり警察の厄介になったりしないように。あと、おまえ放っとくと着たきりスズメだから、洗濯物は宅配でうちまで送れ、洗っといてやる。それから——』
ブーッ、とコインのこり一枚だぞのブザーが鳴って、そこで真砂はしばらく黙った。
『——それから、今度からは二十四時間以内に電話しろ』
本当はものすごくたくさんのことを時間切れになるまえに俺は言わなければならなかったんだが、その一言を聞いて俺の口から出てくる台詞ときたら……うんわかった、ごめん、十円玉

ないからまた明日電話する、必ず電話するから、という、意味のかけらもない言葉だけだった。

もしかすると俺はどこかおかしいのかもしれない。頭の部品がひとつかふたつ壊れているのかもしれない。なにもかもわからなくなっているのかもしれない。何が大切で誰に心配をかけているのか、何をしたくて誰と一緒にいるのか、自分がどこにいるのか、今日が何日で今が何時なのか、俺は何なのか、俺は誰なのか、俺は今でも人間なのか……

ギター一本だけかついで、七針縫った糸もぬかないまま追っかけたのはSEXIONのコンサートツアー。たった十日で福岡、岡山、大阪とめまぐるしく舞台は変わる。俺はただあいつらのステージを見ていたくて。まあうちの事務所がからんでりゃ俺もバックステージは顔パスだし居候してても食わせてもらえるし、単に都合がよかったという話もあるけど。

少なくともあいつらのサウンドなら、正気を保って聴いていられる。

ただそれだけの理由で俺はここにいる。

……なのにどうして俺が、なんのために俺が、今さら秘蔵のフェンダーなんかかついできたりしたのか俺は知らない。

俺が知らない。

3

結局、翌日の名古屋におけるコンサートで、リハじゃあれだけ抵抗していた難易度Cのステージングをカノンちゃんは実に堂々と——少なくとも客の目から見ればまったく簡単に、しかもカッコよく——決めてみせた。これだから叩き甲斐があるんだよね、と哲郎がうかれた声でこっそり言ってきたのも当然である。

「可愛いよねえ……」

ステージ裏から見ているだけの俺にも、よくわかる。ライブの数を重ねれば重ねるほど、SEXIONの音が進化していくこと。隙のない、そのくせスリリングな音に成長していくこと。

進化どころか、ライトを浴びて奴らが『神化』する瞬間さえある。客の反応がそのときばかりは桁外れの絶叫になる。

目眩がする。

歓声がこだまするたびに、哲のギターが荒れ狂うたびに、カノンがその長い髪をかきむしり悶えながら詞を囁くたびに、俺は目眩がした。

動悸、息切れ、世界のカオス化。末期的症状をとおりこして毎度おなじみ持病の発作になっ

ちまった。いつぶっ倒れるかわからないから、客席でじっくり鑑賞するってわけにもいかない。誰にも気にされないステージの陰でこっそりやりすごすしかない。どうせいつも歌いに歌いまくって過呼吸をおこしたカノンがステージの合間に真っ青な顔して倒れこんでくるから、そこでたまたま俺が一緒にのびていたとこで、スタッフの皆さんもそれほど気にかけやしない。

俺がずいぶん昔から『発病して』いて、しかもそれは怠け病に『近い』なんて言っていたのは、ゼロだ。もう少し詳しくあいつの意見を聞いておくんだった。

本当はもうそろそろ、俺にもこのビョーキの正体がわかりかけてる。でも問題は、原因がわかったからって状態が変わるわけじゃないってことだ……。

盛りあがったステージのあとは酒盛りと相場が決まっている。いわゆる打ちあげというやつである。

「最高ざんしょ？　本日のステージも」

ニッ、と笑って哲郎が訊いてきた。

「うん。カノンちゃん最高。泣けてくるほど可愛い」

「ちょおおっと、俺は俺は俺はー!?」

「哲はいつもとおんなじで」
「あー俺、友達やめたーいちぬけたー」
ばかもの。あんたはいつも最高でしょ。わかってて拗ねてるんだから、こいつは。
「嘘嘘。哲郎さんたら、ずいぶん成長なさったんじゃありませんこと?」
「あら、やっぱりわかってくださいます? おほほほほほ」
実際、ZEITのころの哲のギターは、元気のいい末っ子がバンドにじゃれついてくるみたいな音だった。それが今は見事にカノンのお兄さんになっちゃって、がっしりとサウンドをひっぱっていく音になって。
「大人になったんじゃない?」
俺がそう言ったら、哲郎は少し驚いたみたいにまばたきをして、それからゆるやかな笑顔になった。
「そう? ……だったら嬉しいな」
大人の都合で人生決められてたまるか、あいつら俺たちのことなんにもわかっちゃいない、と行き場のないくやしさを音符にぶつけてたギター少年の姿は、そこにはもうない。
「京平、俺ねえ……」
煙草をひっぱりだして火をつけながら、哲郎が言う。めずらしくマジな調子で。
「俺、ZEITにいた頃すっごく楽しかったけどさ、でも今は今で思うよ。ZEITが解散し

てなかったら——俺たち別れてなかったら、俺はまだまだ京平の音にべったり頼ってるだけの、ただのガキだっただろうなって」

「別におまえが重たいとは思わなかったけど、俺は」

頼られてるとは思ってなかった。あれは調和だった、俺にとっては。とても気持ちのいいバランス。

心地よくて優しいバランス……。

それでいて俺が自分から壊したバランス。この手で。

「うん、俺も昔をふりかえって後悔はしてない。ただ、別れてはじめてわかることってあるじゃない？　自分がどんなに小さい奴だったか、どんなに相手に寄り掛かってたかってことがさ」

「……」

「別れってのは終わりじゃなくてさ、そのためにあるんじゃないかなって、俺は思ったりしたわけよ」

哲の言い方はとても明るくて、前向きで、だから強い。

「……そうだね」

俺は頷いた。

そうやって自分を強くしてステージに戻ってきたことそのものが、おまえ自身が、おまえの

言葉を裏付ける。

コトバだけならいくらでも言い訳になる。姿で、背中で、自分のココロを証明できる男に俺たちはなりたかった。そんな大人にあのころの俺たちはなりたかった。

おまえはまちがってない。

別れることは終わりじゃない。

生きているかぎり、何も終わらない。

「そうだね……」

俺はどうかしてる。

俺はなにもかもわからなくなっている。

俺はひどく弱くなっている。

おまえをうらやましいと思ってしまう俺は。

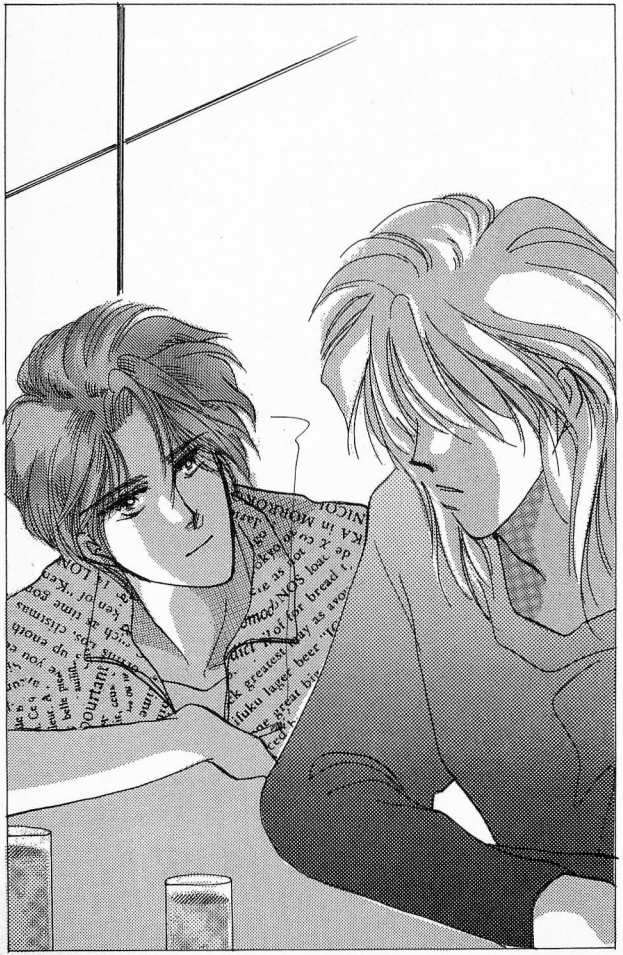
「心臓が……」

いきなり俺は呟いている。哲郎は俺を見る。

「心臓？」

「うん、心臓がさ、全然ないのと……半分だけ残ってるのと……どっちが幸せなんだろうな？」

どちらがつらいんだろう。



砂夜子が死んだとき、俺のなかは真っ白になった。空白だった。空洞だった。だから俺はなにも感じなかった。悲しくもつらくもなかった。

中途半端に心臓なんか取り戻しちまったら、そんなのは痛いだけで何の役にも立ちゃしない……。

「京平ってやたら正直でやたら嘘つきなとこがあるから、多分俺の想像もつかないようなこと考えてんだろうと思うけど」

まっすぐ人をとらえる目をして、哲郎が言った。

「とにかくおまえはギタリストなんだよ。心臓が削れてようが頭がからっぽになっていようが、それだけは確かなんじゃないの?」

ストラトのネック握っただけで吐き気のするギタリスト?

そう口に出しちまいそうになって、さすがに今度は直前で気づいた。……なるほど、荒んでる。人の話を聞いてない。

心臓が動いているか、血液が流れているかなんて関係ない?

「……好きだな、その言葉。『とにかく』ってやつ」

「そうだろお、いい言葉だろお。遅刻魔だろうが忘れものをしようが『とにかく』俺はギタリスト、怠け者だろうが下手くそだろうが『とにかく』俺は杉山哲郎、と、俺ひたすらそう考えるようにしてきたもんね。棚上げの達人と呼んでくれたまえ。かっかっかっ」

「……本当にそう思うよ」

なーにあらたまってるのよ、と哲郎はけらけら笑う。

「いやあ、哲ちゃんカッコいいもんだから惚れなおしてしまって」

「そーだよね、だんっぜん俺のほうがカッコいいよね。うらやましかろー。ざまーみなさい。かっかっかっ」

「むかっ。今のとりけしっ。なしっ」

たったひとつでも自分の中に真実をもっていれば、迷ってもそこに戻れる。きっといつかは。

とにかく俺は、どんなに不様でも、どんなに裏切っても、ギターを捨てることだけはできなかったんだ……。

そしてあいつは？

今どこにいるかさえわからない、俺のせいで傷ついた……あいつは、どんな解答を出すんだろう？

カクテル二杯でどろどろのへべれけになったカノンをひきずって（というか二次会三次会四次会になだれこむ哲たちを見捨てて）、俺はさっさとホテルに戻った。病人兼怪我人としては

やはり。

「きょおおへいさああん、俺はねえ、俺はねええ、才能がないんですよおお」

「はいはいはい」

「ロンドンっ！　ロンドンいっしょに行きましょおお!?　ねえ!?」

「はいはいはい」

「ロンドンブリッジーズフォーリンダーウンって、ああだめだあ俺はどーして歌ってしまうんだああ才能ないのにいいい」

「あるよ、ありますってば。君は天才だってば。ファンのみんなも応援してくれてるじゃないの」

「どおおせ俺は器が小さいんです！　どおおせガキなんですっ!!」

こいつにも『とにかく』の四文字で棚上げする必殺技を教えてやろうかと思ったけど、とっくの大昔に哲郎が伝授してるはずなんでやめた。

この生意気にしてナルシストの坊やですら、ちょっと裏をかえせばこうだもんなあ。

「やかましいっ、俺がてめえの歌を好きなんだから黙っておとなしく寝ろっ！」

「はあいっ……おやすみなさああい」

俺はもしかして坊やの子守か？

カノンちゃんを無理やりベッドにおしこんで、俺は疲労感をおぼえつつ自分の部屋に向かっ

た。

が――。

ホテルの通路の、奥まった角のところに、細っこい影が立っていた。

壁に寄りかかるようにして。

それはまさか。

おい。ここは名古屋だぜ。いくらなんだってそんな。俺はコンマ七秒くらい本気で頭のなかがでんぐりかえるのを感じて、それから今度はそいつが逆回転した気分になった。

のそっと拗ねたようなしぐさで顔を上げて、奴は俺を見た。

間違いない。……それはあいつじゃなくて。

俺は奴の名を呼んでいた。迷わずに。

「……シグマ」

4

部屋の床に――椅子をすすめたにもかかわらず――ぺたんと座ったシグマは、なんだか小さく見えた。

寒いのかと思った。だけど寒いだの暑いだの、こいつが感じることはないはずだ。

膝をかかえて、そのまま黙りこんで、なにも喋らない。

いつかの誰かに似ている。

シグマを見るたび、俺は必ず誰かの姿とダブらせている気がする。それは昔の俺自身だったり、俺と出会ったころの真砂だったり、そしてこいつの兄貴だったりするのだけれど……。

「よくわかったな、俺の居場所が」

名古屋にいることなんて、真砂くんにしか連絡していない。

「……おまえんちの電話を、逆探知、した」

ぽつりとシグマが言う。そんな機能があったのか、こいつには。知らなかった。

それにしたって、交通手段の利用方法なんて誰もおしえてないだろうに。よくわかったという以前に、よくたどりついたものである。

「ずいぶん頑張ったわけだ」

俺がそう言ったら、シグマはちらっと目をあげて俺を見た。

「……変なの」

だからそれはやめなさい。失礼だぞ。

「俺の何が変なんだ？　シグマ」

「おまえってぜんぶ変だ。おまえってわからない」

あんまり確信をもって言いきられると、なんだか俺まで暗示にかかりそうだ。

「じゃあ訊くけどさ、どんな奴のことだったらわかるのよ、おまえさんは」
「……わかんない」
だと思った。
「あのなあ。わからなくない奴なんて世の中にはいないんだから、そんな簡単に変！　とか言っちゃだめだってば」
「なんで言っちゃいけない？」
「……言ったら負けだぞ」
「なんで言ったら負ける!?　そんなのやだっ！」
「んじゃ負けるな」
「わかった」
こくりとシグマは頷く。……なんなんだかなあ。
俺はたしか一度こいつに爆殺されかけたことがあるような気が。そのあと傷害事件もひとつあったし。そのわりにここに漂っているのほほんとした空気は果たして。
……ひとりだから、かもしれない。
今ここにいる俺はひとりで、東京を放りだしてきたシグマもひとりで、俺たちの間には殺すべき敵も守るべき相手もいない。
「……なんでおまえいなくなった？」

不意にシグマがそう尋ねた。
責めるような表情で。
「なんでここにいる？」
俺は答えなかった。……いや、実際、それは鋭い質問なんだが。
こいつはどこまで知っているんだろう。自分の意味。自分という存在のもつ意味。創造主の浅見パパの思惑と、天才お嬢の考えと。
「おまえのせいで、計画が狂った」
計画？
「おまえがあいつ捨てていなくなったりするから――！」
「ちょっと待て、シグマ」
俺は椅子から身をのりだして、結局シグマと同様、そのまま床に座りこんでしまった。
「なんだ？」
シグマは少々逃げごしになる。なにもそこで警戒しなくてもいいだろうが。
「牛乳なんかないぞ、今は」
「うるさいっ。だからなんだっ!?」
「計画ってなんなんだ？　なんのための計画なのか知っててやってるのか？」
「――――」

ぐっと詰まってから、シグマは低く答える。
「……知らない」
「なんのための計画かも知らなくて命令どおりに動けるのか、てめえは!?」
「知らないったら知らないっ!!」
俺が思わずマジに怒鳴りつけたら、鼓膜をつんざく大声でシグマもわめきかえした。
……本気、か?
たしかに命令の意味なんか知らなくてもプログラムどおり動けるのが、機械ってものかもしれない。俺がシグマを怒るのは筋違いってやつかもしれない。
そんな風にあきらめるなら、楽だ。
けれど。
「じゃあおまえは知ってるのか?」
キッ、とまっすぐに俺を見据えて、シグマが問い返した。
「おまえは知ってるのか!? 誰がなんのためにおまえの役目を決めたのか知ってるのか!?」
誰がなんのために俺の役目を?
俺は即座に答えられは、しなかった。……それは運命の話や神様の話かもしれなかった。そう解釈しちまえばけっこう簡単に答えられたのかもしれなかった。
だが真っ先に浮かんだのは……俺の、父親の姿だった。俺を都合のいい枠のなかにとじこめ

ようとしてできなかった、あの家。

俺は自分の人生、他人の思惑のためにつかわれるなんて耐えられなくて。

そして、逃げた。戦いきれずに逃げた。あのときの俺にはそれ以外の道を選ぶ力もなかった。逃げることでしか闘えない——そんなちっぽけなガキでしか、俺はなくて。

闘争イコール逃走なんて、シャレにしてもあんまり笑えない。

「知ってる」

俺の声が答える。

「俺は知ってたよ」

まちがえるな、シグマ。

「役目を決められていると思いこんでいた俺が、俺を動かした。つまり犯人は俺だ。他の誰のせいでもない。わかるか？」

「……むずかしくてわかんない」

相変わらずこいつは非っ常ーっに素直だ。

「だからおまえを動かすのはおまえなんだよ！　計画どおりに動かされてると思うから、命令されてると思うから、おまえは自分をどこかに置き忘れてるんだ。そんなもの捨てちまえ！　まずおまえがどうしたいのか俺に言ってみろ、今、ここで！」

「……」

シグマは俺から目をそらし、しばらくじっと考えこんだ。
良心システムのストッパーをはずした、試作品のマシノイド。
製作者のお嬢さんには『ぜんぜん良い子じゃない』なんて言われて、責任者のゼロには『関知してなかった』だの『試練』だの言われて、ただ浅見パパの遺言ってやつだけがこいつの存在を保証する。
おまえがもし目茶苦茶な失敗作だっていうんなら、あとふたりの機械人間のどこが完成品なのか、その違いが俺には見えない。
それはまるで機械と人間をくらべるように、人間と神様をくらべるように、残酷な境界線としてたちはだかる違いなのか。もしかしたらエリート商社員と落ちこぼれロックギタリストくらいの差でしか（いや、現実にはこいつもかなりでかい壁だけど）ないかもしれないのに？
「……要らない」
ふと、呟くようにシグマが言った。
「え？」
「だからあいつは要らない」
……おい。
「今、俺がどうしたいのか言えって言ったじゃないか！　あいつ嫌いだ！　だからあいつ殺したい。なのにおまえがあいつを追い出したりするから……あれっきり誰もあいつのことを見て

ない。どこにいるか知らない。それじゃ困るんだ……！」

何だ？

なにか変わったみたいだった。どこがとは言えない。シグマの態度が、この一瞬で、たしかに。

だけどその前に俺には最大の問題点があった。聞き流せない言葉が。

「……シグマ。こないだと同じことをもう一回言おうか？」

静かに、俺は言ったつもりである。

「おまえが要らなくたって俺は要るんだよ、あいつが」

「捨てたくせに!?」

ぎらりと瞳を輝かせてシグマが反問した。鋭く。

「おまえが捨てたくせに!?」

「誰が？」

殴ってやろうかこのガキは。

「あいつがどこにいようが、俺をどう思っていようが、俺の気持ちが変わる理由にはならねえだろうが！」

「……！」

短い間をおいて、がんっ、とシグマの腕が床を叩いた。

「おまえ、勝手だ……!!」
熱のかたまりを吐き出すように。
全身で泣き出すように。
「みんな勝手だ、みんな嫌いだ!!　あいつだけずるいっ……あいつだけ勝手だ!!」
床に握りこぶしの爪を立てて、シグマは俺を見る。
「おまえもあいつが好きなんだ」
苛立ちが声を震わせる。
それは怒りよりも切ない。
「ザザなんか嫌いだ」
……シグマ。
あいつなんか要らないんだ、とシグマはくりかえした。苦しげに、何度も。
「俺が殺してやるんだ……!」
……そうか、感情だ。
激しい——制御もできない、ただがむしゃらな感情。
その感情の内容が変わってきている。シグマ。邪魔だから要らないから殺すなんて単純なものではなくて。
おまえを動かすのは。おまえをここまで連れてきたものの正体は。

「たしかに俺は勝手だし俺はおまえがあいつを殺したら許さない」
わざと俺は冷ややかに言ってやった。それは本当のことでもあったし。
「だけどだからって俺がおまえのことを嫌いってわけじゃないぜ。少なくとも、今は」
「――――」
シグマは両の目を見開いた。……ぜんぜん信じてないな。
「嘘だ」
「なんで嘘になるんだ？」
「だっておまえは――」
言いかけて、自分自身なにがなんだかわからなくなっちまったようにシグマは沈黙した。
「……だって、おまえは……」
「行き場がないんだったら、しばらく俺と一緒にいないか？　どうせ俺も居候さんなんだ、ひとりくらいおまけが増えても今さら変わらないでしょ」
「……おまえ……おまえは……」
「どうする？　シグマ。それともおまえさんは俺のことが嫌いか？」
俺は大まじめに尋ねたんだが、いよいよシグマは完璧に絶句してしまった。
こいつが素直に聞いてくれるなんて自負してたわけじゃない。すかさず『大嫌いだっ』と返されてもおかしくはなかった。

ただ、もしかすると世界中に俺ひとりしか、今ここでシグマに『嫌いじゃない』と言ってやれる奴はいないんじゃないか。

「おまえって……」

変だ、と続けそうになって、シグマははたと口をつぐんだ。なにやら困惑して。

そしてくるりと俺に背中を向けたと思ったら。

「やっぱり変だ。負けるのはやだけど俺は今だけ負けてもいい。――おまえ、すっごく、変だ」

ぶっきらぼうにシグマはそう言い、それきりなにも喋らずに、夜が明けるまでひたすら床に座りこんでいた。

……少なくとも奴はその晩、俺の部屋を出て行きはしなかったのだ。

夜明け前に、俺は夢を見た。

判然としない夢だった。今の精神状態がろこつに反映されているよーな、ぐちゃぐちゃの夢だったんだが、しかし。

たしか俺はあいつに向かって呼びかけたんだった。

来るなよ。シグマがおまえのことを殺したいっていうんだ。おまえがシグマとは違っている

から。

シグマにないものをおまえが手に入れているから。

そしておまえはどうするんだ？　殺される前にシグマを殺すのか。おまえとシグマを対決させたいらしいぜ、おまえの大好きなお嬢様は。そんな悪趣味な話ってあるのか。

俺は見たくない。だから来なくていい。おまえは自由でいい。生まれる前につくられたプログラムなんかとは関係なくいればいい。

……俺は逃げている。俺は結論から逃れようとしている。俺は弱くて卑怯だ。

俺を許せるか？　ザザ。

『大丈夫ですよ』

なぜかにっこりと笑って、奴は言ったのだった。

『京平さん、マシノイドには、人間を殺すことはできないんです』

……え？

『もちろん、人間だって、人間を殺すことはできませんよね。そうでしょう？』

それが何の話だか、夢の中では俺もぼんやりとわかっていた気がする。

しかし目が覚めてしまえばそんなものは遠い異国の呪文とおなじで……。

たいして飲まなかったはずの酒が、朝方になってひびいてくる。頭痛をおぼえつつ俺はツアーの次なる移動先を思いだし、少し複雑な気分になった。



本日一日を移動にあてて、そして明日のステージは。
「どこだって？」
シグマが尋ねる。
「地元だよ、俺の」
久々に東京の近くまで戻るわけだ。しかも俺にとっては勝手知ったる生まれ故郷というやつで。
横浜、である。

5

「また？」
舞台裏にバーンと貼られた曲順表を見て、罪のかけらもない若手スタッフ君が一瞬だけ本気で嘆いたとしても、誰がそれを責められようか。
ちっぽけなライブハウスでやるならともかく、巨大ホールを使ったコンサートツアーで、ミュージシャンの気分とわがままによってステージの構成を毎回ばりばり変えられていたら、照明さんだってPA（音響）さんだってローディー君だって舞監のセンセイだってみんなみんな困るのである。

「ちなみにいちばん困ってるのは俺なんです！　だから俺のせいじゃないんです！」
カノンちゃんは妙に説得力のある言い訳に走るし。
「ミュージシャンのわがまま？　とーんでもない。アーティストの真摯な求道精神、くらい言いなさい」
かくのごとく杉山哲郎にはなにやら憑いている。
「今回はステージでかいっすからねえ、派手に使おうと考えてんすよ」
舞台監督のセンセイもなにやら燃えている。
空っぽの客席と、どでかいモニタースクリーンのぶらさがった天井に、べんべけべんと気合の入った哲のギターが反響する。あと五時間もすればこのアリーナが人間で満杯になる。
開場前のホールってやつは騒がしくて熱気があふれてて、しかも今回のように構成が変則的だったりすると誰も彼もが目の色を変えていて、そのさまを見ていると非常に楽しい。見ている立場だからこそ、だけど。
ステージの上ではともかく出すだけ音出しちまえ、と哲がべけべけフェルナンデスを鳴らしている。その後ろではまだガタガタとセットを造っている最中で、照明は信号機みたいに順繰りに点滅して。
「え、ここから火柱あがるの？　こんな真ん前だよ？」
「近いかもしんないねえ」

「かなりアオられるよね。少しずらそうか？　ずれない？　なんで？」
大会場ならではの特効がらみで、立ち位置を決めているカノンの声。
「でもあんまり火薬抑えちゃうと迫力ないじゃない」
「っていうかタイミング勝負だよね。オープニングから『ヴァーチャル・クレイズ』のつなぎさ、今のうちにリハしておかない？」
「あっ、バリライトの担当が遅れてんだわ」
なんだか変だ、とやっぱりシグマは言うのだった。
「どこが変だって？」
「何の役に立つ？　人間がたくさん集まって大きい音を出して、それだけだ」
「役に立たないから変だ、なんて理屈はないと思うぞ」
「役に立たなくてもいいのか？」
「それは聴く人の心次第でしょ」
京平さんが客席側にいると照れてリハができないっ、とカノンが訴えるので、俺はシグマをつれてふらふらと舞台裏をのぞいてまわった。コンサートというお祭りそのものが、そしてそのために必死になって働いてる連中の姿が、シグマにはよくわからないらしい。
「じゃあどうしてみんな、あの音を聴きにくるんだ？」
そんなことは決まっている。

「好きだからだよ。あいつらの音なり、音楽なりがさ」
好きってやつは凄いぞ。
無敵の力だ。金も時間も体力も惜しくない。
「実際に一回でもＳＥＸＩＯＮのコンサートを観れば、客が喜んでることくらいわかるさ。おまえさんにも」
「喜んでる客なら、見た。アリーナホールで」
ぼそりとシグマが答えた。
そうか。確かにそうだった。ＳＥＸＩＯＮ初ライブの、アリーナホールで。
あのとき我々の席まで問題の爆弾をしかけに現れたこいつは、実に礼儀正しいお兄さんだったような気がするけど。
「そういやおまえ、あのときのチケットって、どうやって手に入れた？」
「ゼロが、ザザのチケットを参考にして、コンピュータで造ったらしい」
例の、ハイド君のほうのゼロだな。
あのときのセリフも行動も、ぜんぶゼロの指示に合わせたのだとシグマは言う。道理でお兄さんお兄さんしてたわけである。
「これが……」
シグマは青色のピアスを親指で示してみせた。

「通信機能をもってる。だから、場面に応じて何をすればいいかは、これを通じてゼロが教えてくることになってた」
「ちょっと待て。あいつってば俺たちを爆弾で吹きとばしなさいとまで言ったのか？」
いくら二重人格だって。
「それは違う。ゼロには、ザザに『敵』としての印象を与えるように言われた。ザザにプレッシャーをかけられれば方法はなんでもよかった。たとえば、ザザの目の前でおまえを誘拐するとか」
「プレッシャー？　……それがなんで爆弾になるんだ」
「ゼロはいちいちうるさいし、難しいことばかり言う。誘拐なんて手間がかかるだけで面白くなかったから、派手にしてみた」
「……怪我人出しといて、おまえなあ……」
マシノイドは人間を傷つけちゃいかんのだろうが。
「だってあれは『俺』がやったんじゃないぞ」
大まじめにシグマはそんな主張をする。
「怪我をさせたのは『爆弾』だ。俺じゃない」
「仕掛けたのはてめーだろうがっ。そーゆー発想はだめ！」
「だめ？」

「そうっ。おまえが仕掛けた以上、おまえが責任をもたねばならんの！」
「じゃあ悪いのは俺じゃなくて、俺にそれをさせたゼロじゃないのか？」
一瞬そいつは正しいような気もしたけど、俺はあえてぶんぶんと首を横に振った。
「却下。爆弾とちがって、おまえにはちゃんと物を考える頭があるんだから」
シグマはなにか言いかけて、結局すとんと黙りこんでしまった。
「あら？」
例によって元気よく舞台裏を闊歩している玲子社長が我々に目ざとく気づいて声をかけてきた。
「こないだのウェイター君じゃないの？」
「は？　……いや、こいつは別の奴。こないだの良い子の弟分」
シグマのことである。当のシグマはいきなりムッとして玲子をにらんでいる。他人が近づいてきたとたんにガチッと警戒心をむきだしにするんだから……人慣れしてない野生ネコみたいな奴だな、こいつは。
「なあに、兄弟ふたりでついてきちゃったの？」
意外そうに玲子がそう尋ねた。……何だ、それは？
「……俺の連れはひとりのはずだけど」
「嘘。だってついさっき見たわよ、あのウェイター君」

「え？」
呟いたのはシグマのほうだった。
「どこで？」
「どこでって、さあ……搬入口のあたりだったかしら、セリのとこだったかしら」
ごめんなさいね、あたしもさっきからずっと動きまわってるもんだから記憶に確信もてないわ、と玲子は言って、スタッフに呼ばれて忙しく去っていった。
場所はともかくとして。要するにあいつがこの会場まで来ている……？
「あいつだ……!!」
すかさずシグマが身をひるがえした。直後、俺が横から足をひっかけたもんだから思いっきり顔からコケて床をすべったというオチがついたけど。
「なぁぁにするっ!?」
カーッと頭に血をのぼらせて——機械人間相手にこの表現はないか——かみつくようにシグマが怒鳴った。
「ジタバタすんじゃねえ」
俺の声はやけに冷たかった気がする。
「あいつが来るならどうせ俺の所だ。おとなしく待ってりゃいいだろうが」
「だけどそしたらおまえがまた邪魔するんじゃないかっ!!」

「邪魔してなーにが悪い。初めっからそのためにいるぞ、俺は」
「おまえっ、おまえっ、最っ低っ!!」
そんなこと知ってますとも。
……なんでこんな所に来てるんだ？　ザザ。
横浜。そういや横浜に行くとか行かないとかって話をしたのが最後だった。
「俺はすぐに殺すの死ぬのって口にする奴は好きじゃない」
子供みたいに床に座りこんでいるシグマを睨みかえして、俺は言ってやった。
「俺はおまえにザザを殺されるのも御免だけど、あいつにシグマを殺されるのも納得いかない。だから邪魔してやる」
それが単なる俺の自己満足だとしても。利口なやりかたじゃないとしても。
信じるのは俺の自由だろう。違うか？
「おまえたちには、もっとマシな結論があるはずなんだ」

夕方六時半に開演のチャイムが鳴って、それから十分ばかり遅れてコンサートは始まった。
スモークの嵐のなかで不気味なSE（効果音）がひとしきり流れたあと、満を持してドラムが刺激的なリズムを刻みだす。

客席が揺らいだ。三倍くらいふくらんだみたいに見える。
「今夜だけ……」
真っ暗な場内にさまようカノンの声。
「幻の都に俺の生命を捧げたら、その証は貴女へ届くのだろうか……」
反響。嬌声。狂気。
「鎖につながれ……鏡に口接けて滅びをいざなう……」
苦悩を秘め、官能に染まる囁き。
「朽ちはてた貴女の瞳にも、今宵一夜、俺の姿は届くのだろうか……」
どんな顔して言ってんのかね、と普段のカノンを知っている立場としては思わずにいられないけど。思ってもおかしくないのだけれど。
舞台裏を知っている俺でさえ巻きこまれるほど、カノンの生みだす幻想は強烈だ。
それが才能ってやつだ。夢でも幻でも、味方につけちまえばこっちのものってことだ。
無理でも。幻想でも。
「Virtual Craze!」
ガンッ！　とステージの足元から凄じい火柱がたちのぼった。目も眩むライトが一斉に牙をむく。ヒットナンバーのイントロが疾走を始めたのは、まさにその瞬間だった。
「すっげえ爆発……」

スタッフのバイト君が感心している。ソデから眺めてる俺も同感である。羽目はずしまくったな、あの舞台監督。

相変わらず——どころか、また一・二倍くらいグレードアップしてSEXIONの音が客に襲いかかってゆく。さすがのエネルギー。強気そのもので。

客のノリをつかむ、だいたい三曲目あたりまでは、俺もただ音の波にひたって幸せなファンのひとりと化していられた。カノンの歌が構築する暗黒世界にひきずりこまれて流されて高度一千メートルまで舞いあげられて叩きおとされる。自虐的な快楽。

四曲目……。このあたりからいつも酔いが出てくる。浸りすぎて反動が出てくる。

幸せで。幸せに幸せに幸せに浸るあまりに神経が保たない。良心と記憶と嘘が宙返りしてメロディーと一緒に心臓をつらぬく。半分だけ生きかえった心臓を。

裏切者。そんなこと知ってるんだ。魂を閉じこめた臆病者。そんなことわかってるんだ。だから。

だから熱い歓声が、うねるサウンドが、どんなに痛くてもそれは仕方ない。

「——!」

はっ、と俺の肩をつかんだ手があった。

俺は危うくぶったおれるところだったらしい。首をねじまげて見ると、そこにはシグマの姿があった。射抜くように俺を見ている、ふたつのイミテーション・アイズ。本物の光を宿し

て。

「泣くのか？」

ぽつんとシグマが尋ねた。

「……まーさか」

そんな時じゃない。俺はにたりと笑ってみせる。多少強がりがまざっていようと。

今は二年前じゃない。もうそんな時じゃない。

――え？

シグマが引き戻してくれたおかげで、俺はその変化に気づくことができた。

ステージから伝わってくる、波動の変化に。

「……ちょっと待て」

無意識で俺は一歩、踏み出していた。目眩（めまい）のことなんか忘れていた。

ズレ、か。これは。

ギターのテンポだ。狂いはじめている。本当にごくかすかに。だけどこいつは放っておいたら拡大する――絶対に。

きっとまだ誰も知らない。

他の奴にわかるはずなんかない。あいつのギターなら俺がいちばんよく知ってる。

「だめだ……！」

口走った俺を、驚いてシグマが見つめた。
マネージャーはどこにいる？　演出は？　玲子は？
「おい！」
誰だっていい。俺は目の前を走りすぎようとしたローディーの兄ちゃんをつかまえて怒鳴った。
「あいつをステージから降ろせ！」
「はっ!?」
いきなりつかみかかられた兄ちゃんは仰天している。悪いけど一刻を争うんだ。
「ギターだ、今すぐやめさせろ！　あいつにこれ以上弾かせたら駄目だっ!!」
そう言ってる間にも、波がじわじわとほころびてゆくのがわかった。音が死んでいく……！
畜生！
「聴こえてないんだ、あいつは――哲は耳をやられてるっ!!」

6

鼓膜、だ。
特効の火薬があまりの大音量で哲郎の耳まで吹っとばした。

SEとライティングでごまかして、今、ステージは空のまま観客を待たせている。
「大丈夫……弾ける」
蒼白な顔をしかめて哲郎はそう言ったけれど。
鼓膜の異常は放っとくとミュージシャン生命にかかわる。一回きりのステージで、残りのギター人生ぜんぶ捨てさせるわけにはいかない。
「ぜんぜん聴こえないっていうんじゃない。耳鳴りがうるさいって感じ。だから……ドラム見て合わせていきゃなんとかなる」
なんとかなっちゃいねえんだよ、とっくに！
俺はそう怒鳴ってやりたかったが、実際、俺とカノン以外の人間はその哲の戦術にすっかりのせられて、テンポの狂いにすら気づいちゃいなかった。
そりゃ、確かに客はだまされてくれるかもしれないさ。
だけど俺は。てめえのサイコーの音を愛してる俺とカノンは。
「おまえは？」
息をきらせながら沈黙しているカノンに、俺は水を向けてみた。
不様に崩れたこいつのギターなんか聴きたいのか、おまえは？
俺を見つめて、カノンは答えなかった。答えられないんだ。ステージを捨てきれない哲の気持ちも、哲郎というひとりのギタリストの将来を守りたい気持ちも、そしてここでまだトラッ

ク半周しかしてないステージを中断できないボーカリストとしての気持ちも、すべてが一度にカノンのなかで渦巻いているから。

そういうものだ。怪我人のひとり、病人のひとりでステージを放りだせたら、誰も泣きはしない。誰もステージに魅入られはしない。

「……」

カノンはなにか呟きかけて、それをむりやり押し殺した。

何を？

何を殺した？

それを俺は知っている。カノンに問いただす必要なんかないくらいに。知っているはずなのに目をふさいでいる。時間だけが——一秒一秒が砂金のように果てしなく流れていく錯覚。

前にもこんなことがあったんじゃないのか。京平。

後悔ってのは、同じことを二回くりかえさないよう神様が用意してくれる往復ビンタだろうが。

「っ!!」

ずがんっ、と後頭部をいきなり硬いもんでぶん殴られたのはそのときだった。あ!?

「ごっ、ごめ……じゃないっ、そうじゃないっ!!」

人の頭ぶん殴っといて自分でうろたえたバカモノは——。

声でわかる。シグマだ。どさくさにまぎれて姿を消してたと思ったら。てめえなあ。

ふりむいて、なにか言ってやろうとして、俺は声を失ってしまった。

よほど急いだらしい。焦りまくった様子で奴がその手にしっかりと握りしめていたのは。

「おまえがやればいい」

くいいるように俺を見上げて、シグマはそう言ったのだ。

ケースからとりだした——抜き身の、フェンダー・ストラトキャスターを手にして。

「できないのか？　できないんだったら捨てればいい。だけど……」

溢れる言葉を胸で落ちつかせるために、少しだけ黙って。

「できるんだったらやればいい。おまえにはできるんだろう？」

……シグマ？

「おまえはもうぜんぜん駄目っていうんじゃないんだろう!?」

どうしておまえが。

だけどシグマは本気だった。それはまぎれもなく真実だった。奴の動機や理由はともかく、それはゆずれない本当だった。

「おまえ、自分で自分を縛ってる。わざと無理をしてる。カッコ悪い。俺はそんなおまえは嫌いだ。自由なおまえがいい。本当のおまえがいい。——弾きたくないのか!?　おまえはこいつを弾きたいんじゃないのか!?」

俺につめよるシグマと、そして答えをせまられる俺自身の姿とを、その場にいる誰もが無言で見ていた。

そのわずかな数秒の間、誰もが息をつめて、たったひとつの break を——revolution を、待っていた。

シグマ。おまえが今、俺に要求してるその行動こそ、人間としては、実はいちばん恥知らずでカッコ悪いことだったりもするんだぜ。

ふたりっきりのユニットに割りこんで親友のステージを横取りするなんて、思いっきり図々しい無神経野郎じゃなかったらできやしないぜ。

だけど俺は……まったくもって、おまえが見込んだとおり、とんでもなく厚顔無恥のでしゃばり野郎だから。

そう、ギターさえ持たせたら最後。

「————」

不思議なほどすんなりと、俺はシグマの手から昔なじみのフェンダーを受け取っていた。

今すぐこいつチューニングして音出しできるかな、と俺が尋ねる。速攻でやりますっ、とローディー君が俺からフェンダーを預かって走り去っていく。MCで舞台つないどきますから、と言いおいてカノンはステージに向かう。MC入ります、と誰かが遠くで叫ぶ。

とても簡単に、とてもあっさりと。

「カノンちゃん照れ屋さんだから、三分以上お喋りでつなげたら奇跡だぞ」
にんまりと笑って、哲郎が言った。痛みのせいだか何だか、どこか歪みがちな笑顔だったけれど。
「古女房のチューニング待ってたら、カノンが立ち往生しちまう。使いにくいだろうけど、とりあえず俺のギターで出てやってよ。うちのフェルナンデスもなかなか可愛い奴だから」
青いギターに合わせてつくった紫紺のピックを、一枚、俺の右手に握らせる。
「ありがたく借りるよ」
ギターは二曲分ほど。それからボーカリストは一晩ほど。
「お預かりした以上は……」
「二度と返さんとか言わないよーに」
「ばかもの。きっちりイカせてやると言うておるだけだろーがっ」
「きゃー、サイテー、京ちゃんの不良おおっ」
「なぁによぉっ、わざわざ哲ちゃんのためにただ働きしてあげるのよっ」
同じ穴の住人のくせに。
てめえはサイコーの優良ギタリストだぜ。
「二度目は絶対ないからな、こんな出血大サービス」
「当然」

なんたってくやしすぎる、と哲は唸ってみせた。俺は眩しいステージのむこうから吹いてくる澄んだ風に全身を一気に洗われるような、そんな清々しい気分で、ゆっくりと歩きはじめた。

ちっぽけなピック一枚をお守りにして。

7

白い白い光の中で。

俺を呼ぶ声が聞こえていた。

ステージの遠くに、彼女の姿が見えていた。

純白のサマードレスを身にまとって、強い日射しのなかから手を振る。それは夏の光景。

真夏の幻像。

なんだ、こんなところにいたんだ。

俺は笑っていたと思う。

どこに消えたのかと思ったら、こんなところで俺を待ってたんだ。ライトと音が融合する、なつかしい世界のなかで。

ずっと逃れようとしていた、ずっと避けていた、まさにその場所で。

寂しかったんじゃないのか。ひとりで。ひどく遅くなってごめん。俺は腑甲斐ないダンナで、二年も君を置き去りにしたけれど。

忘れてなんかいなかったよ。

ひっきりなしの早弾きフレーズで左手の指から細かい血が散った。ヤワになった指が弦に負けて。だけど痛みはなかった。不思議な力が俺を支配していた。

そう、まるで守護神を背負ってるみたいに。

カノンが悪魔なら、俺には女神が憑いてる。

——おかえりなさい。

砂夜子が微笑む。

——ただいま。

会いたかった。

寂しかった。とても。

ずっとここにいればいい。俺の隣にいればいい。

もう二度とひとりにはしないから。

「愛してるよ」

なにも変わりはしないさ。

そう呟いて、俺は天空の真っ白な輝きに向けて最後のピックを投げた——。



くらくらと目の前が落ちつかないのは、ほろ酔い状態。ついさっきまでの神経症的どろどろ悪酔い状態とは、まるっきり質が違う。

どこか別世界にぶっとんでいた頭の中に、いきなりドッと歓声のパンチが流れこんできて、それからカノンが手加減なしのバカヂカラで俺の肩骨折る気かこの野郎ってノリで抱きついてきて、それで俺はやっとぜんぶのメニューを消化しきったことを知った。

難曲ぞろいのSEXIONのナンバーをなんと十曲もぶっつけで、しかも耳からコピーしただけで弾きこなしちまうなんて、俺はもしかしなくても天才ではないだろうか。……その間の記憶がかぎりなくいいかげんだったりするのだけど。

どうやって弾いたのかぜんぜん憶えてない。

「よっぽど怖かったんだな」

「え？」

光の中から暗いバックステージへと、肩を組んで我々は戻っていく。俺は右の掌をひらいてカノンに見せてやった。

「まだ震えてるもん。ガタガタ」

「うわ、マジ……」

呟くカノンの息も気の毒なくらいに乱れている。哲のぶんまで頑張ろうとしたんだろう、この人も。

「でも京平さん、凄かったよ。神様みたいだった」

それこそ天使みたいな笑顔で、天才ボーカリストからそんなありがたいセリフを言われたら——一介の不良ギタリストとしては至上の幸福を味わうしかないのでは。

「天国からのプレゼントさ」

キザな一言も、今だけは本気で返せる。

本気で信じられる。たとえ俺がロマンチストではないとしても。

「アンコールどうしますか？」

わっとまわりに集まったスタッフたちが、青息吐息のカノンちゃんにタオルをひっかぶせて酸素をあてがってと忙しく動く。それにまぎれてそんな問いが発される。

「客次第！　あいつらに待ってる根性があったらやる！」

そう叫びかえしたきり、カノンはいつものごとくバタッと倒れて正体不明となってしまった。体力の限度なんか初めから考えてない。

「哲は？」

さすがに落ちついた姿を見せている玲子社長に、俺はこっそりと尋ねてみた。

「とっくの昔に救急車で追っぱらったわよ。あんなやかましいステージ聴かせてたら、治る耳

も治らなくなるじゃない？」
「すみませんねえ、やかましくて」
「仕方ないわね、なんたって『稲妻』の京平だものね。こっちまで四年分くらい若返った気分だわ。とにかく……復帰（カムバック）、おめでとう」
「ありがとう」
もう人のステージは横取りしたくないけど。
「哲郎のファンにはかわいそうだったわね。でも総合的にみれば今夜のノリは上出来よ。京平、引退したとかホラ吹いて、実はどこかで特訓でもしてたんじゃないかと思ったし」
「俺ってそんな殊勝な奴に見える？」
「全っ然っ。だってそんなはずないもの」
あのなあ。
「織姫様がいたんですよ。ステージの上にね。俺のことをすごーく愛してくれてる女神様が」
「……砂夜子ちゃん？」
「さあ？」
「あんたって……」
呆（あき）れはてたように俺を見上げて、玲子はばしっ、と思いきり背中をぶったたいてくれた。
「幸せな奴よねえええっ。もうっ、あんたはあんたで勝手にやってちょうだいっ」

……幸せな奴だよねえ。反論の余地もなく。
汗だくの上着を脱ごうとして、左手の指がべたっと服に貼りつくのに俺は気がついた。
「ちょっと何なの、その流血沙汰はっ」
「サボってた証明」
弦で切るなんて、シロウトみたいだな。中指と薬指の皮がめくれあがっちまっている。
「救急箱？」
「あ、いい。自分でやってくる」
はたしてカノンちゃんはアンコールまでに復活してくれるのだろうか。
なぜかSEXION控室のドアは取っ手がこわれていて開きにくかった。力任せにぶちあけたら、ちょうどその時。
「そこの鍵……！」
俺の反対側から通路を走ってきて、そう叫んだ奴がいた。
シグマ？
さっきからおまえ、何をあちこち動きまわってるんだ。
「鍵がなんだって？」
控室のなかは空っぽである。誰も内側から鍵なんかかけられやしない。
「あ……」

俺の背中に追いついて、シグマは愕然としたように呟いた。
「しまった……！」
「え？」
何が問題なのかわからない。
「あっ！」
今度は俺の左手を見てシグマはまた別の悲鳴をあげる。
「京平さん、怪我っ!!　また左手っ!!」
「こんなの怪我のうちに入らないっての。名誉の負傷。そもそもおまえがあそこで『弾け』って言いださなかったら――」
あれ？
救急箱をとる俺の手が、止まってしまった。
京平さん？
俺の身体が自動的にシグマを見返った。控室の入り口で突っ立っている、シグマの姿を。
考えるより前に、感覚で。
いや……確信で。
「……ザザ？」
はっ、とシグマが目を見開いた。空白が生まれた。

なんて馬鹿だ、俺は。
シグマの目印は青いピアス。いつから？　いつからそれが消えた!?
「！」
一歩さがった相手を、俺は無理やり右腕でつかまえた。
「おまえ……！　おまえ、いつから……!!」
「……」
しばらく間をおいて、顔を伏せ、苦しげに……そいつは言った。
「すみません……」
寸分の狂いもなく複製（コピー）されたシグマの『顔』が、静かに落ちる。
どうして初めから気づこうとしなかったんだ。よりによって俺が。
「すみません、京平さん……！」
震えた声でもう一度、ザザはそう言った。

8

俺はすぐには答えることができずに、ただザザの腕をつかんでいた。
これ以上こいつを見失うことがないように。

「……謝らなくていい」

ようやく舌が動く。まだぎこちなく。

おまえが。おまえが謝まらなくてもいいから。

謝るなら、俺のほうだ。結論を出してやれない俺自身の力のなさに苛立って、いちばん冷たいやりかたでおまえを放りだした。

優しさではなく、必然ではなく、それは俺の逃げと自己満足で。

「リハの間は……あれは、絶対にシグマだったんだ……おまえじゃない」

アリーナホール爆破の真相について俺と話したりできるのは、シグマ本人でなけりゃおかしい。

ならばやっぱり——フェンダーを手にして現れたあたりから。

そうだ……おまえでなかったら誰が俺に、あんなに簡単にギターを手渡したりできるだろう。

「そういえばおまえ、俺をギターでぶん殴っといて謝ろうとしたんだ……」

「……」

「あの時は状況が状況だったから見逃したけど……確かに、シグマらしくない……」

「……すみません」

「謝るなと言っているだろうが！」

「すみま……じゃなくて……」

困ってしまって、ザザはまたしばらく黙る。困らせたかったわけじゃなくて、俺も困る。

「……そうなんです。五曲目の後にコンサートが少し中断しましたよね……あのときにシグマが京平さんの側をはなれて、この控室までギターを取りにきたんです。シグマがひとりになるなんて今しかないと思って……ここにシグマを監禁して、シグマの姿を借りることを思いついて……」

なんでおまえがシグマに化けなきゃならないんだ、そこで。

……ずっと見ていたのか？　俺たちを。

俺の前に現れることを許されなくて……？

「どうして……」

俺はひどく不親切な訊き方をした。

クエスチョンマークひとつだけで、このぐちゃぐちゃな事態を説明させようなんて。

「僕のまわりで、何かが動いていると思えたんです。僕だけを外側において……まるで試すみたいに」

目を伏せたまま、静かに、ザザはそう言った。

「それがなんらかの作為にしたがっていることだけは感じたので、本当のことを知るためには、まず僕は僕自身をシナリオの上から消し去らなければならないと判断して……」

「……」

おまえ……いつの間に、そんなことまで考えて。

洞察力、というのか。直感か。それとも機械的な論理。

「もうひとつ、単純に……シグマの姿だったら京平さんの近くに行けるかなって……」

そこでザザはかすかに笑ったように見えた。片手で顔を覆いながら。

「馬鹿ですね、僕。嘘なんかで、京平さんを騙そうとするなんて……！」

本当に泣きたいとき、おまえはそんな笑い方をする。

絶望がおまえを傷つけたとき、行き場のない痛みと一緒に、それでもおまえは笑うんだ……

それがおまえだから。

「……馬鹿」

俺を責めることなんて知らないおまえだから。

「俺が最後に言ったことなんか信じなくていい。嘘なんだ、全部……」

本気で言えると思うのか、俺に。おまえに失望したなんて。

「……でも……でも、京平さん、僕は」

「俺があんな——後悔してるなんて台詞、本気で言えると思うのか、てめえはっ!?」

……畜生、また怒鳴っちまった。

いつもそうだ。俺は本当のことを言おうとすると感情的にしかならないから、だからそれを

抑えようとして、抑えようとして、ついには本当の気持ちが言えない人間になって。

「京平さん……」

俺を見上げて、わずかに眉をひそめて、ザザは言った。

「でも京平さんのおかげで、僕にはわかったことがあるんです。あのとき京平さんが僕に教えてくれたことのおかげで。だから――」

その瞬間、だった。

不意に言葉を切ってザザが通路側をふりむいた。

視線を追うより早く、俺はザザの腕に思いきり突きはなされていた。

「ザザっ!!」

控室の床に倒れこみながら、俺はそれしか叫べなかった。

俺が見たのは、風のように現れたシグマの残像。

ひらめいた五本の刃。

ドウッ！　とすさまじい高速でふたつの身体が接触した。なにか鈍い音が聞こえた。

これが夢なら、このあたりで醒めなければ嘘だ。

どうして俺はこんな光景を目前にして、ここにいなければならないんだ。

だけど俺の目は鮮明にそのシーンの続きをとらえていた。
愕然として立ち尽くす、シグマの姿を。
「なんで……」
かすれた呟きが届く。
「……なんでおまえ、そのまま……。なんで戦わないっ……!?」
ずるり、とシグマの肩から胸元に、ザザの頬がすべりおちた。
五本の爪に脇腹をつらぬかれ、それきりシグマに身体の全部を預けて——けれどザザは。
武器のサーベルは初めから眠らせたまま。
「……だって……」
ゆっくりと、小刻みに震えながらザザの両腕が持ちあがり、そしてシグマの背中を抱いた。
「だって、おまえは、僕だ」
微笑……?
安らかに笑って、ザザは言葉をつづける。
シグマを抱きしめて、優しく。
「僕は、おまえだ」
「ザ、ザ……?」
信じられない表情でシグマはその名を呼ぶ。

ザザの声が答える。
「なにも違わないんだ。僕たちは、ひとつだ。きっと僕は……おまえみたいになりたかった……」
「……」
強い——強い、激しい光がシグマの瞳をかすめた。
「……そうじゃない……そうじゃない！　ザザ……!!」
長い鋼鉄の爪が、音もなく収納された。とたんに支えを失って崩れそうになるザザの身体をシグマはすばやく両の手でつかまえる。
「俺はおまえに——俺がおまえになりたかった……!!」
きっとそれは。
愛されている存在に。認められている存在に。
それは憎悪と嫉妬と……憧れ。
ザザ。おまえはどうして……。
「京平さん」
シグマの手をかりて床に座りながら、ザザが言った。
「京平さん……ひとつだけ、言わなくちゃ……今、言わなくちゃならないことが……」
そんな——ゆっくり話なんかしている場合なのか。おまえの身体はどうなったんだ。これか

らどうなるんだ。もうこんなことは。こんなことはやめて、早く……。
けれど俺は何も言えなかった。なにもかも麻痺したように。
俺の五感は逃げだすギリギリのところで奴の声だけをとらえていた。声だけを。

京平さん、僕がどうして、シグマを監禁して……すりかわるなんてことが、できたと思いますか？
ずるいやりかたなんです。
シグマがひとりで現れたとき、京平さんの声色をコピーして、後ろから話しかけたんです。
それ以外に不意をついてシグマを倒す方法はないと思って……
だけど違ったんです。京平さんの声を聞いたときの、シグマは……僕が知っているシグマとはまるで違ったんです。
僕が京平さんにギターを渡して言った言葉があるけれど、あの言葉は、そのときシグマが言ったことだったんです。『俺はそんなおまえは嫌いだ』なんて、京平さんのことが好きじゃなかったら絶対に言えない……
それまでシグマのことはずっとわからなかった。敵だとしか思えなくて。だけどシグマは京平さんのことが……好きなんだって思ったら……それを憎む僕はひどく醜くて……

京平さんの言うとおり僕は驕っていました。甘えてたんです。僕は僕の、優亜を大切に思う気持ちだけで走っていたんです。だから今までずっと、京平さんに、真砂くんに、ゼロに、いろんな人に甘えてきて……なのに自分ひとりで少しくらい人間らしくなったような気になっていて……

でも僕はずっと——ちゃんと言えずに今までできてしまったけれど——シグマと同じで、やっぱり僕は……

「あなたが好きです」

ふと目隠しが外れたみたいに、実感が戻った。そこに、この一言がとびこんできた。

「あなたが好きです」

くりかえす。笑顔で、ザザは。

「優亜がいちばん大切です。これからもずっと優亜が好きです。でも、優亜だけが好きだなんて今は言えない」

そんな狭い気持ちじゃ足りないから。……人間には。

「……ああ」

俺は頷いていた。

「それでいいんだ。きっと……それで、いいんだ」
たったひとつの愛と、そしていくつもの愛を胸に抱いて生きていけるのが人間なら。
そう思わないか？　……砂夜子さん。
「どうやらこれで、博士の遺言に決着がつきましたね」
いきなり耳元でやたら客観的なセリフを吐いた奴がいた。あ!?
腕組みなんかして、さらりと。いつの間にか。
「……ゼロ。おまえ、今までどこにいた？」
「天井裏です」
あくまで平然とゼロは定番の回答をよこす。
「二重構造プログラムが消滅して、通常回路にシフトしました。博士の意図は、今のザザの発言によって明らかです。ザザの進歩にはシグマが、シグマの進歩にはザザが必要だということです。……ひいてはお嬢様の成長のために」
「成長？」
「あの方はまだ子供ですから」
大人びた表情で、ゼロは俺を見る。
「無条件に、当然のように愛されることしか知らないのですよ……。けれど人間としてそれは、決して幸せなことではありませんから？……あの方がそのことに気づいてつらくなる前に、

私たちのほうに変革をおこさねばならなかったのです」
そう告げるゼロ自身がどこか、ひとまわり成長して見えるのは俺の気のせいだろうか。
「……お嬢が、シグマを認められるようになればいいってことか？」
「どうでしょうか？　シグマが『良い子』になれば、かもしれませんが」
おまえってなんだか、ジキルとハイドどころか肝っ玉父ちゃんの域に達しつつあるなあ。
「ところで観客はまだ帰っていませんが……」
そこでゼロはがらっと話題を変えた。――そうか、アンコールだ。
「この場は預かります。ザザなら大丈夫です」
本当に大丈夫なのか。問い返そうとした俺に、ゼロは――なんとこのゼロが――笑いかけてみせた。
「大丈夫です。シグマが直前で急所を外したので」
……『良い子』への第一歩か。それが。
それとも『人間』への？
途方に暮れた子供みたいなシグマと、俺をステージに見送ろうとしているザザを、俺はふりかえった。
「……わかった。今のうちに、俺もひとつだけ、言っておいてやる」
天才父娘の生みだした、この三人の兄弟に。

アリーナからの拍手の波を聴きながら。
「おまえたちのことが俺はけっこう……実はすっかり……大好きだったりするんだな。どうだ、こいつはかなり凄いことだぜ?」

9

「おまえって、本っ当っに進歩のない奴……」
体温計を振りつつ真砂くんがぼやいた。
「七針縫ったあとろくにフォローもしねえでろくに食わないでろくに寝ないで十日もフラフラしやがって、そのあげくリハもなんもなしで二時間ステージやったら倒れるに決まってんだろうがっ!! 過労死するぞ、しまいにはっ!!」
「どっちかっつーと知恵熱かしらと俺は思うけども」
布団の中からもごもごと俺は答える。とたんに、てめえに言われたら知恵熱が泣くだろッ、と一喝された。はあ。そうですね。
「ったく、ゼロを信頼して任せるんじゃなかった。あいつ、行動は見守っても生活は見て見ぬフリしてたんじゃねえのかっ。たった十日でこのザマじゃ、ロンドンなんか行かせた日には二週間でミイラができるぜ!?」


cosby

「あー……そのロンドンだけどさ」
ごほごほ。風邪も併発してるな。
「一緒に行こうね。ロンドン。みんなで」
「……え!?」
あっけにとられて、真砂くんがふりかえった。
「おまえ……いっきなり、何……」
「だって俺、真砂の作ったメシじゃないと食えないし。ミイラはいやだし。繊細で病弱だし」
「……あのなあっ！　俺っ！　俺、受験生だぞ、言っとくけどっ!!」
「それだったら平気。俺の契約、期間限定だもん。七月七日は弟の誕生日だから、なんとしてでもその日までに日本に帰しなさい、と、そーゆー条件で」
「七月っ……期末っ……期末試験がっ……」
「あっ、そしたらザザだけ置いていこーか。で、替え玉受験でもなんでも……」
「京平さんっ！　本人がいない所で悪だくみしてないでくださいっ！」
すかさず寝室のドアをぶち開けてザザが乱入してくる。
「だーって真砂が俺のメシを作らんと言うから」
「そうは言ってねえだろ、別にっ!!　……だからっ……あーっ、畜生っ、行けばいいんだろ、行けばっ!!　俺の成績さがったら京平が責任とれよ、しっかりっ!!」

「はいはい、責任とって一生めんどーみさせていただきます」
「よぉぉしッ、言ったからには忘れんなよッ」
なんだか俺は今、熱の勢いにまかせて凄いことを言ったのでは。
……まあいいや。とりあえず、現在の俺の気分がサイコーであることに変わりはなし。
と。ばんっ、とすでに開いてるドアをさらに全開にして、もうひとりが乱入してきた。
「京平っ！　粥の作り方を教えろっ!!」
……病人に言うなって、そういうことは。
「粥だったらザザが得意だったよな、確か」
「そういやそうだったよねえ。鋭いぞ、真砂」
真砂くんと俺がさりげなーく前科者を追いつめる。当のザザは小さく咳払いすると、くるりと方向転換した。
「わかりました、僕が教えます。……シグマ！　それは鍋じゃなくてやかんだよっ」
「ちゃんと食えるやつ教えろよ。京平が食うんだぞ。京平に食わせるんだからなっ」
ガタガタ言いつつ我が家の四人目の家族は、階下の台所へと姿を消す。
因果はめぐるというかなんというか。
「京平に進歩がねえのって、やっぱり環境が原因だよな」
「……さあね」

しみじみおっしゃる真砂くんに、わざとあいまいに答えて、俺は布団にもぐりこんだ。
とても幸せな今日と、それから、きっともっと幸せな明日のために。

――おわり――

あとがき

お待たせいたしました。『XAZSA』の二巻目をお届けします。

完全に「読みきり連作」だった一巻とは趣を変えて、二巻は一本のまとまった物語になっております。

たしか最初は、四話と五話を前後編にして、六話はまた読みきりを書こうと思っていたんですが。（そう、それも京平さんと砂夜子さんの話を予定していたような気が……）

雑誌連載とは何がおこるかわからない、それはそれはおそろしい宇宙空間であることが、今回よーおおおおっ……く、わかりました。あー、怖かった怖かった怖かったー。どうなることかと途方に暮れました。噂には聞いてたけど、本当にあるんですね、連載中に物語がいきなりどでかくなってしまうという悪夢のような現実が。

ああでも結局しめきりが過ぎ去ってしまうと、何が大変で、どこで悩み苦しんだのか、なんにも憶えちゃいないのだ。なんだったんだろう、あれは……。

今でも思い出すのは、六話めを書いている間、とっかえひっかえロックバンドのビデオを見ては何故だかわからないけどやたら泣いて、そして全部の原稿が終わったとき身体はフラフラ頭はカラッポだったのに嘘みたいに幸せだったこと。

やっぱり私はロックが好きで、泣くのもけっこう好きで、そして『XAZSA』という物語とその登場人物たちのことが好きなんでしょうね。

あーあ、恥ずかしいこと言ってるなあ、ひゃひゃひゃひゃ。やめちゃえ。

今回の一人称は、全部、京平さんで通させていただきました。文句なしの主役。もう二度とこんなことないかもしれないから、ごくろうさまでしたと言っておこう。(どーせまた暴れだすんだよ、この人は)

シグマというキャラクターは、いちばん最初の『XAZSA』(File・0)を書いたころからずっとあたためていた奴です。いつか必ず書かねばなるまいと心に決めていたんですが……しかし書きあがったら予想とは正反対のキャラクターになっていた……。よくあることだけど。

あと、ギターとボーカルのユニットってことでSEXIONを出したら、何人かの読者さんから、モデルは現在人気絶頂の某ユニットではないか? という声がよせられましたが……残

念ながら違います。期待してくださった方には申し訳ないんですけど。

（某ユニットがモデルだったら、セクションの二人ももっと『バンド』っぽくなるんじゃないかなー。バンド出身のギタリストと異色ボーカリストの合体といったら、ほら、あの凄い組み合わせがあったじゃんよー。どうして誰も気がつかないんだよー。……まあ、あまりにもセクションとはイメージの違うお二人だし、私もあくまで発想の点でダブらせただけですけども）

とりあえずSEXIONにもZEIT（ツアイト）にも、はっきりモデルと呼べる存在はないです。一応、ZEITは正統派ロックバンドで、カノンは暗黒美学系（わかるかなー？）、というつもりで書いてます。だからSEXIONは『サイケでファンキー』などというとんでもない音楽性のユニットになってしまうのだった。むちゃくちゃな組み合わせだよなあ。いっぺん聴いてみたい。マジで。

『XAZSA』に出てくるミュージシャンたち（名前しか出てこないバンドも含めて）は、けっこう、私の中で勝手に育ってくれています。そのうち、独立した物語として、彼らの話を書くこともできるかもしれない。楽しみなんだけどちょっと怖いような気も……。しかしこれ書かずには死ねないなあ。うーん。

ふと思ったけど、今回のサブタイトルって三本ならべるとまるで『世界ミステリー傑作集』

みたいだ。（笑）

ファントム・オブ・ジ・アリーナは、もちろんガストン・ルルー『オペラ座の怪人』から。ちょうどこの頃『四季』の舞台でやってたというのもあるんですけど。怪人シグマってことで。でもファントムってのはもともと亡霊や幻覚って意味の言葉で、あと有名無実とかいうニュアンスもあるんで、今回の物語全体につかえるタイトルだと思います。

そして誰もいなくなった、は言うまでもなくアガサ・クリスティー。

ロング・グッドバイはレイモンド・チャンドラーの『長いお別れ』。……お別れと言ってしまうと永遠のさよならみたいだけど、私はこの言葉には再会を約束したような響きがあると、勝手に思ってます。

そう、終わりだけど終わりじゃない。シグマの一件は決着がついたけど、『彼ら』は相変わらず元気です。

次の『ＸＡＺＳＡ』がいつ、どこで姿を見せるか、今は私自身にもさっぱりわからない。でも忘れたころにひょっこりどこかで顔を出すはず。それだけは信じられる。

実は、今いちばん多いリクエストが「京平さんと砂夜子さんの出会い編」だったりするんですよ。で、前述したとおり、二人の物語は私の中にしっかりキープされてたりするんだけど。でも、どうかな？　あえて書かないでおいたほうが、砂夜子さんのイメージが広がるかなって気もする。しまっておいたほうが京平さんも幸せかなって気がする。どうですか？　やっぱり

読みたい？　よかったらご希望を聞かせてやってください。

あとは、ゼロとお嬢さんの話あたり、できたら書きおろしたかったけど、今回は時間とページの関係で先送り。残念……。

（というのも六話めがかなり枚数オーバーしちゃって、雑誌発表のときやむなく削った部分を、文庫化にあたってまた戻すという作業が加わったので。ただし現時点での加筆修正は、一巻のときと同じ理由で、最小限に抑えてます）

他にも、かつてサッカー少年やってたはずの真砂くんとか、二巻じゃ名前しか出なかった気の毒な瞳ちゃんとか、いよいよ主人公の座が危うくなってきたザザとか（笑）、書きたい人、やりたいことは、山ほどあります。

ＸＡＺＳＡにだったら、いつでも戻ってこられる。

そう思うから、のんびりと、けっこうわがままな書き方をしてしまうけれど。

こうやって帰れる場所があるのは、やっぱり幸せです。ここは私の大好きな、場所です。

願わくば読んでくださる方々にとっても、ここが安らげる場所でありますように。

（はっ、でも、あんまりのんびりしてたら京平さんが三十歳になってしまう……）

そういえば、どうやったら『ＸＡＺＳＡ』を『ザザ』と読めるのか、これっていったい何語

なのか、と悩んでいる読者さんがけっこういらっしゃいましたね。いや……マシノイドの名前はみんな、オリジナルの造語です。綴りは一応、英語の読み方をひねったものになってるんですが。

ただ、ザザって名前には由来があります。早稲田駅の近くにみつけた「ZSA／ZSA」という美容院の名前を、私がどうしても読めなかったというのがきっかけです。……お恥ずかしい。でも知らなかったら「ズザズザ」としか読めんよ、やっぱり。

XAZSAなんてカッコつけたタイトルで、機械人間が主役で、都会が舞台で、だからきっとすごいハードボイルドのSFアクションだわ、と思っていた人も少なくなかったらしい。設定だけならその可能性もあったんですけど、まあ……なにしろ登場する皆さんが皆さんですからねえ……。今回ちょっとハードをねらったものの、結果は見てのとおり。きっとこれが、XAZSAのXAZSAたるゆえんなんでしょうね。

この三話ぶんの連載は、前回同様たくさんの方々に応援をいただいて、本当に本当にうれしかったです。半年間じっと見守ってくださった皆さんに、心から御礼申しあげます。

それから、一巻を読んでお手紙をくださった皆さんにも、深い感謝の気持ちをおかえししたいです。返事は気長に待っててくださいね。（返信用封筒を同封してくださった方には、早め

にお返事してます。その他のお手紙はまず整理して宛(あ)て名を書かねばならないので、かなり遅れます。ごめんなさい）

お手紙は、大好きです。気が向いたときにいつでも、どんなことでも、書いてもらえるとうれしいです。

じゃ、そろそろ、このあたりで。

冬も近づいてきたようですが。受験生の人には、特に熱いエールを送ろう。頑張(がんば)ってね。

この本を読んでくださって、ありがとう。

また、すぐに、会えることを祈って。

若木未生

この作品のご感想をお寄せください。

若木未生先生へのお手紙のあて先

〒101―50　東京都千代田区一ッ橋2―5―10

集英社コバルト編集部　気付

若木未生先生

わかぎ・みお
1968年12月2日、埼玉県生まれ。射手座、A型。1989年4月『AGE』で、第13回コバルト・ノベル大賞佳作入選。好きなものはマンガと音楽。現在、特に傾倒するマンガ家は喜国雅彦氏。仕事の合間に猫2匹と格闘する日々をすごしている。苦手なものは料理。コバルトシリーズに『天使はうまく踊れない』『セイレーンの聖母』『十字架の少女』『迷える羊に愛の手を』『炎獄のディアーナ 前・後編』『エクサール騎士団①、②』『XAZSA ver.1』『天冥の剣①』などがある。



XAZSA ―ザザ― ver.2

COBALT-SERIES

1992年11月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　若木未生

発行者　若菜正

発行所　株式会社 集英社
〒101-50
東京都千代田区一ツ橋2―5―10
(3230)6268(編集)
電話　東京(3230)6393(販売)
(3230)6080(制作)

印刷所　株式会社美松堂
中央精版印刷株式会社

© MIO WAKAGI 1992
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本はご面倒でも小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-611695-2 C0193

コバルト文庫
〈好評発売中〉

夢みる機械人間（マシノイド）！



夜の銀座の街角で、休業中のギタリスト早水京平が偶然に出会った少年・ザザ。不思議な魅力をもつ彼は、天才少女・優亜（ゆあ）（トップシークレット）によって作られた国家機密級の機械人間（マシノイド）だった！ ひとつの大きな夢のために、人間になろうと保護下をとびだしたザザは、事件に…。人気のシティサイバーファンタジー。

僕はザザ——。人間を

XAZSA（ザザ）ver.1

若木未生
イラスト／田村純子



コバルト文庫

〈好評発売中〉



天使はうまく踊れない

高一生の亮介のまわりに、奇妙な奴らが現れはじめた…。

セイレーンの聖母

十九郎が狙われた！　とてつもない妖力に忍は。

十字架の少女

諒の妹・彩を迎えて、亮介たちは軽井沢で合宿を。

迷える羊に愛の手を

転校先での諒の生活は!?　オムニバス形式の番外編。

炎獄のディアーナ〈前編〉〈後編〉

女の子を狙う髪切り事件の背後に、恐るべき妖者が！

天冥の剣 1

吸血鬼殺人とよばれる通り魔事件に、希沙良と諒は…。

術者VS妖者！
いま大人気の
アクション・
ファンタジー。



若木未生の本

「ハイスクール・オーラバスター」
イラスト／杜 真琴

コバルト ノベル大賞 募集中！

『COBALT』編集部では、「コバルト・ノベル大賞」を募集しています。この賞は、才能ある作家志望のかたを、新人作家として世に送り出すためばかりではなく、小説を書くことの楽しさ、創作することの喜びを広く若いかたたちにも味わっていただきたい、という願いもこめて設置されたものです。

ロマンの新しい時代を切りひらく、あなたのフレッシュな力作100枚前後（400字詰原稿用紙95枚以上105枚以下）を、お待ちしております。

〈入選作〉 **正賞の盾と副賞100万円**

〈佳　作〉 **正賞の盾と副賞 50万円**

応募要項は隔月刊「COBALT」に毎号掲載されています。

恋を夢みる乙女のための小説誌！

［コバルト］

Cobalt

1月、3月、5月、
7月、9月、11月の
18日発売！

隔月刊ですので、お求めになりにくいこともあります。あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

●「コバルト短編小説新人賞」「ショート・ショート」を毎号募集しています。